箱　崎　36

—箱崎遺跡第47次・第55次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1046集

2009

福岡市教育委員会

HAKO ZAKI

箱 崎 36

—箱崎遺跡第47次・第55次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1046集

2009

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

福岡市は古くから東アジアとの対外交渉の窓口として発展してきました。このような環境のもとに数多くの埋蔵文化財が残されており、本市におきましてはこの保護と活用に努めているところであります。

本書は東区馬出５丁目における都市計画道路馬出東浜線建設に伴い実施した箱崎遺跡第47次・第55次調査の記録です。調査の結果、多量の貿易陶磁器や瓦の出土を含め、古墳時代から中世の箱崎の歴史を知るうえで多くの貴重な資料を得ることができました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財保護のご理解の一助として、また研究資料として役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり道路下水道局をはじめとする多くの方々のご理解、ご協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表する次第です。

平成２１年３月３１日

福岡市教育委員会
教育長　山田　裕嗣

箱崎遺跡の位置と環境

本文目次

Ⅰ．位置と環境 …… 1
Ⅱ．これまでの調査 …… 4

挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図（1/25,000） …… 2
第2図　箱崎遺跡調査区位置図（1/5,000） …… 3

箱崎遺跡第47次調査の記録

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 7
　1．調査に至る経過 …… 7
　2．調査の組織 …… 7
Ⅱ．発掘調査の記録 …… 8
　1．発掘調査の概要 …… 8
　2．A区 …… 8
　　(1) 土坑 …… 9
　　(2) 溝状遺構 …… 10
　　(3) A区出土遺物 …… 22
　3．B区 …… 22
　　(1) 井戸 …… 26
　　(2) 土坑 …… 53
　　(3) 溝状遺構 …… 55
　　(4) B区出土遺物 …… 55
　4．C区 …… 60
　　(1) 井戸 …… 60
　　(2) 土坑 …… 67
　　(3) 溝状遺構 …… 87
　　(4) C区出土遺物 …… 87
　5．箱崎遺跡第47次調査出土の碧玉剥片類について …… 89
Ⅲ．おわりに …… 92

挿図目次

第1図　第47次A・B区調査区位置図(1/500) …… 9
第2図　A区遺構配置図（1/100） …… 10
第3図　A区土層実測図（1/50） …… 11
第4図　SK1・4・5・9・19・80実測図（1/40） …… 12
第5図　SK81・82・101・102実測図（1/40） …… 13
第6図　SK4・5・9出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 14

第7図　SK80・81・102出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 15
第8図　SD20・25・73土層実測図（1/40）…… 16
第9図　SD20・25・72出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 17
第10図　SD73出土遺物実測図①（1/3）…… 18
第11図　SD73出土遺物実測図②（1/4）…… 19
第12図　A区出土遺物実測図①（1/3・1/4）…… 20
第13図　A区出土遺物実測図②（1/3・1/4）…… 21
第14図　B区遺構配置図（1/100）…… 23
第15図　B区土層実測図（1/50）…… 24
第16図　SE130実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 25
第17図　SE131実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 26
第18図　SE132・136実測図（1/40)および出土遺物実測図（1/3）…… 27
第19図　SE148・149実測図（1/40）…… 28
第20図　SE148・149出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 29
第21図　SE241実測図（1/40）…… 30
第22図　SE241出土遺物実測図①（1/3）…… 31
第23図　SE241出土遺物実測図②（1/4）…… 32
第24図　SE241出土遺物実測図③（1/4）…… 33
第25図　SE241出土遺物実測図④（1/4）…… 34
第26図　SE241出土遺物実測図⑤（1/4）…… 35
第27図　SE241出土遺物実測図⑥（1/4）…… 36
第28図　SE241出土遺物実測図⑦（1/4）…… 37
第29図　SE241出土遺物実測図⑧（1/4）…… 38
第30図　SE241出土遺物実測図⑨（1/4）…… 39
第31図　SE241出土遺物実測図⑩（1/4）…… 40
第32図　SE241出土遺物実測図⑪（1/4）…… 41
第33図　SE241出土遺物実測図⑫（1/4）…… 42
第34図　SE244・257実測図（1/40）…… 43
第35図　SE244・257出土遺物実測図（1/3）…… 44
第36図　SE361実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）…… 45
第37図　SE367実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 46
第38図　SE382実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）…… 47
第39図　SE612実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 48
第40図　SE613実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）…… 49
第41図　SE614実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 50
第42図　SE620実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 51
第43図　SE621実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 52
第44図　SK134・135・210・213・366・615実測図（1/40）…… 54
第45図　SK134出土遺物実測図（1/3）…… 55
第46図　SK135出土遺物実測図（1/3）…… 56
第47図　SK210・213・366・615出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 57
第48図　SD611土層実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）…… 58
第49図　B区出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 59
第50図　第47次C区調査区位置図（1/500）…… 60
第51図　C区遺構配置図（1/150）…… 61

第52図　C区土層実測図（1/50）…… 62
第53図　SE407実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）…… 63
第54図　SE419実測図（1/40）…… 64
第55図　SE419出土遺物実測図①（1/3・1/4）…… 65
第56図　SE419出土遺物実測図②（1/4）…… 66
第57図　SE460実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）…… 67
第58図　SK408実測図（1/40）…… 69
第59図　SK408出土遺物実測図①（1/3・1/4）…… 70
第60図　SK408出土遺物実測図②（1/4）…… 71
第61図　SK408出土遺物実測図③（1/4）…… 72
第62図　SK408出土遺物実測図④（1/4）…… 73
第63図　SK408出土遺物実測図⑤（1/4）…… 74
第64図　SK409・410・445・447・455・479・480実測図（1/40）…… 75
第65図　SK410・447出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 77
第66図　SK479・480出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 78
第67図　SK485実測図(1/40)…… 79
第68図　SK485出土遺物実測図①（1/3）…… 80
第69図　SK485出土遺物実測図②（1/3）…… 81
第70図　SK485出土遺物実測図③（1/3）…… 82
第71図　SK485出土遺物実測図④（1/3）…… 83
第72図　SK485出土遺物実測図⑤（1/3）…… 84
第73図　SK493・501・510・570・571・574実測図（1/40）…… 85
第74図　SK501・510・570出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 86
第75図　SD401実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）…… 87
第76図　C区出土遺物実測図（1/4）…… 88

図版目次

図版１　（1）A区東半区全景（東から）　（2）A区西半区全景（西から）
図版２　（1）SK1（北から）　（2）SK4（東から）
（3）SK5（北から）　（4）SK5完掘状況（北から）
（5）SK80（西から）　（6）SD25土層（南から）
（7）SD73土層（南から）　（8）SD73（西から）
図版３　（1）SD73（北から）　（2）B区全景（西から）
図版４　（1）B区東側全景（西から）　（2）B区西側全景（西から）
図版５　（1）SE130（北から）　（2）SE131（東から）
（3）SE136（南から）　（4）SE148・149（北から）
（5）SE148井筒（東から）　（6）SE241（西から）
（7）SE241井筒（西から）　（8）SE244（西から）
図版６　（1）SE257（西から）　（2）SE361（南から）
（3）SE367（西から）　（4）SE367井筒（東から）
（5）SE382（西から）　（6）SE612（南から）
（7）SE613（西から）　（8）SE613井筒（西から）
図版７　（1）SE614（東から）　（2）SE620（南から）
（3）SE621（東から）　（4）SK134（南から）

(5) SK135（西から）　(6) SK210（北から）
(7) SK213（南から）　(8) SK366（南から）
図版８　(1) SK615（北から）　(2) SD611配石（SX147）（西から）
(3) Ｂ区出土遺物
図版9　(1) Ｃ区西半区全景（東から）　(2) Ｃ区東半区全景（東から）
図版10　(1) SE407（北から）　(2) SE419遺物出土状況①（西から）
(3) SE419遺物出土状況②（西から）　(4) SE419（北東から）
(5) SE460（東から）　(6) SK408（北から）
(7) SK408（東から）　(8) SK408断面（北から）
図版11　(1) SK409（東から）　(2) SK410（西から）
(3) SK479（西から）　(4) SK480（西から）
(5) SK485（東から）　(6) SK510（北東から）

箱崎遺跡第55次調査の記録

1区の調査

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 107
1．調査に至る経緯 …… 107
2．調査の組織 …… 107
Ⅱ．調査の記録 …… 108
1．調査の概要 …… 108
2．遺構と遺物 …… 111
Ⅲ．1区のまとめ …… 128

挿図目次

第1図　調査区の位置（1）（1／3,000） …… 108
第2図　調査区の位置（2）（1／400） …… 109
第3図　55次1区・2区（1／600） …… 109
第4図　遺構配置（1／200） …… 110
第5図　SD（1／200） …… 112
第6図　SD土層（1／40） …… 113
第7図　SD001出土遺物（1／3） …… 114
第8図　SD002・004・064・089出土遺物（1／3） …… 115
第9図　SD055・118・125出土遺物（1／3） …… 115
第10図　SD130・180出土遺物（1／3） …… 117
第11図　SK141（1／3） …… 119
第12図　SK（1／40） …… 120
第13図　SK出土遺物（1／3） …… 121
第14図　SX173（1／3） …… 123
第15図　SX173出土遺物（1／30） …… 123
第16図　SP出土遺物（1／3） …… 124

第17図　包含層出土遺物（1／3）…… 125
第18図　包含層出土遺物（1／3）…… 126
第19図　その他の出土遺物（1／3）…… 127

図版目次

図版1　上　a区全景（南東から）　下　b・c区全景（北西から）
図版2　上　a区（東から）　下　a区（南東から）
図版3　上　b区（北西から）　下　b区（北西から）
図版4　上　c区（北西から）　下　c区（南西から）
図版5　上　a区SD（南東から）　下　a区SD（北西から）
図版6　上　SD土層（東から）　下　a区SD土層（北西から）
図版7　上　SD055（北から）　下　b区SD（北西から）
図版8　上　b区SD（南東から）　下　SD002遺物出土状況（南東から）
図版9　上　SX173（南西から）　下　SX173（南から）
図版10　上　SK034・036（東から）　下　SK036（北から）
図版11　上　SK141・145（北東から）　下　SK141（北西から）
図版12　上　SK034（南から）　下　SK031（北東から）
図版13　上　SK138（南東から）　下　SX173周辺（南から）
図版14　上　SK145・160（北西から）　下　SK145（北東から）

2区の調査

本文目次

1．調査の概要 …… 145
2．遺構と遺物 …… 146
3．2区のまとめ …… 149

挿図目次

第1図　2区全体図（1／200）…… 145
第2図　調査区北壁土層断面（1／80）…… 146
第3図　遺構配置図（1／100）…… 147
第4図　出土遺物実測図（1／3）…… 148

図版目次

写真1　A区全景（南から）…… 150
写真2　A区全景（北西から）…… 150
写真3　SD01土層断面（南から）…… 151
写真4　A区とその西側（東から）…… 151
写真5　B区全景（南から）…… 152
写真6　B区全景（西から）…… 152

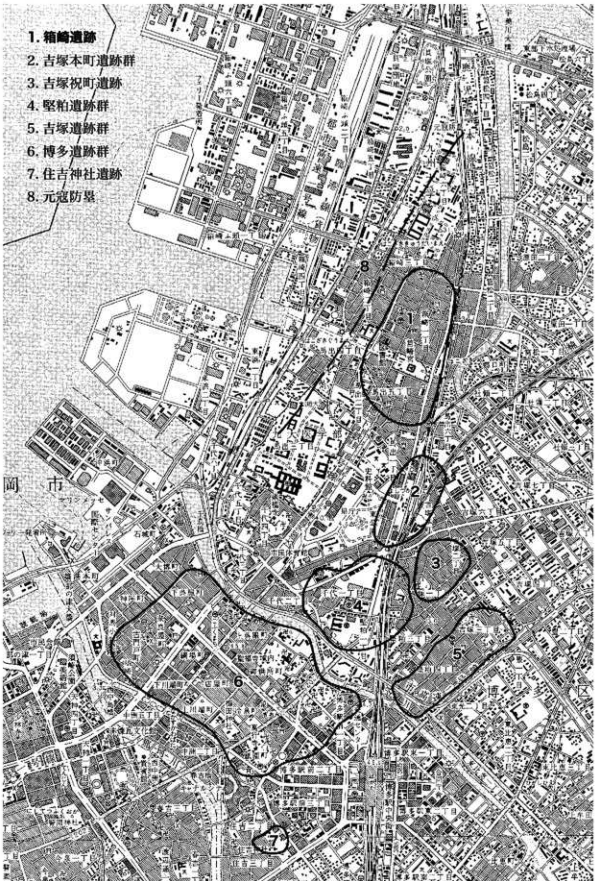
箱崎遺跡の位置と環境

Ⅰ．位置と環境

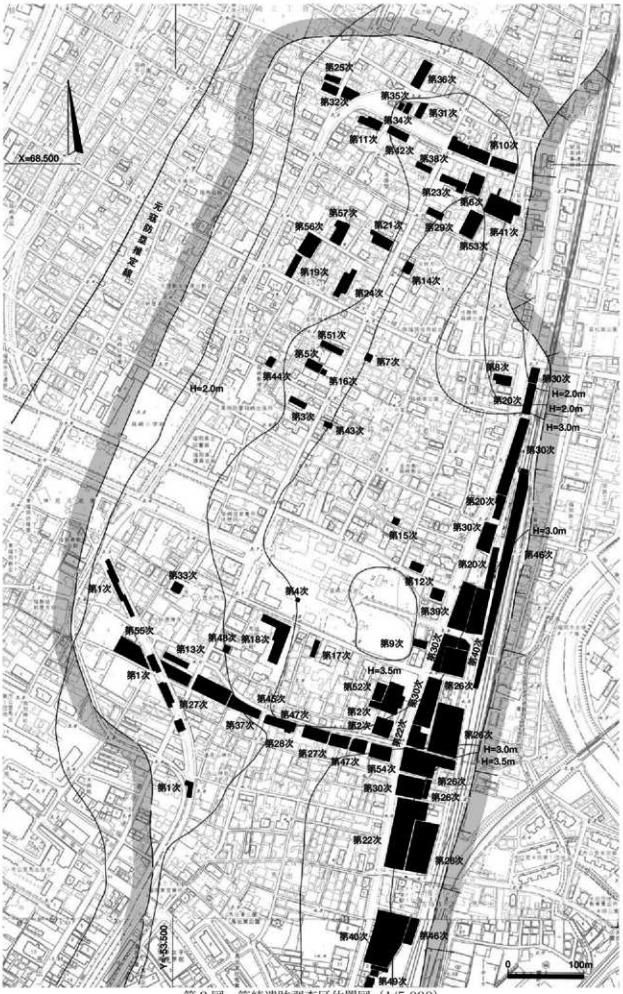
箱崎遺跡は宇美川下流域、多々良川河口左岸の博多湾に面し、南北に延びる砂丘上に位置する。この砂丘は箱崎砂層と呼ばれ、本遺跡付近から室見川河口付近まで分布しており、本遺跡を含め多くの遺跡が立地している。砂丘の形成時期は考古学的及び地質学的調査成果から縄文時代後期以降と考えられている。本遺跡が分布しているのは概ね南北 1000m 、東西 500m の範囲で標高 2.0 ～ 3.5m を測る。

本遺跡は 1983 年の地下鉄建設に伴う第 1 次調査以来、60 次を越える調査が行われているが、調査が本格化するのは 1990 年代以降で、縄文時代晩期～近世に至る各時期の遺構、遺物が確認されている。縄文時代晩期～弥生時代は第 6 次調査において出土した磨製石斧が最も古く、縄文時代晩期～弥生時代前期初頭のものと考えられるが、該期の遺構に伴わない。弥生時代中期～後期の土器は 18・30 次調査で確認されている。古墳時代は竪穴住居や円形及び方形周溝墓等が確認されている。8 次調査では飯蛸壺を多量に出土しており、生業を考える上で興味深い。奈良時代になると遺物は散見されるものの遺構については判然としない。10 世紀に入ると以降の箱崎遺跡の中心となる筥崎宮が創建される。延喜 21 年に八幡神の託宣により、穂波郡大分宮から遷座して延長元年に建てられたとされる。それは大分宮の節会に参詣する大宰府の役人が竈門宮に不敬を行う、郡司百姓等が饗膳するのに険しい山越えをしなければならない、放生会を行うのに海ではないため不適当であるという 3 つの理由からとされる。しかし実際のところ、新羅に対する宗教的防御や、この地が対外貿易の地点として重要であったことも大きく作用したと考えられている。この時期の遺構は後の時期に比べきほど多くなく、筥崎宮の東を中心に分布する。これ以降遺跡は西側に拡大して行き、13 世紀代以降にはほぼ全域に分布する。また 25・32・36 次調査によって遺跡の範囲が北及び北東側に拡大することが確認されている。

周辺の遺跡をみると南へ続く砂丘上に吉塚本町遺跡群、吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群、吉塚遺跡群、博多遺跡群が存在している。吉塚本町遺跡群は弥生時代～古代にかけての遺物、遺構が確認されている。出土する瓦や硯から公的施設の存在が考えられている。吉塚祝町遺跡は道路建設に伴って 1996 年に確認された遺跡である。遺跡を縦断するように行われた第 1 次調査では弥生時代から中世に至る各時期の遺構が確認され、弥生時代の甕棺墓、古墳時代の住居址、横穴式石室、石棺墓、土壙墓、古代～中世の集落が検出されており、古代においては越州窯系青磁が多量に出土しており注目されている。中世については 13 世紀～ 14 世紀前半を中心に栄え、それ以降急速に衰退する。堅粕遺跡群は吉塚本町遺跡群の南に位置し、弥生時代～古代にかけての遺構が確認されている。北側に弥生時代～古墳時代の遺構が集中し、南側に古墳時代後期から古代の遺構が多くみられる。古代においては越州窯系青磁、緑釉陶器、墨書土器等の出土遺物から公的施設が存在する可能性が考えられている。吉塚遺跡群は吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群の南東に位置し、弥生時代～近世に至る遺物、遺構が検出されている。特筆すべき遺物として貨泉の出土が挙げられる。吉塚遺跡群の南には国際貿易都市として中世を代表する遺跡の一つであり、箱崎遺跡と関係の深い博多遺跡群が位置する。出土する貿易陶磁器類は質、量共に他を圧倒している。調査はすでに 150 次を超え、弥生時代～近世に至る遺構、遺物が確認されている。さらに南には住吉神社遺跡が位置する。2004 年に第 1 次調査が行われ、中世の遺構が確認されている。



第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000）



第２図　箱崎遺跡調査区位置図（1/5,000）

Ⅱ．これまでの調査

調査次数	所在地	面　積	調査期間	時　期	主な遺構	報告書
第1次	馬渕5丁目地内	5000㎡	1983.7.4～12.18	12世紀後半～15世紀	井戸　土坑　溝　埋葬遺構	第193集
第2次	箱崎1丁目18-32外	1500㎡	1986.11.22～1987.1.29	10世紀後半～15世紀	建物地業　建物布掘状遺構　井戸　土坑　溝　粘土層　集石遺構	第79集(県)
第3次	箱崎1丁目731-1	156㎡	1990.1.09～2.21	12世紀中頃～15世紀	井戸　土坑　溝	第262集
第4次	箱崎1丁目761		1989.7.5	11世紀	土坑(瓦礫)	年報Vol.4
第5次	箱崎1丁目25-27	210㎡	1991.9.9～10.30	12世紀～15世紀	掘立柱建物　欅列　井戸　土坑　埋葬遺構	第273集
第6次	箱崎3丁目437-1,4	430㎡	1994.10.20～1995.1.31	12世紀後半～13世紀	井戸　土坑　溝	第459集
第7次	箱崎1丁目711外	85㎡	1994.11.15～12.27	12世紀前半～13世紀	井戸　土坑	第459集
第8次	箱崎1丁目549-1外	225㎡	1996.10.1～11.14	古墳時代　12世紀中頃～13世紀	古墳時代の竪穴住居　土坑　中世の溝　井戸　土坑	第591集
第9次	箱崎1丁目1935-1	191㎡	1996.10.2～10.29	11世紀～13世紀	井戸　土坑　溝	第550集
第10次	箱崎3丁目地内	1020㎡	1996.11.11～1997.3.31	12世紀前半～13世紀	井戸　土坑　溝	第551集
第11次	箱崎3丁目3266-1外	385㎡	1997.4.30～6.27	12世紀後半～14世紀	井戸　土坑　ピット	第592集
第12次	箱崎1丁目2606-1,3	155㎡	1997.8.19～9.22	11世紀～13世紀	井戸　土坑　溝　埋葬遺構	第950集
第13次	馬渕5丁目520-521	297㎡	1997.10.27～12.2	15世紀	掘立柱建物　井戸　土坑　溝	第592集
第14次	箱崎1丁目28-15	36㎡	1998.4.2～5.23	12世紀後半～14世紀前半	土坑　溝	第625集
第15次	箱崎1丁目615	36㎡	1998.5.25～6.5	11世紀後半～12世紀	土坑　溝	第810集
第16次	箱崎1丁目725	56㎡	1999.1.18～1.29	11世紀～15世紀	井戸　土坑	第703集
第17次	箱崎1丁目20-19	40㎡	1999.3.13～3.31	12世紀中頃～17世紀	土坑　溝　ピット	第704集
第18次	馬渕5丁目470	920㎡	1999.6.14～9.28	12世紀中頃～16世紀	井戸　土坑　溝	第664集
第19次	箱崎1丁目2940-1	160㎡	1999.7.29～8.27	12世紀後半～14世紀	掘立柱建物　井戸　土坑　溝	第664集
第20次	箱崎1丁目地内	882㎡	1999.12.13～2000.3.31	古墳時代　11～13世紀	古墳時代の竪穴住居　中世の溝　井戸　土坑　埋葬遺構	第768集
第21次	箱崎1丁目480	545㎡(2期)	2000.3.29～6.26	12世紀中頃～14世紀	掘立柱建物　井戸　土坑　溝　埋葬遺構	第705集
第22次	馬渕5丁目・箱崎1丁目	2976㎡	2000.7.24～2001.3.31	古墳時代　古代末～中世	古墳時代の竪穴住居　埋葬以降　古代末～中世の溝　井戸　土坑　埋葬遺構	第811集
第23次	箱崎3丁目404	188㎡	2000.9.22～2000.11.2	13世紀～17世紀	井戸　土坑	第704集
第24次	箱崎1丁目511外	397㎡	2000.10.23～2001.1.31	12世紀後半～14世紀	井戸　土坑　木桶墓	第768集
第25次	箱崎3丁目地内	87㎡	2001.4.16～4.26	13世紀後～14世紀	土坑	第896集
第26次	箱崎1丁目地内	5253㎡	2001.5.5～2002.3.29	古墳時代　11～13世紀	古墳時代の周溝墓　中世の溝　井戸　土坑　埋葬遺構	第816集
第27次	馬渕5丁目地内	1449㎡	2001.6.7～2002.2.10	12世紀～近世	井戸　土坑　溝　埋葬遺構	第812集
第28次	馬渕5丁目24-8	41㎡	2001.7.2～7.12	中世後半	土坑　ピット	整理中
第29次	箱崎3丁目2388外	80㎡	2002.4.1～2002.4.26	12世紀～13世紀	土坑　溝　池状遺構	第813集
第30次	箱崎1丁目地内	4997㎡	2002.4.9～2003.5.13	古墳時代　古代末～中世	古墳時代　竪穴住居　古代末～中世　掘立柱建物　井戸　土坑　溝	第948集
第31次	箱崎3丁目3358-1	80㎡	2002.5.9～2002.6.14	12世紀～13世紀	井戸　土坑　溝	第813集
第32次	箱崎3丁目地内	442㎡	2002.4.22～9.20	13世紀～	井戸　土坑　溝　埋葬遺構	第896集
第33次	馬渕5丁目502-503	160㎡	2002.9.24～10.8	12世紀～	井戸　土坑　溝　埋葬遺構	整理中
第34次	箱崎3丁目3356-1	70㎡	2002.11.14～12.2	12世紀後～14世紀	井戸　土坑	整理中
第35次	箱崎3丁目9-33	32㎡	2002.12.2～12.10	13世紀後～14世紀	井戸　土坑	整理中
第36次	箱崎3丁目3380	199㎡	2002.12.11～2003.2.21	14世紀～15世紀	井戸　土坑　溝	整理中
第37次	馬渕5丁目地内	493㎡	2002.12.13～2003.3.31	12世紀～	井戸　土坑　溝	第951集
第38次	箱崎3丁目9-49	90㎡	2003.2.3～3.8	13世紀～近世	井戸　土坑	第814集
第39次	箱崎1丁目3931外	149㎡	2003.4.10～5.9	12世紀代	井戸　土坑　溝	第854集
第40次	箱崎1丁目地内・馬渕1丁目30	2900㎡	2003.5.14～	縄文時代前期　古墳時代　8～13世紀	井戸　土坑　溝　掘立柱建物　小石室　方形状の溝　円形竪穴状遺構	第949集
第41次	箱崎3丁目2426外	1000㎡	2003.9.16～12.11	12世紀後半～13世紀	井戸　土坑　溝　埋葬遺構	第854集
第42次	箱崎3丁目	260㎡	2003.10.21～2004.1.21	12～14世紀	井戸　土坑　溝　方形竪穴状遺構	第896集
第43次	箱崎1丁目697-1	83㎡	2003.11.21～12.5	11世紀～12世紀	土坑　ピット	整理中
第44次	箱崎1丁目35-3	114㎡	2004.2.16～3.15	12～14世紀	井戸　土坑　ピット	第854集
第45次	馬渕5丁目地内	152㎡	2004.3.1～3.22	12～13世紀	井戸　土坑　ピット	第951集
第46次	箱崎1丁目地内	3000㎡	2004.7.1～	古墳時代前期末,11世紀～15世紀	井戸　土坑　溝	第948集
第47次	馬渕5丁目地内	1000㎡	2004.7.21～2005.4.13	古墳時代前期　古代末～中世後半	井戸　土坑　溝	第1046集
第48次	馬渕5丁目461-1	87㎡	2004.11.26～11.28	近世	土坑　ピット	整理中
第49次	馬渕1丁目530地内	495㎡	2005.4.1～2006.2.13	古墳時代,12～14世紀	井戸　土坑　ピット　溝　埋葬遺構　方形竪穴状遺構	第949集
第50次	馬渕5丁目461-1	69㎡	2005.5.12～6.4	中世後半～近世	掘立柱建物　井戸　土坑　溝状遺構　柱穴	整理中
第51次	箱崎1丁目36-37	257㎡	2006.1.16～	11～13世紀	整地層　井戸　土坑　柱穴	第952集
第52次	箱崎1丁目1925他	351㎡	2006.6.19～8.28	弥生後期～古墳前期 12～13世紀	住居?　井戸　土坑　溝　柱穴	第997集
第53次	箱崎3丁目2442-1	495㎡	2006.10.10～12.1	16世紀以降	井戸　土坑　溝　ピット	第996集
第54次	馬渕5丁目地内	333㎡	2006.10.26～2007.2.28	10世紀後半～15世紀後半	井戸　土坑　溝	第998集
第55次	馬渕5丁目地内	545㎡	2007.2.1～5.29	12世紀後半～近世	土坑　溝　ピット	第1046集
第56次	箱崎1丁目2505他	424㎡	2007.2.1～4.27	13世紀～14世紀	井戸　土坑　溝	整理中
第57次	箱崎1丁目493他	245㎡	2007.3.12～4.27	13世紀	井戸　土坑　溝　石敷遺構　石組土坑	第999集

箱崎遺跡第 47 次調査の記録

例　言

1. 本書は福岡市教育委員会が都市計画道路馬出東浜線建設に伴い、東区馬出５丁目地内において実施した箱崎遺跡第47次調査の報告書である。
2. 本書で報告する各調査の調査番号、遺跡略号は以下のとおりである。

	調査番号	遺跡略号
第47次調査	0437	ＨＫＺ－４７

3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は中村啓太郎、安藤史郎が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は調査担当者、丸尾弘介、景山貴昭、田北健三、前川隆輔、山下夏希、斉木由佳、谷澤亜利、早川和賀子が行い、碧玉の実測は吉留秀敏氏に依頼した。
   また、一部を㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
5. 本書に掲載した挿図の製図は調査担当者の他、林由紀子が行った。
6. 本書に掲載した遺構、遺物写真の撮影は調査担当者が行った。
7. 本書で記述する出土遺物の分類は以下の文献を参考とした。
   太宰府市教育委員会「大宰府条坊跡ＸＶ」太宰府市の文化財第49集
   九州歴史資料館「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧」
8. 本調査に関わる記録、遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。
9. 執筆はⅡ－３－（４）「箱崎遺跡第47次調査出土金属製櫛の材質調査結果」を比佐陽一郎が、Ⅱ－５を吉留秀敏が行い、他を中村が行った。

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経過

平成 10 年 6 月 24 日、福岡市土木局東部建設第 1 課（現　道路下水道局東部道路整備課）より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現　埋蔵文化財第 1 課）へ都市計画道路馬出東浜線建設に伴う福岡市東区馬出・箱崎地内における埋蔵文化財の事前審査について依頼がなされた。これを受けた埋蔵文化財課では事業計画地が東側では周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれ、西側では元寇防塁の推定ラインにかかることから試掘および確認調査が必要であるとの判断がなされた。用地買収が行われた地点より試掘および確認調査を順次行い、その結果、分布地図上の箱崎遺跡とほぼ同じ範囲で井戸、土坑、ピット等の遺構が検出された。この成果をもとに協議を重ねたが現状での設計変更は不可能であり、恒久的工作物との判断から、調査可能な面積がある程度まとまって確保できる平成 13 年度より調査を開始した。第 47 調査は平成 16 年 7 月 21 日より開始し、平成 17 年 4 月 13 日に終了した。

2．調査体制

(平成 16 年度)

事業主体　福岡市土木局道路建設部東部建設課
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　埋蔵文化財課長　山口譲治
　　調査第 2 係長　池崎譲二
事前審査　事前審査係長　濱石哲也
　　事前審査係　　井上繭子
調査庶務　文化財整備課管理係　御手洗清
調査担当　調査第 2 係　中村啓太郎
発掘作業　小川秀雄　園田豊　徳永栄彦　吹春哲男　宮崎雅秀　井上ヨシ子　田中フキ子
　　光安晶子　田端名穂子　中村幸子　花田則子　安藤史郎　阿部純子　福崎龍也
　　崎村雄介　永松弘恵　野田トヨ子　花田昌代　藤澤義一

(平成 17 ～ 20 年度)

調査員　丸尾弘介
整理作業　有島美江　林由紀子　岩隈香欧里　柴田志乃　宮崎まり子　渡辺敦子　景山貴昭
　　田北健三　前川隆輔　山下夏希　斉木由佳　谷澤亜里　早川和賀子

Ⅱ．発掘調査の記録

1．発掘調査の概要

遺跡の南部、箱崎八幡宮の南約 150m の地点に位置する。

今回報告する第 47 次調査は箱崎遺跡の南を東西に横断するように計画された都市計画道路 馬出東浜線建設に伴うものである。建設道路が遺跡にかかる東西方向の長さは約 550 m と考えられるが、この区間の用地取得が数年に渡って行われたため、先行して買収された地点から試掘調査及び本調査を随時行うこととなった。

尚、試掘調査の結果、分布地図上の箱崎遺跡内では遺構が確認されているが元寇防塁ついては現時点では確認されていない。

調査区は第２図に示した３地点で、調査順にＡ区、Ｂ区、Ｃ区とした。３地点とも安全及び防塵対策のため調査区周囲にメッシュシートによる仮囲いを行った。このため調査対象面積に比べ、実際の調査面積はかなり少ないものとなっている。３地点を合わせた調査面積は 1071 ㎡である。調査は条件整備の整った平成 16 年７月 21 日から重機によるＡ区の表土剥ぎから開始した。掘削土処理を調査予定地内で行わざるを得なかったため、反転して行った。その後人力による遺構検出、掘削、実測、写真撮影、遺物取り上げ等を行った。その後埋め戻しを行い、Ｂ区へ着手した。Ｂ区は調査区内での掘削土処理が困難であったため、Ａ区を土置場として調査を行った。Ｂ区からＣ区に移る際、Ｃ区内に水道管が残っていることが判明したため、その扱いを巡って調査が一時中断した。協議の結果、時間的都合から水道管を残しての調査となった。Ｃ区は掘削土の一部をＢ区の埋め戻しに用い、まず西側２／３の調査を行い、その後反転して東側の調査を行い、埋め戻し、仮囲い、事務所の撤去を行い平成 17 年４月 13 日に終了した。

検出遺構は井戸、土坑、溝、柱穴等である。遺物は土師器、貿易陶磁器、瓦等を中心にコンテナ 240 箱出土した。

遺構番号はＡ区を１～113、Ｂ区を 114 から、Ｃ区を 401 から付し、遺構の性格に関わらず通し番号としたが、一部に欠番が生じている。またＡ区とＢ区で一部番号が重複したため、調査後にＢ区の一部を 601 から付け直した。

2．Ａ区

Ａ区は第 27 次調査区の東に隣接する。調査は掘削土の処理の関係から調査区を２分割して行った。調査面積は 365 ㎡を測る。検出遺構は土坑、溝、柱穴で井戸は確認できていない。また柱穴は建物としてまとめきれていない。

現況は標高 3.7 m で、基本層序（第３図）は 1．現代整地層　2．黒褐色砂質土（炭化物多量に含む）　3．にぶい黄褐色砂質土　4．灰褐色砂質土　5．褐色砂質土　6．黄褐色砂（地山）となる。SD20・25 等の遺構は４層上面より掘り込まれているが、確認が困難であったため、検出作業は５層を中心に行った。

（1）土坑（ＳＫ）

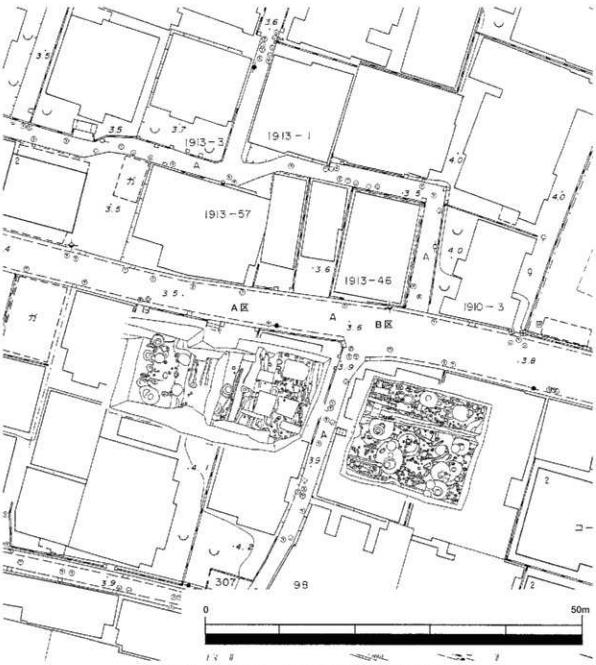
SK 1（第４図）

調査区中央に位置する。平面形は楕円形を呈し、長さ 106cm、幅 82cm、深さ 33cm を測る。遺物は土師器、青磁、瓦の細片が出土している。遺物が少なく詳細な時期は不明であるが中世段階のものであろう。

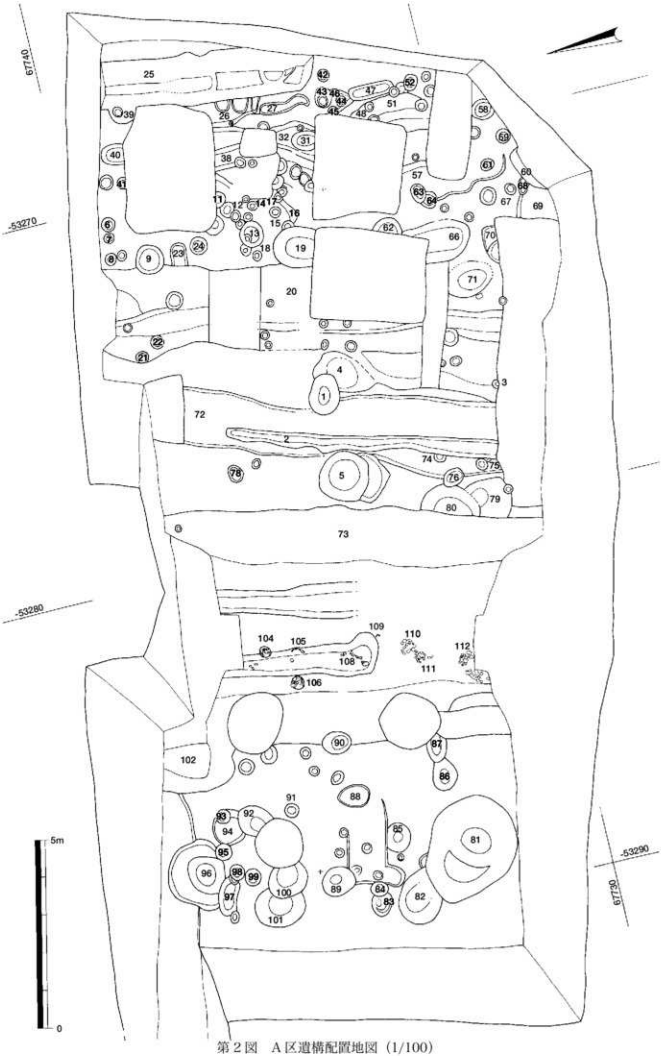
SK4（第４図）

調査区中央に位置し、SK1 に切られる。平面形は楕円形を呈し、長さ 168cm、幅 120cm 程度、深さ 55cm を測る。

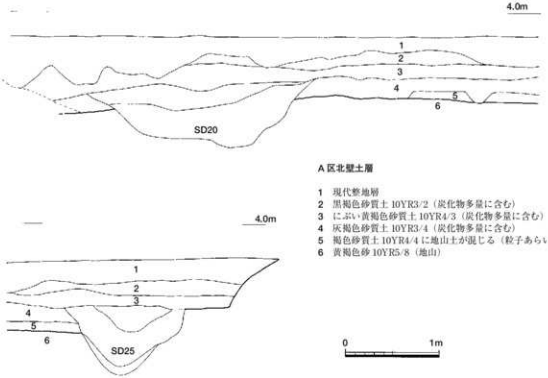
出土遺物（第６図）1 は土師器の小皿で口径 7.8cm、器高 1.2cm を測る。底部は回転糸切り。2 ～ 6 は土師器の坏で口径 11.0 ～ 13.0cm、器高 2.4 ～ 3.1cm を測る。底部は回転糸切りで 3 は板状圧



第１図　第 47 次 A・B 区調査区位置図（1/500）



第２図　Ａ区遺構配置地図（1/100）



第３図　Ａ区土層実測図（1/50）

痕を有する。7は黒色土器。8は白磁皿Ⅸ類。9～11は龍泉窯系青磁碗。9・10はⅡ－ｂ類。11は１類。12は陶器の注口で釉は黄褐色を呈する。13は釘。他に獣骨が出土している。13世紀後半～14世紀前半以降であろう。

SK5（第４図）

調査区中央に位置する。平面形は円形を呈し、径130cm前後、深さ46cmを測る。

出土遺物（第６図）14～26は土師器の小皿で口径8.2～9.4cm、器高1.0～1.4cmを測る。27は土師器の坏で口径16.3cm、器高3.0cmを測る。すべて底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。28～30は白磁碗。28はⅣ類、29・30はⅤ類。31は白磁皿。32は陶器の甕。33は陶器の盤。34・35は押圧波状文軒平瓦。36は鉄滓。37・38は不明鉄製品。39～41は釘。12世紀代であろう。

SK9（第４図）

調査区北東に位置し、SD20を切る。平面形は円形を呈し、径70cm前後、深さ45cmを測る。

出土遺物（第６図）42は丸瓦で凸面は格子目叩き、凹面は布目痕が残る。他に土師器の細片が出土している。遺物が少なく時期は決めがたいがSD20を切ることから13世紀後半～14世紀前半以降であろう。

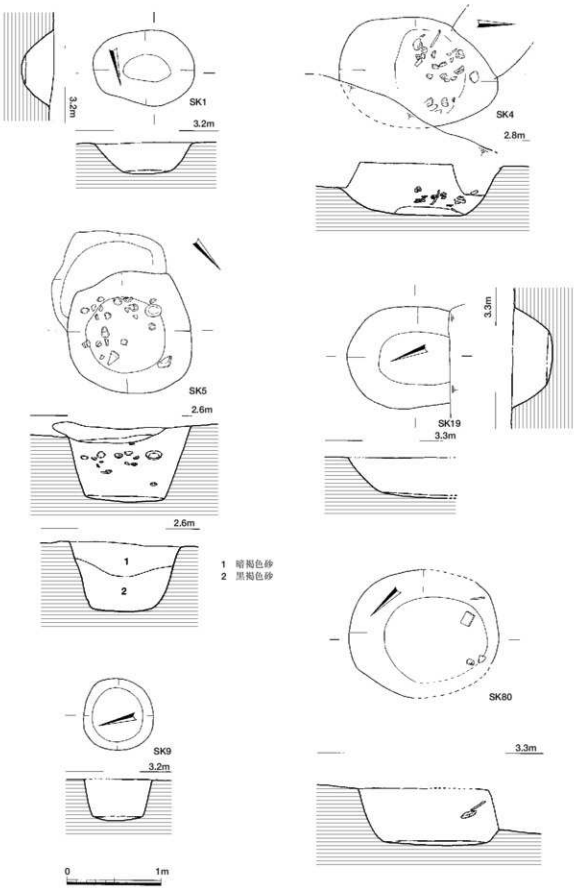
SK19（第４図）

調査区東に位置し、南側を切られる。平面形は楕円形か。幅107cm、深さ42cmを測る。

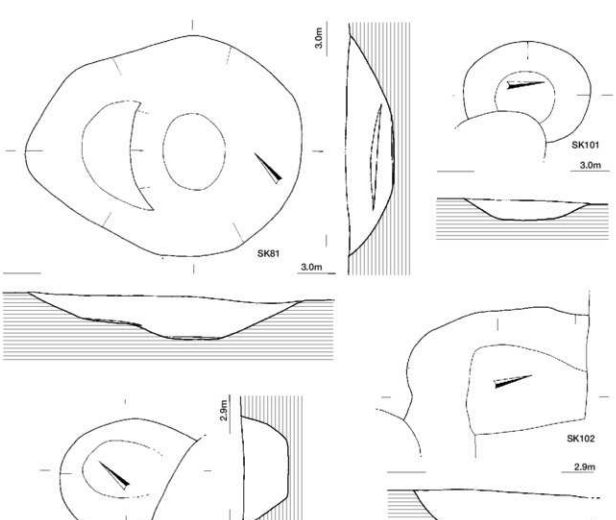
遺物は底部糸切りの土師器、瓦器、白磁、青磁の細片、釘が出土している。中世であろうが遺物が少ないため確定できない。

SK80（第４図）

調査区中央、南寄りに位置し、SD73に切られる。平面形は楕円形を呈し、長さ157cm、幅140cm程度、深さ61cmを測る。



第４図　SK1・4・5・9・19・80 実測図（1/40）



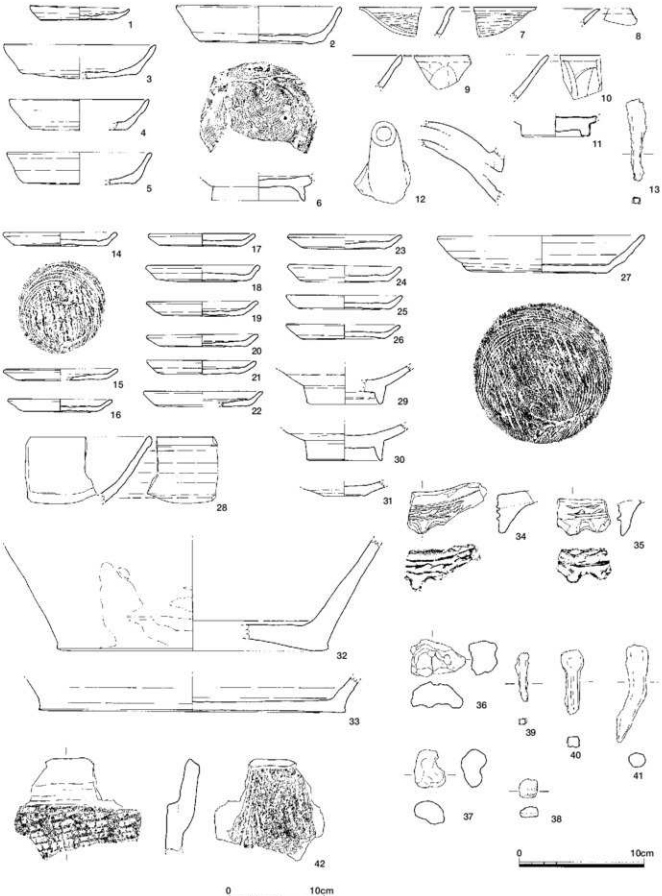
第５図　SK81・82・101・102 実測図（1/40）

出土遺物（第７図）43 は土師器の小皿で口径 9.2cm、器高 0.9cm を測る。44 は土師器の椀。45 は丸底坏。46・47 は白磁碗で 46 はⅤ類、47 はⅣ類で口径 16.0cm を測る。48 は塼。49 は鉄鏃か。残存長 14.8cm を測る。50 は滑石の未製品。板状になり、表面に工具痕が残る。11 世紀後半～ 12 世紀前半以降であろう。

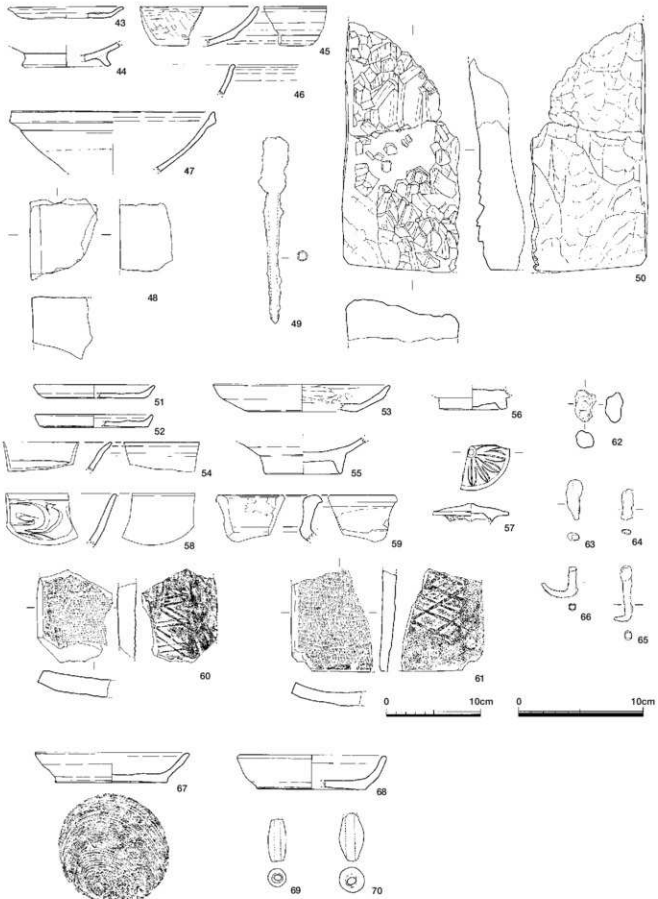
SK81（第５図）

調査区西南隅に位置し、SK82 を切る。平面形は不整な楕円形を呈し、北側にテラスを有する。長さ 282cm、幅 233cm、深さ 50cm を測る。

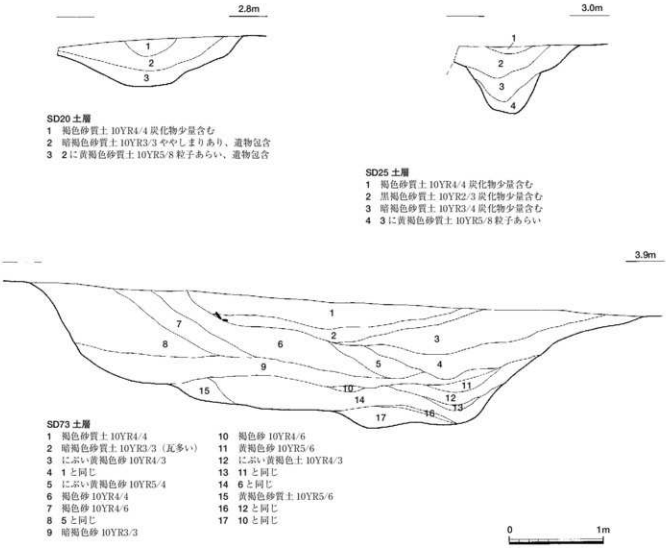
出土遺物（第７図）51・52 は土師器の小皿でそれぞれ口径 9.6・9.4cm、器高 1.1・1.0cm を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。53 は坏で口径 14.0cm、器高 2.1cm を測る。54 ～ 56 は白磁碗。54 はⅤ類。55 はⅤ－１類。56 はⅡ類で高台周縁を打ち欠いており、遊具であろう。57 は青白磁の蓋。58 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－２類。59 は陶器の壷。釉は茶色を呈する。60・61 は平瓦。60 の凸面は二重斜格子の叩き凹面は布目痕が残る。61 は斜格子の叩き、凹面は布目痕が残る。62 ～ 66 は鉄製品。



第６図　SK4・5・9出土遺物実測図（1/3・1/4）



第７図　SK80・81・102 出土遺物実測図（1/3・1/4）



第 8 図　SD20・25・73 土層実測図（1/40）

63 ～ 66 は釘。12 世紀中頃～後半以降であろう。

SK82（第 5 図）

調査区西南隅に位置し、南側を SK81 に切られる。平面形は楕円形か。幅 116cm、深さ 53cm を測る。遺物は土師器、陶器、瓦の細片が出土している。中世前半代であろうが遺物が少ないため確定できない。

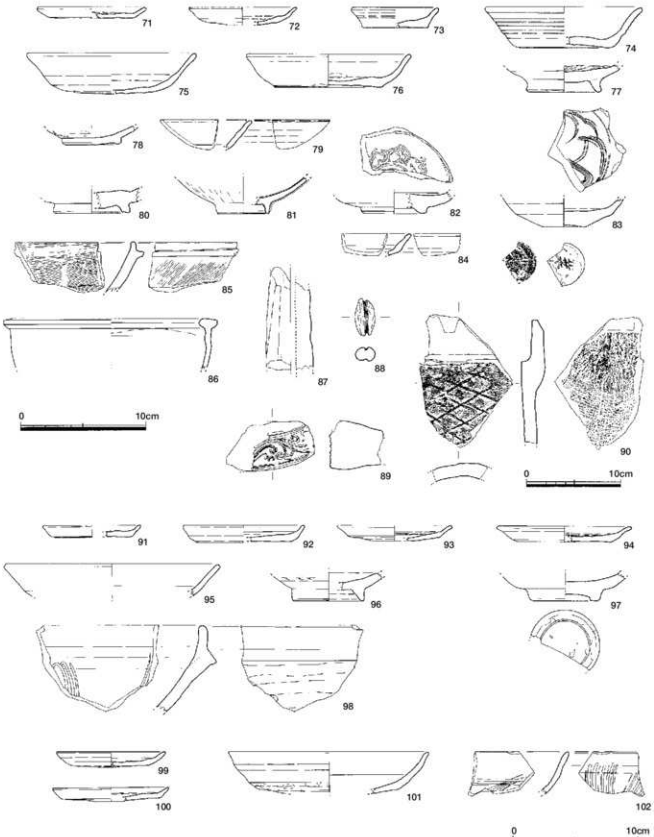
SK101（第 5 図）

調査区西北に位置する。平面形は楕円形を呈し、長さ 133cm、幅 110cm 程度、深さ 20cm を測る。遺物は土師器、瓦の細片が出土している。時期は不明。

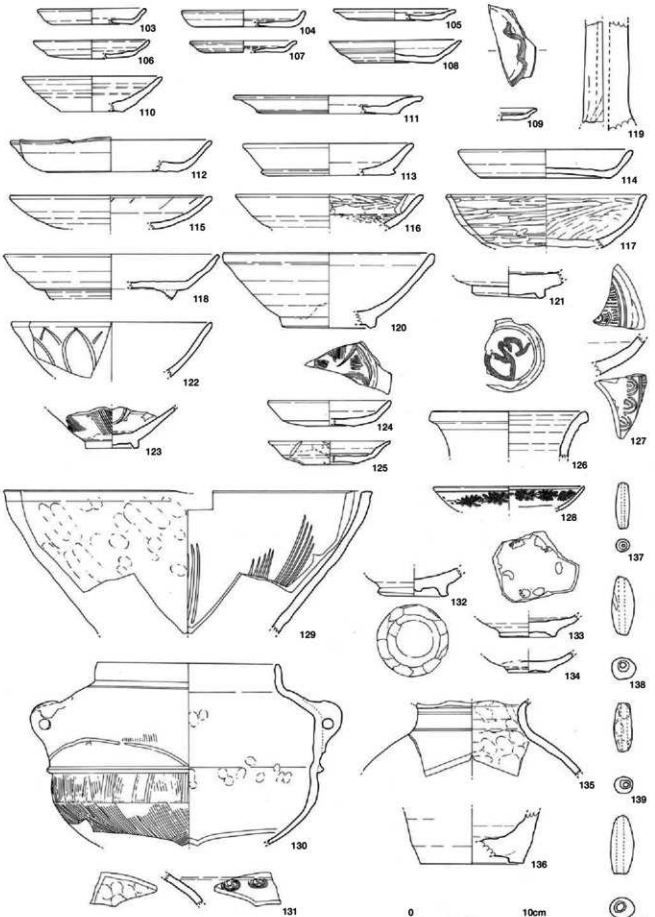
SK102（第 5 図）

調査区西北に位置し、北側は調査区外に延びる。規模は不明。

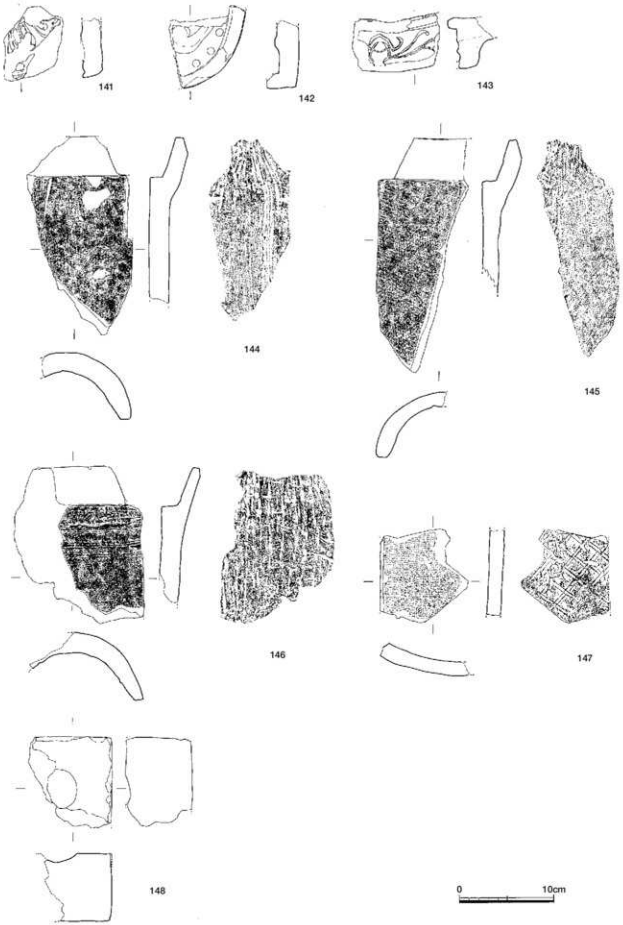
出土遺物（第 7 図）67・68 は土師器の坏。それぞれ口径 12.2・11.8cm、器高 2.4・2.7cm を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。69・70 は土錘で 69 は重さ 5.8 g、70 は 11.6 g を測る。中世であるが遺物が少ないため確定できない。



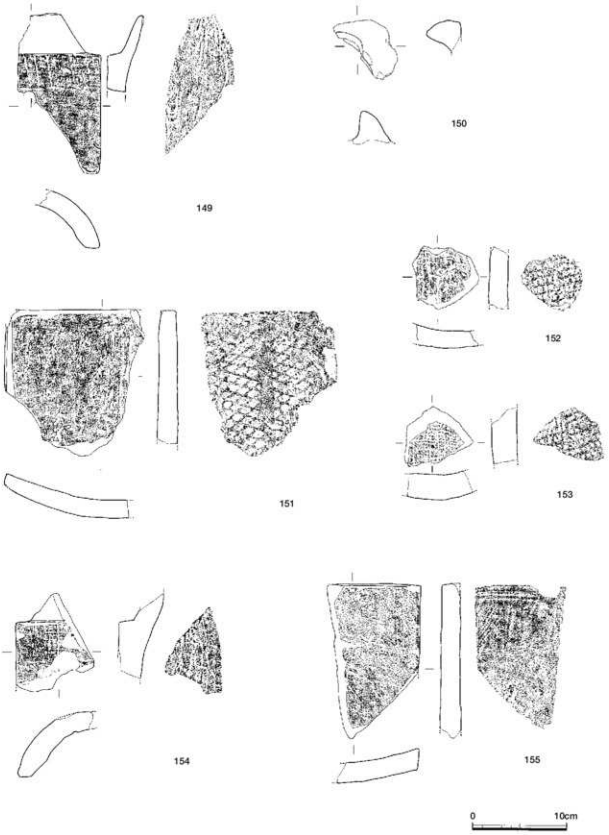
第９図　SD20・25・72 出土遺物実測図（1/3・1/4）



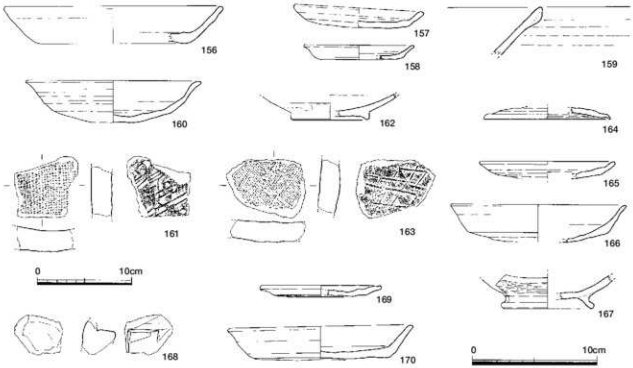
第10図　SD73出土遺物実測図①（1/3）



第 11 図　SD73 出土遺物実測図②（1/4）



第12図　A区出土遺物実測図①（1/4）



第 13 図　A 区出土遺物実測図②（1/3・1/4）

（2）溝状遺構（SD）

SD20（第 8 図）

調査区東寄りに位置する。南北方向、やや東に振れて延び、幅 190 ～ 250cm、深さ 80cm を測る。
出土遺物（第 9 図）71 ～ 73 は土師器の小皿。口径 7.0 ～ 8.6cm、器高 0.9 ～ 1.6cm を測る。底部は 71・72 がヘラ切り、73 が回転糸切りで 71 は板状圧痕を有する。74 ～ 76 は土師器の坏。口径 12.4 ～ 13.4cm、器高 2.6 ～ 3.2cm を測る。底部は 75 がヘラ切りで板状圧痕を有し、74・76 は糸切り。77 は黒色土器。78･79 は白磁皿。78 は Ⅱ 類、79 は Ⅸ 類。80･81 は龍泉窯青磁碗。80 は Ⅰ 類、81 は Ⅲ － 2 類。82 は朝鮮象嵌青磁碗。83 は龍泉窯系青磁皿。84 は同安窯系青磁皿。85 は瓦質の羽釜。86 は陶器の盤で口径 16.8cm を測る。87 は土師器の脚部。88 は石錘で滑石製。7.0 g を測る。89 は軒平瓦。666A 形式。90 は丸瓦。凸面は斜格子叩き、凹面は布目痕が残る。13 世紀後半～ 14 世紀前半以降であろう。

SD25（第 8 図）

調査区東隅に位置する。南北方向に延び、幅 130cm、深さ 60cm を測る。土層を観察すると 3 層が 4 層を掘り込んでいるような堆積状況であり、掘り直しの可能性がある。
出土遺物（第 9 図）91 ～ 94 は土師器の小皿。口径 7.8 ～ 10.6cm、器高 0.9 ～ 1.3cm を測る。底部は 91・92 が糸切り、93・94 がヘラ切り。91 以外は板状圧痕を有する。95 は土師器の坏。口径 17.0cm を測る。96 は白磁碗 V 類。97 は龍泉窯系青磁碗。98 は擂鉢。

SD72

調査区中央に位置する。南北方向、やや東に振れて延び、幅 150cm、深さ 10cm を測る。
出土遺物（第 9 図）99・100 は土師器の小皿。それぞれ口径 8.6・9.2cm、器高 1.2・1.1cm を測る。底部は回転糸切り。101 は土師器の丸底坏。口径 15.8cm を測る。102 は同安窯系青磁碗 Ⅰ － c 類。

SD73（第 8 図）

調査区中央、SD72 の西に位置する。南北方向、やや東に振れて延び、幅 6 m前後、深さ 110cm を測る。底部西側には瓦片を配置した遺構 SX103 ～ 109 が並ぶ。
出土遺物（第 10･11 図）103 ～ 109 は土師器の小皿で口径 8.4 ～ 10.4cm、器高 0.9 ～ 1.8cm を測る。

底部は 106・107 がヘラ切りで他が回転糸切り、104 ～ 106・109 は板状圧痕を有する。111 は皿。口径 15.0cm を測る。110・112 ～ 114 は土師器の坏。110 は口径 11.0cm、器高 2.8cm。112 ～ 114 は口径 13.6 ～ 16.0cm、器高 2.2 ～ 2.7cm を測る。115 ～ 117 は丸底坏。口径 14.8 ～ 16.0 ｃｍ。118 は高台付坏。口径 17.0cm を測る。120・121 は白磁碗。120 はⅣ－ 1a 類で口径 16.8cm、器高 5.9cm を測る。121 は底部に墨書を有する。126 は白磁壷。122 は龍泉窯系青磁碗Ⅱ－ａ類で口径 15.8cm を測る。123 は同安窯系青磁碗Ⅰ－ 1 ｂ類。124 は龍泉窯系青磁皿Ⅰ－ 2 ｃ類で口径 9.8cm、器高 2.0cm。125 は同安窯系青磁皿Ⅰ－ 1a 類で口径 9.6cm、器高 1.8cm。127 は朝鮮象嵌青磁。128 は染付皿で口径 12.0cm を測る。129 は瓦質の擂鉢。口径 29.2cm を測り、卸目の単位は 5 条。130 は瓦質の釜で口径 14.4cm を測る。外面には上部がナデ、下部がハケメを施し、多量の煤が付着している。内面はナデを施す。132・133 は朝鮮陶器の碗。134 は陶器の碗。135・136 は陶器の壷で 135 は暗オリーブ色、136 は灰白色を呈する。137 ～ 140 は土錘。重さ 3.6 ～ 13.0 ｇを測る。141・142 は軒丸瓦。142 は巴文。143 は軒平瓦。144 ～ 146 は丸瓦で凸面は縄目叩きの後ナデ、凹面は布目痕が残る。147 は平瓦。903D 形式。凸面は 2 重斜格子の叩きに正字の「賀茂」を有する。凹面は布目痕が残る 148 は塼。厚さ 5.3cm を測り、ナデを施す。

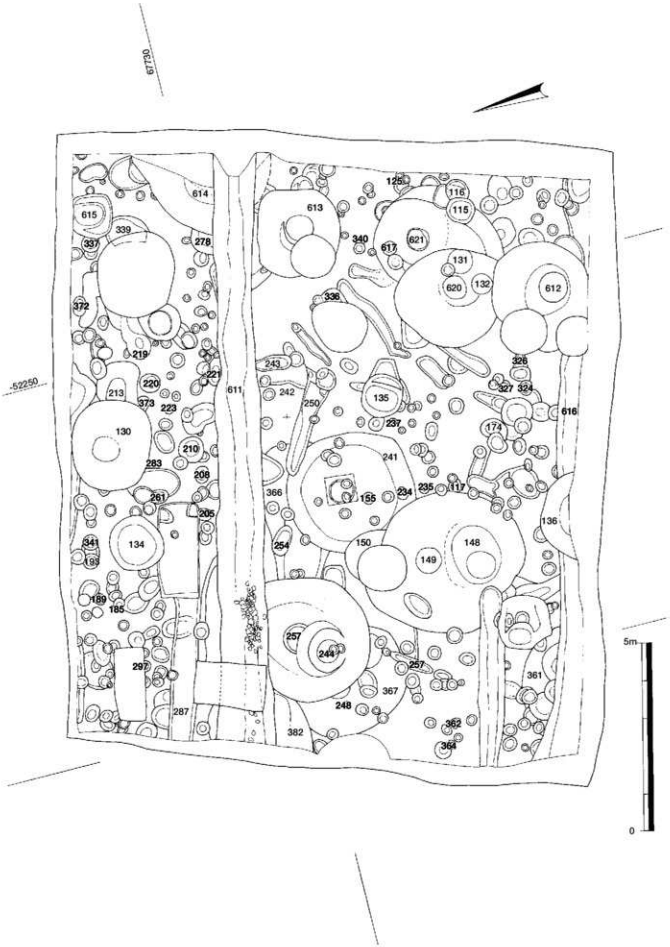
（3）A区出土遺物（第 12・13 図）

これまでに掲載できなかった遺構の遺物及びその他の遺物について掲載する。149 ～ 155 は SD73 内の瓦組遺構の出土遺物である。149･150 は SX104 出土。149 は丸瓦。150 は瓦であるが部位不明。151 は SX106 出土の平瓦。152 ～ 153 は SX108 出土。152・153 は平瓦。154・155 は SX110 出土。154 は丸瓦。155 は平瓦。156 は SD16 出土。土師器の坏で口径 17.0cm、器高 3.0cm を測る。底部は回転糸切り。157 ～ 159 は SD26 出土。157･158 は土師器の小皿。それぞれ口径 10.2･8.7cm、器高 1.8・1.1cm を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。159 は須恵質の鉢。160・161 は SD32 出土。160 は土師器の丸底坏。口径 13.8cm、器高 3.3cm を測る。底部はヘラ切り。161 は平瓦で凸面に斜格子の叩きに「朋」に似た記号状の文様を有する。162・163 は SD38 出土。162 は白磁皿。163 は平瓦で凸面に斜格子の叩きを施す。164 は SP46 出土。土師器の蓋。口径 10.0cm、器高 0.9cm を測る。天井部は回転ヘラ削りで他は回転ナデを施す。165 ～ 167 は SD47 出土。165 は土師器の小皿。口径 10.7cm、器高 1.4cm を測る。底部はヘラ切り。166 は土師器の坏で口径 14.0cm を測る。底部はヘラ切り。167 は土師器の椀。168 は SK79・90 一括取り上げ遺物で滑石製石鍋の再用品。169･170 は東半区検出時出土。169 は土師器の小皿で口径 9.6cm、器高 0.9cm を測る。底部はヘラ切り。170 は土師器の坏で口径 14.6cm、器高 2.8cm を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。

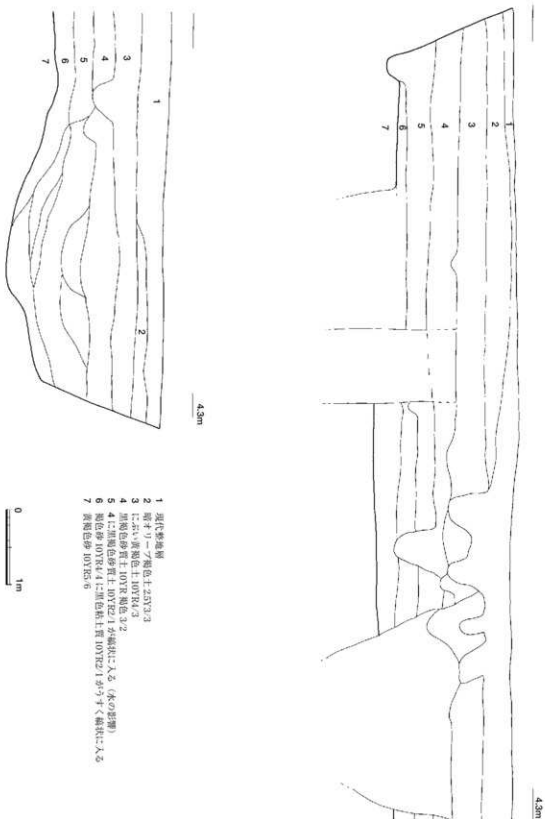
2．B区

B区はA区の東に隣接する。検出遺構は井戸、土坑、溝、柱穴等である。柱穴は建物としてまとめきれていない。A区に比べ遺構の密度は高い。調査面積は 243 ㎡を測る。

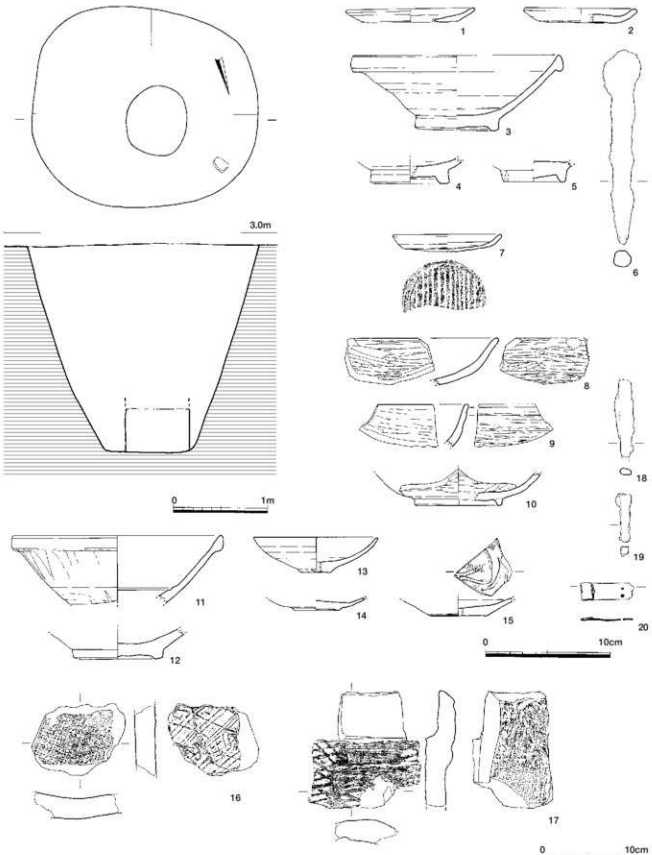
現況は標高 4.1 mで、基本層序は 1．現代整地層　2．暗オリーブ褐色土　3．にぶい黄褐色土　4．黒褐色砂質土　5．4．に黒色粘質土が縞状に入る　6．褐色砂に黒色粘質土が縞状に入る　7．黄褐色砂（地山）となる。遺構は概ね 4 層以下で掘り込まれているが、確認が困難であったため、5 層中位および 6 層で検出作業を行った。



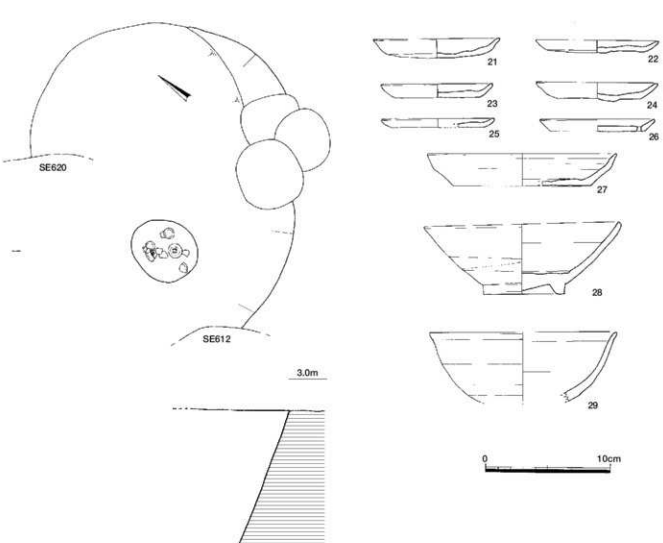
第14図　B区遺構配置図（1/100）



第 15 図　B 区土層実測図（1/50）



第16図　SE130 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）



第 17 図　SE131 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

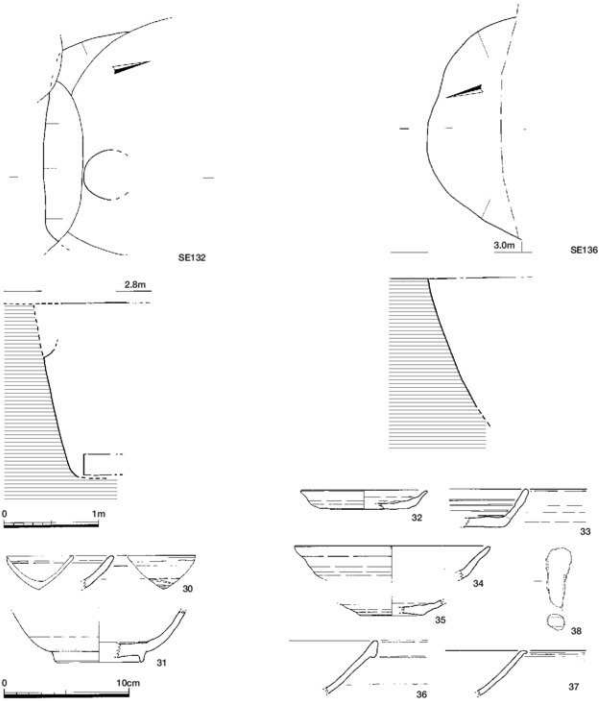
（1）井戸（ＳＥ）

調査区内で 17 基確認した。調査区全体に分布しており偏りはみられない。

SE130（第 16 図）

調査区北に位置し、SK213 を切る。掘方は楕円形を呈し、長さ 240cm、幅 210cm、深さ 220 cm を測る。井筒は径 60 ～ 70cm を測るが、木質は確認できない。

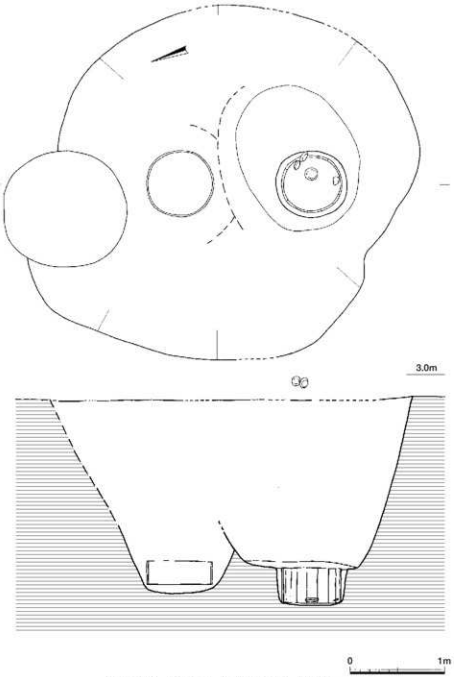
出土遺物(第 16 図)1 ～ 6 は井筒出土。1･2 は土師器の小皿でそれぞれ口径 10.2､9.0cm､器高 1.1cm を測る。底部はヘラ切り。3・4 は白磁碗Ⅳ類。3 は 1a 類で口径 16.8cm、器高 6.0cm を測る。5 は龍泉窯系青磁碗。6 は釘で長さ 15.4cm を測る。7 ～ 20 は掘方出土。7 は土師器の小皿で口径 8.6cm、器高 1.4cm を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。8 は土師器の坏で内外面ともヘラミガ



第 18 図　SE132・136 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

キを施す。9 は黒色土器碗で内外面ともヘラミガキを施す。10 は瓦器碗で内外面ともヘラミガキを施す。11 ～ 14 は白磁。11・12 は碗Ⅳ類。11 は口径 16.8cm、器高 5.4cm を測る。13・14 は皿。13 はⅥ－ 1 類で口径 9.8cm、器高 2.8cm を測る。14 はⅦ－ 1c 類。15 は青白磁の皿。16 は平瓦。凸面は二重斜格子の叩きで記号状の文様を有する。凹面は布目痕が残る。灰白色を呈する。17 は丸瓦。凸面は斜格子叩きの後ナデ、凹面は布目痕が残る。灰白色を呈する。18･19 は釘。20 は飾り金具か。銅に金箔を施している。幅 1.3cm、残存長 4.0cm を測る。3 箇所に孔が穿たれており、鋲止めするものであろう。12 世紀中頃～後半と考えられる。

SE131（第 17 図）



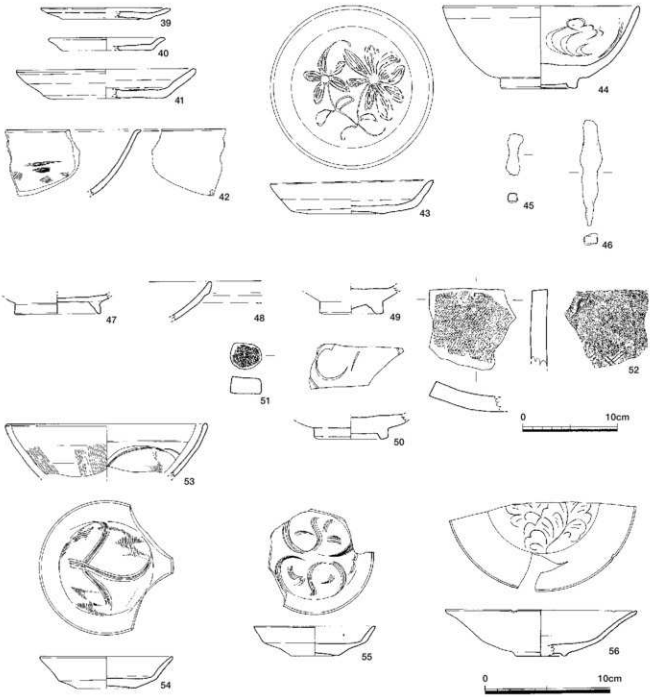
第 19 図　SE148・149 実測図（1/40）

調査区東南に位置する。SE612・620・621 に切られ、掘方の平面形、規模は不明。井筒は幅約 10cm の板材を組み合わせた径 60 ～ 70cm の桶が用いられ 50cm 程遺存する。

出土遺物（第 17 図）21 ～ 26 は土師器の小皿で口径 8.9 から 10.0cm、器高 0.7 ～ 1.2cm を測る。底部は回転糸切りで 21 ～ 24 は板状圧痕を有する。26 は 2 ヶ所に穿孔が施される。27 は土師器の坏で口径 15.0cm、器高 2.5cm を測る。底部は回転糸切り。28・29 は白磁碗。28 はⅧ－ 2 類で口径 15.4cm、器高 5.5cm を測る。器壁の厚さに差が大きい。29 はⅤ－ 2a 類で口径 15.5cm を測る。12 世紀中頃～後半と考えられる。

SE132（第 18 図）

調査区東南に位置する。SE612・620 に切られ、掘方の平面形、規模は不明。井筒は径 50 ～



第 20 図　SE148・149 出土遺物実測図（1/3・1/4）

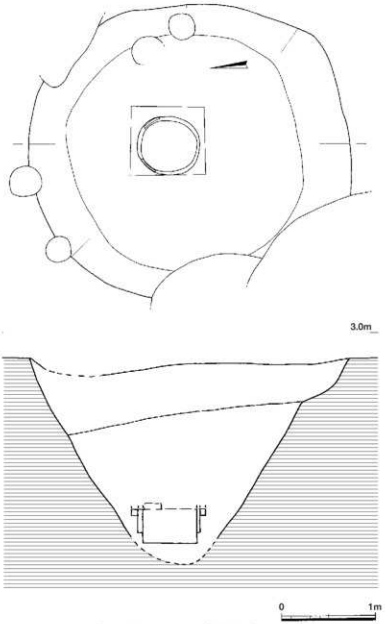
60cm を測るが、木質は確認できない。

出土遺物（第 18 図）掘方の遺物は他の井戸と混在し確定できないため、井筒出土の遺物のみを掲載する。30 は土師器の坏。内外面ともヨコナデを施す。31 は青磁碗。釉は全面にかかる。他に瓦、滑石が出土している。遺物が少ないため決めがたいが 12 世紀代であろう。

SE136（第 18 図）

調査区南に位置する。南側が調査区外に延びるため完掘できていない。掘方は円形か。井筒は確認できていない。

出土遺物（第 18 図）32 は土師器の小皿で口径 10.0cm、器高 1.5cm を測る。底部はヘラ切り。



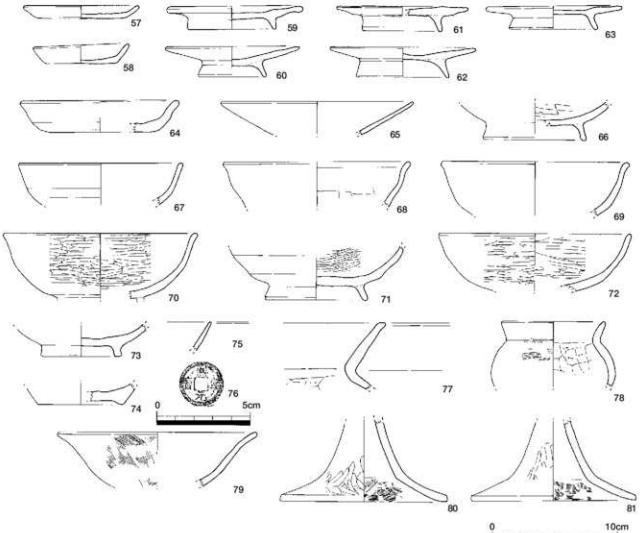
第 21 図　SE241 実測図（1/40）

33・34 は土師器の坏で 33 の底部は回転糸切り。34 は口径 15.4cm、器高 2.6cm を測る。35 は東播系須恵器の椀。底部は回転糸切り。36･37 は白磁碗。36 はⅣ類。37 はⅤ類。38 は釘。他に青磁、瓦器の細片が出土している。遺物が少ないため決めがたいが 12 世紀代であろう。

SE148（第 19 図）

調査区西南に位置し、SE149 を切る。検出段階では SE149 との切り合いは判別できなかった。掘方は本来、円形か。現状で南北 430cm、東西 370cm 前後、深さ 222cm を測る。標高 1.0m で段を有し、西寄りに井筒を据える。井筒は幅約 10cm の板材を組み合わせた径 60cm の桶が用いられ、50cm 程遺存する。

出土遺物（第 20 図）39・40 は土師器の小皿でそれぞれ口径 10.2・9.2cm、器高 0.9・1.0cm を測る。底部は回転糸切りで、39 は板状圧痕を有する。41 は土師器の坏で口径 14.2cm、器高 2.3cm を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。42・43 は白磁。42 は碗Ⅴ－ 4b 類。43 は皿Ⅷ－ 2b 類で口



第 22 図　SE241 出土遺物実測図①（1/2・1/3）

径 12.9cm、器高 2.7cm を測る。44 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－2 類で口径 15.5cm、器高 5.6cm を測る。施文はやや不明瞭。45・46 は釘。12 世紀中頃～後半と考えられる。

SE149（第 19 図）

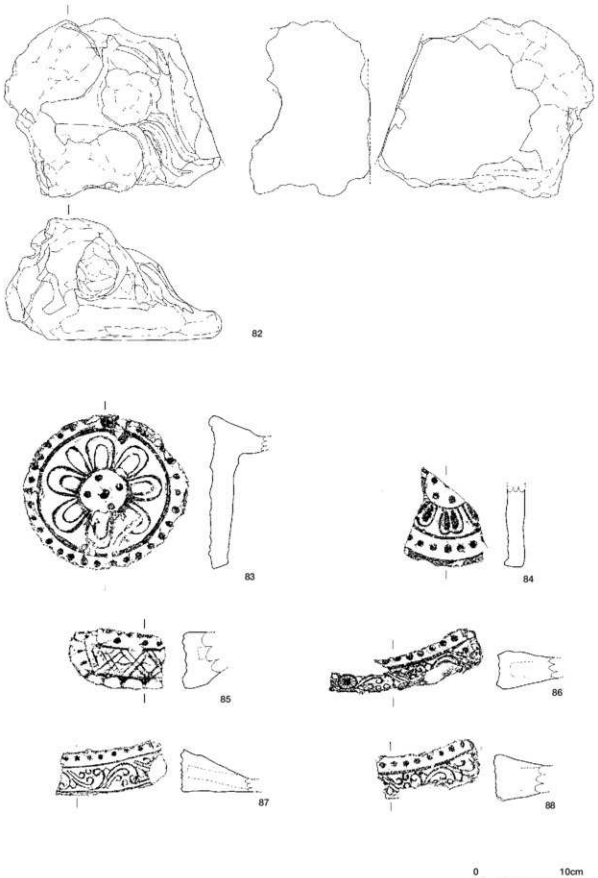
調査区西南に位置し、SE148 に切られる。掘方は本来、円形か。深さ 190cm を測る。井筒は径 70cm を測り、25cm 程遺存する。

出土遺物（第 20 図）47 は土師器の高台付皿。48 は白磁碗Ⅳ類。49 は同安窯系青磁碗。50 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類。51 は瓦玉。周縁を研磨して整形している。52 は平瓦。凸面は二重斜格子の叩きで凹面は布目痕が残る。12 世紀中頃～後半と考えられる。

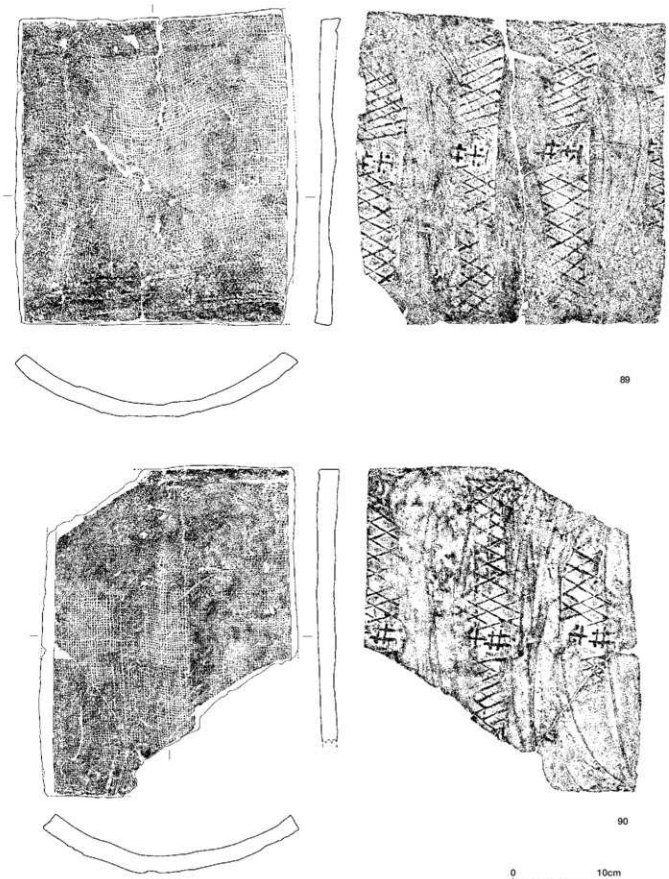
53 ～ 56 は SE148・149 混在の取り上げ遺物。53・54 は同安窯系青磁。53 は碗Ⅰ－1b 類で口径 16.0cm を測る。54 は皿Ⅰ－1b 類で口径 10・6cm、器高 2.5cm を測る。55 は龍泉窯系青磁皿Ⅰ－2b 類で口径 9.6cm、器高 2.4cm を測る。56 は高麗青磁の浅形碗で口径 15.2cm、器高 3.6cm を測る。

SE241（第 21 図）

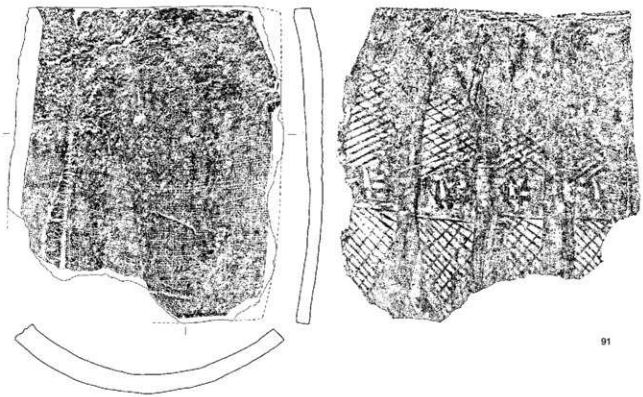
調査区中央に位置し、SE148・149 に切られる。掘方は円形を呈し、径 340cm 前後、深さ 210cm を測る。井筒は 3 段分確認された。下段は径 55cm を測り、丸太を刳り貫いたもので、中段は径

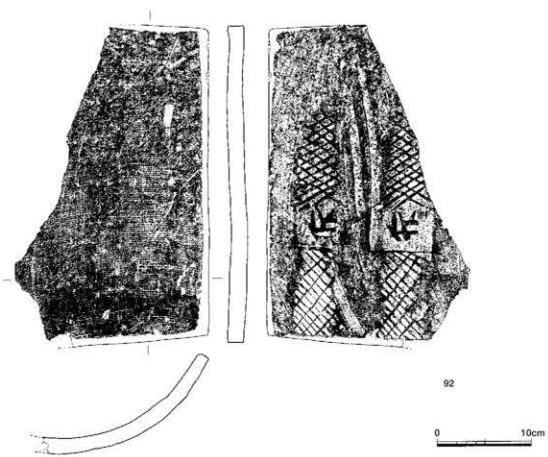


第 23 図　SE241 出土遺物実測図②（1/4）

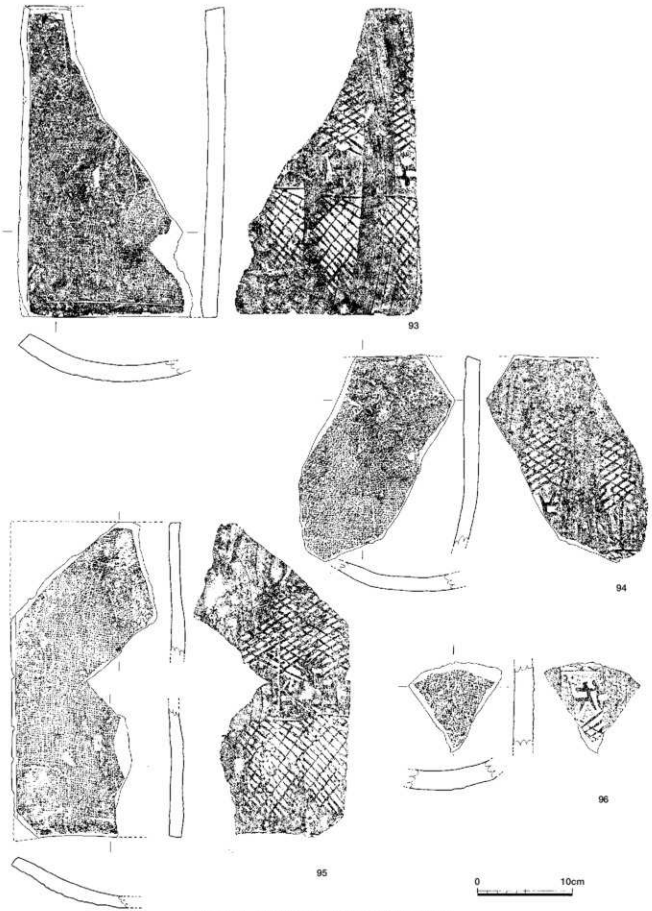


第 24 図　SE241 出土遺物実測図③（1/4）

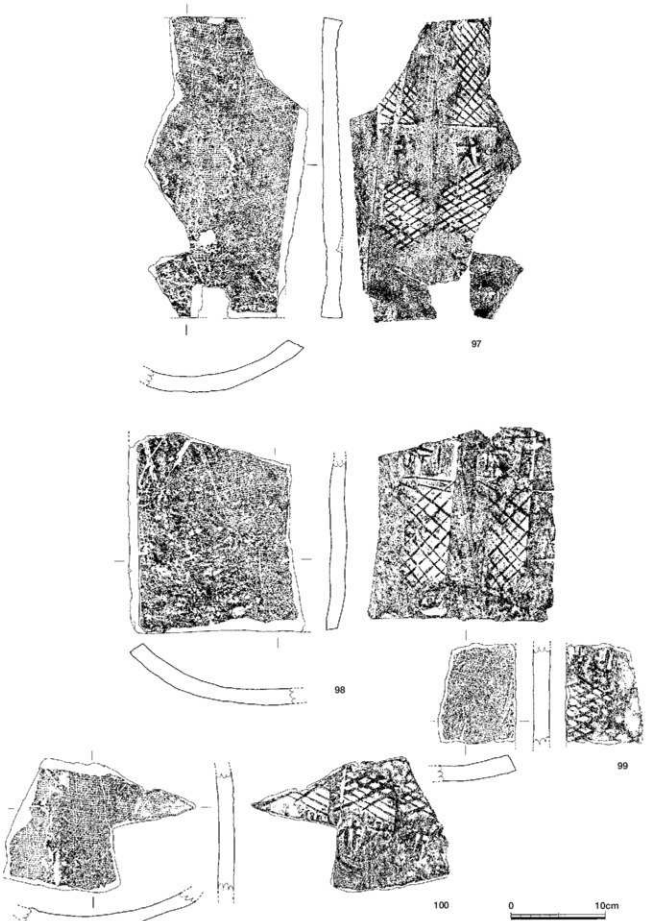




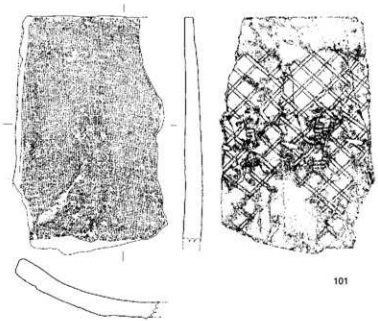
第 25 図　SE241 出土遺物実測図④（1/4）

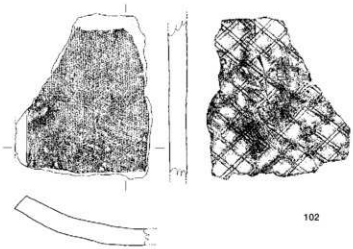


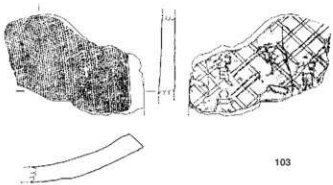
第 26 図　SE241 出土遺物実測図⑤（1/4）



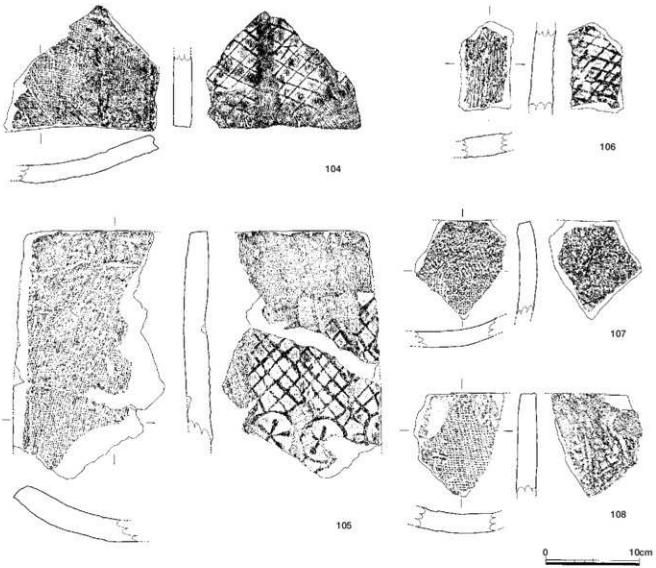
第 27 図　SE241 出土遺物実測図⑥（1/4）







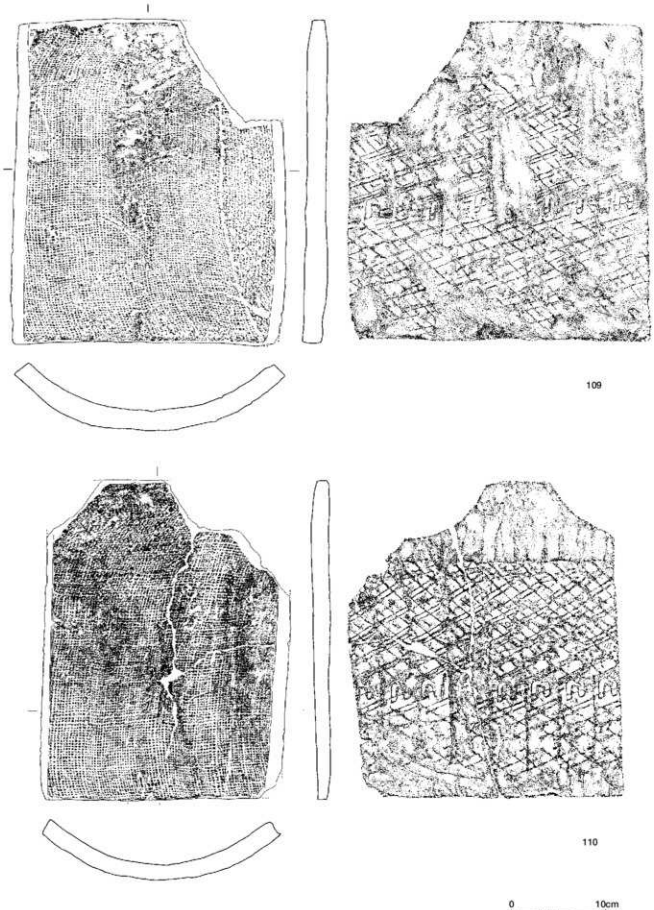
第 28 図　SE241 出土遺物実測図⑦（1/4）



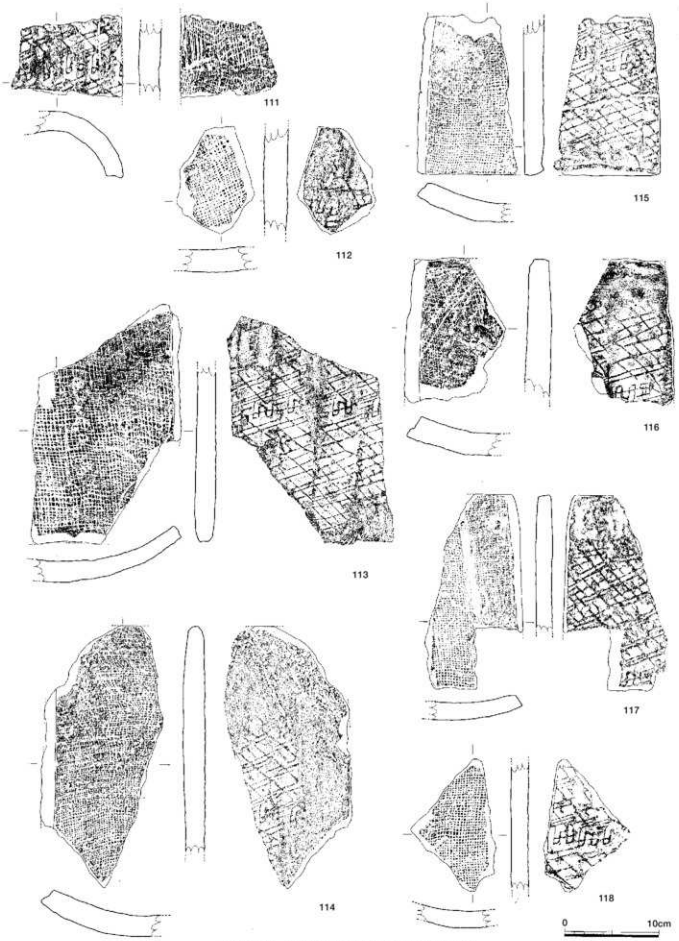
第 29 図　SE241 出土遺物実測図⑧（1/4）

65cm 測る。下段と中段の間には平瓦が下段の井筒を巻くように配置されていた。上段は 1 辺 80cm 板材を方形に組み合わせたもの。上層からは井筒構築時に用いられたと思われる瓦が多く出土した。

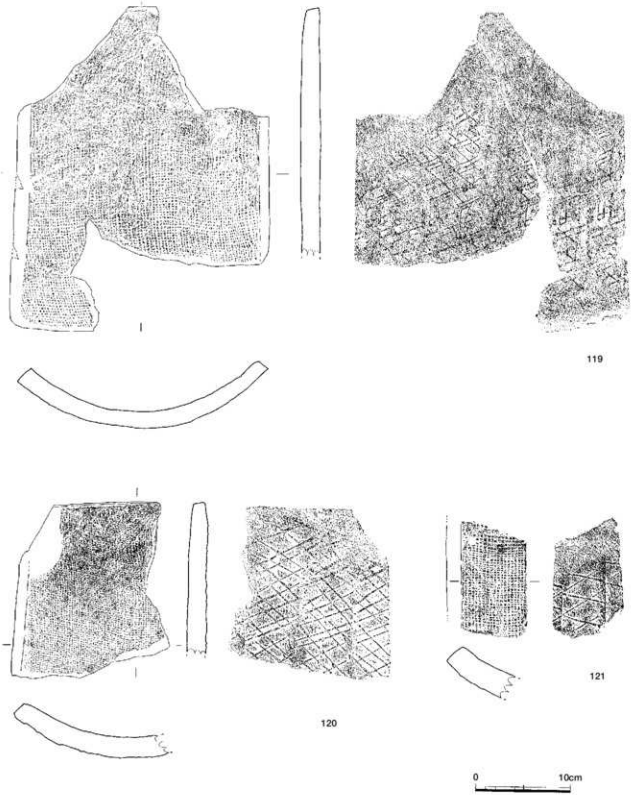
出土遺物（第 22 ～ 33 図）57・58 は土師器の小皿でそれぞれ口径 9.2・7.6cm、器高 1.0・1.5cm を測る。底部は 57 はヘラ切りで板状圧痕を有する。58 は回転糸切り。58 は混入の可能性がある。59 ～ 63 は高台付皿。口径 10.4 ～ 10.8cm、器高 1.9 ～ 2.4cm を測る。63 の底部にはヘラ切り、板状圧痕が残る。64・65 は土師器の坏。口径 12.6cm、器高 2.5cm を測る。底部にはヘラ切りで板状圧痕が残る。65 は口径 15.2cm を測る。器壁は薄く回転ヨコナデで仕上げる。66 ～ 69 は土師器の椀。70・71 は黒色土器 A 類。70 は口径 15.4cm を測り、内外面ともミガキを施す。71 は外面はヨコナデ、内面はミガキを施す。72 は黒色土器 B 類。口径 15.2cm を測り、内外面ともミガキを施す。73 は緑釉陶器の椀。高台径 6.4cm を測る。釉はオリーブ灰色を呈し、薄く全体にかかる。74 は白磁の壺。75 は越州窯系青磁。76 は銅銭で「熙寧元宝」（初鋳 1068 年）。77 ～ 81 は古式土師器であるが、本来、SK366 に伴うものであろう。77 は甕。口縁部はナデ、内面はヘラケズリを施す。78 は小型丸底壺。口径 8.2cm を測る。口縁部はナデ、胴部は外面がハケメ、内面はヘラケズリを施す。79 ～ 81 は高坏。79 は坏部で口径 15.8cm を測る。外面はハケメ、内面はヨコナデを施す。80 は脚



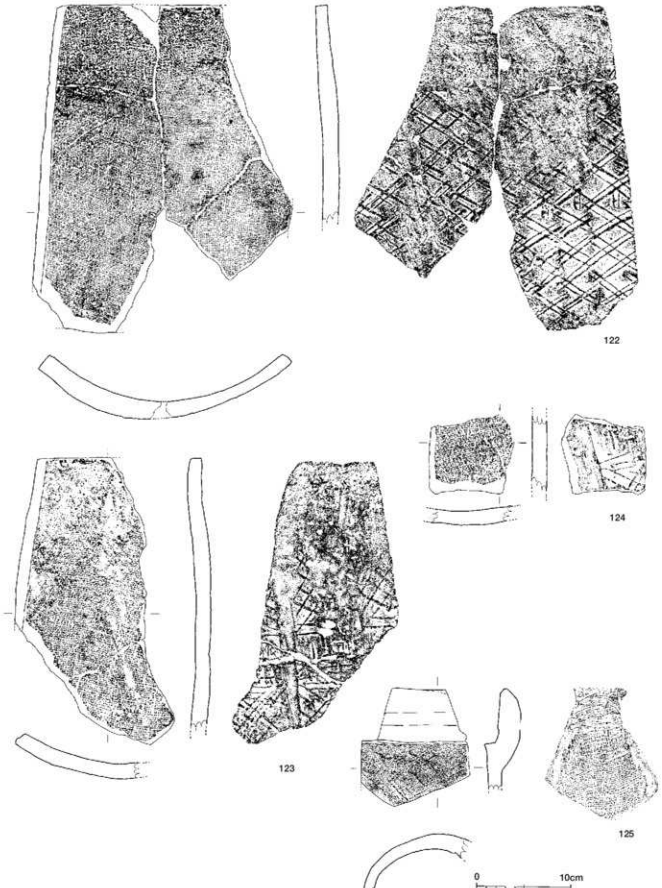
第 30 図　SE241 出土遺物実測図⑨（1/4）



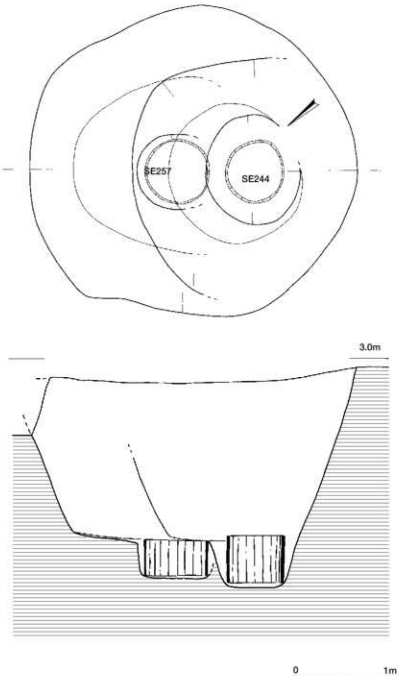
第31図　SE241 出土遺物実測図⑩（1/4）



第 32 図　SE241 出土遺物実測図Ⅱ (1/4)

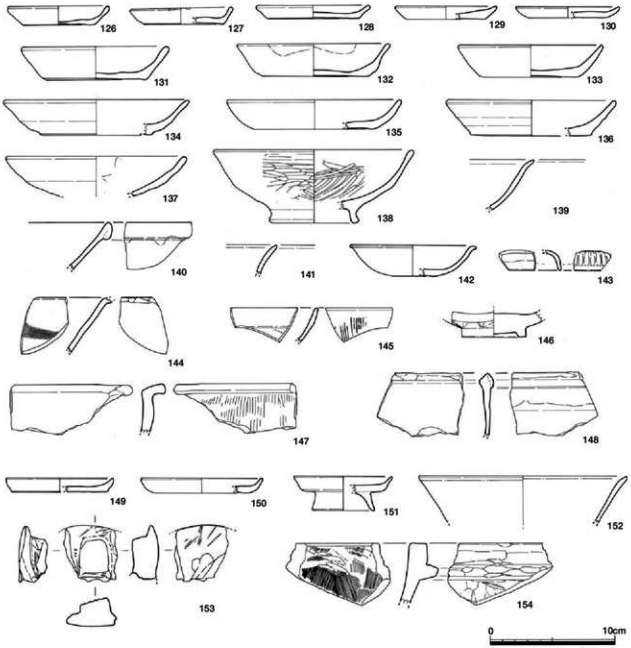


第33図　SE241 出土遺物実測図② (1/4)



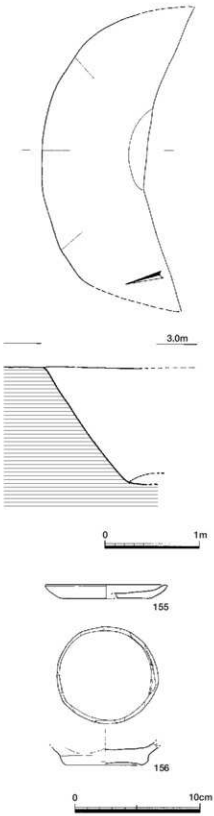
第 34 図　SE244・257 実測図（1/40）

部で裾部径 13.2cm を測る。外面はミガキ、内面裾部はハケメを施す。81 は脚部で裾部径 13.0cm を測る。外面はミガキ、内面裾部はハケメを施す。本井戸からは平瓦を中心に多量の瓦が出土した。82 は鬼瓦。灰白色を呈し焼成はやや軟質である。胎土には 1cm 大までの砂礫を多く含む。表面が風化により剥落が著しい。83・84 は軒丸瓦。83 は 132 型式で蓮弁の 1 弁のみが素弁となる。灰白色を呈し焼成はやや軟質である。54 次調査出土のものに比べ、笵傷が加わっており後出するものであろう。84 は 217 型式。灰色を呈し、焼成は良好。85 ～ 88 は軒平瓦。85 は 515 形式。灰白色を呈し、焼成は良好。86 ～ 88 は 666A 形式。灰色～灰白色で焼成は良好。89 ～ 105 は叩打痕文字を



第 35 図　SE244・257 出土遺物実測図（1/3）

有する平瓦。89・90 は 901L 形式。凸面は斜格子の叩きに正字の「平井」を有する。凹面は布目痕が残る。89 はほぼ完形で長さ 33.5cm、最大幅 29.8cm。90 は長さ 35.3cm、最大幅 27.0cm。91 ～ 97 は 902Db 型式。凸面は斜格子の叩きに左字の「佐」を有する。「佐」字は最終画を欠く。凹面は布目痕が残る。91 は長さ 33.5cm、最大幅 28.4cm。92 は長さ 32.5cm。93 は長さ 33.0cm。95 は長さ 33.5cm。97 は長さ 31.8cm。98 は 902E 型式。凸面は斜格子の叩きに正字の「佐」を有する。「佐」字は最終画を欠く。99・100 は 902I 形式。凸面は斜格子の叩きに正字の「佐□」を有する。「佐」字は最終画を欠く。凹面は布目痕が残る。101 ～ 103 は 903D 形式。凸面は 2 重斜格子の叩きに正字の「賀茂」を有する。104 は 915A 形式。凸面は斜格子の叩きに「大」の文字を有する。105 の凸面は斜格子の叩きに○の中に「大」の文字を有する。この瓦は箱崎遺跡内では何例か確認されているが、他では確認されていないようである。106 ～ 108 は平瓦。109 ～ 119 は凸面に斜格



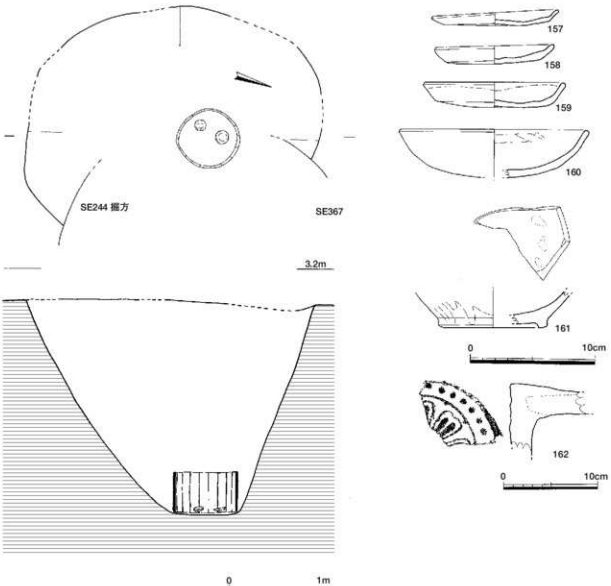
第36図　SE361実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

子の叩きに「門」あるいは「朋」に似た記号状の文様を有する。文様付近は二重、三重線となる。上下端部付近は強いナデで叩きが消されている。出土数が最も多い。109は長さ34.5cm、最大幅28.6cm。110は長さ35.0cm、最大幅25.7cm。119は長さ34.3cm、幅は中位で26.9cmを測る。120・121は平瓦で凸面は斜格子叩き、凹面は布目が残る。122は凸面に二重格子の叩きに「月」に似た記号状の文様を有する。長さ34.8cm、幅は中位で23.0cmを測る。123は斜格子の叩きに記号状の文様を有する。文様の上下は2重線となる。124は斜格子の叩きに記号状の文様を有する。125は丸瓦。凸面は斜格子叩き、凹面は布目が残る。出土した瓦のうち平瓦は井戸の構築材として利用されたものであろう。遺構の年代であるが、瓦の使用時期が10世紀前半から11世紀が想定されており、それ以降になること、また「熙寧元宝」の出土から11世紀後半以降であろう。井戸の形態はB区では古いものとなる。

SE244（第34図）

調査区西に位置し、SE257を切り、SD611に切られる。検出段階ではSE257との切り合いは判別できなかった。掘方は本来、円形か。現状で南北350cm、東西330cm前後、深さ232cmを測る。標高1.05mで北側にテラスを有し、南寄りに井筒を据える。井筒は幅約10cmの板材を組み合わせた径60cmの桶が用いられ50cm程遺存する。

出土遺物（第35図）126～130は土師器の小皿で口径8.0～9.6cm、器高0.9～1.5cmを測る。底部は回転糸切りで126以外板状圧痕を有する。131～137は土師器の坏。口径11.4～14.6cm、器高2.6～2.8cmを測る。底部は回転糸切りで135は板状圧痕を有する。132は灯明皿で口縁部には煤が付着している。137は丸底。138は黒色土器B類。口径15.8cm、器高5.8cmを測る。内外面ともミガキを施す。139～141は白磁碗。139・141はⅨ類。140はⅣ類。142は白磁皿Ⅴ－2a類。口径10.0cm、器高3.2cmを測る。143は白磁の合子蓋。144は白磁の鉢Ⅲ類。145は同安窯系青磁碗Ⅰ－1a類。146は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。147は土師器の鍋で外面には煤が付着する。148は陶器の盤。他に瓦の細片、猪、犬の



第 37 図　SE367 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

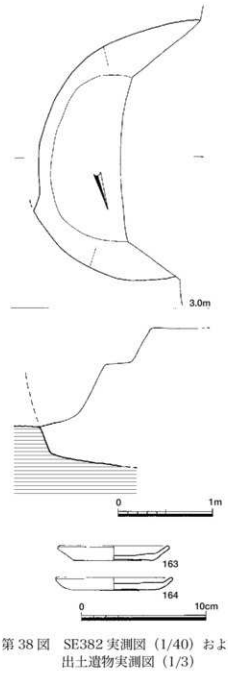
骨が出土している。13 世紀後半～ 14 世紀前半以降と考えられる。

SE257（第 34 図）

調査区西に位置し、SE244、SD611 に切られる。掘方は楕円形か。深さ 212cm を測る。標高 1.0m で段を有する。井筒は輻約 10cm の板材を組み合わせた径 70cm の桶が用いられ 40cm 程遺存する。出土遺物（第 35 図）149・150 は土師器の小皿でそれぞれ口径 8.4・9.6cm、器高 1.1・1.2cm を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。151 は高台付皿。口径 7.8cm、器高 2.7cm を測る。底部は回転糸切り後ナデを施す。152 は白磁碗Ⅸ類。口径 16.4cm を測る。153・154 は滑石製品。153 は再用品、154 は石鍋。他に陶器、瓦の細片が出土している。遺物が少ないため決めがたいが SE244 との関係から 13 世紀後半～ 14 世紀前半頃であろうか。

SE361（第 36 図）

調査区西南に位置し、SD616 に切られる。掘方は円形か。標高 1.5m で段を有する。井筒は確認できていない。



第 38 図　SE382 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第 36 図）155 は土師器の小皿で口径 9.6cm、器高 1.1cm を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。156 は白磁碗Ⅳ類。底部の周縁を打ち欠いて遊具としている。他に陶器、瓦の細片が出土している。遺物が少ないため決めがたいが 11 世紀後半から 12 世紀前半以降であろうか。

SE367（第 37 図）

調査区西に位置し、SE244 に切られる。掘方は楕円形か。長さ 310cm、深さ 225cm を測る。井筒は径 60cm 程度の桶が用いられ 40cm 程遺存する。

出土遺物（第 37 図）157・158 は土師器の小皿。それぞれ口径 10.0・9.4cm、器高 1.3・1.6cm を測る。底部はヘラ切りで、板状圧痕を有する。159 は灯明皿として使用されている。口径 11.2cm、器高 2.0cm を測り、底部はヘラ切りで、板状圧痕を有する。口縁部には煤が付着する。160 は土師器の丸底坏で口径 15.0cm を測る。161 は越州窯系青磁の碗で釉は灰白色を呈する。162 は軒丸瓦。217 形式。他に黒色土器、白磁、釘が出土している。遺物が少ないため決めがたいが 11 世紀後半から 12 世紀前半以降であろうか。

SE382（第 38 図）

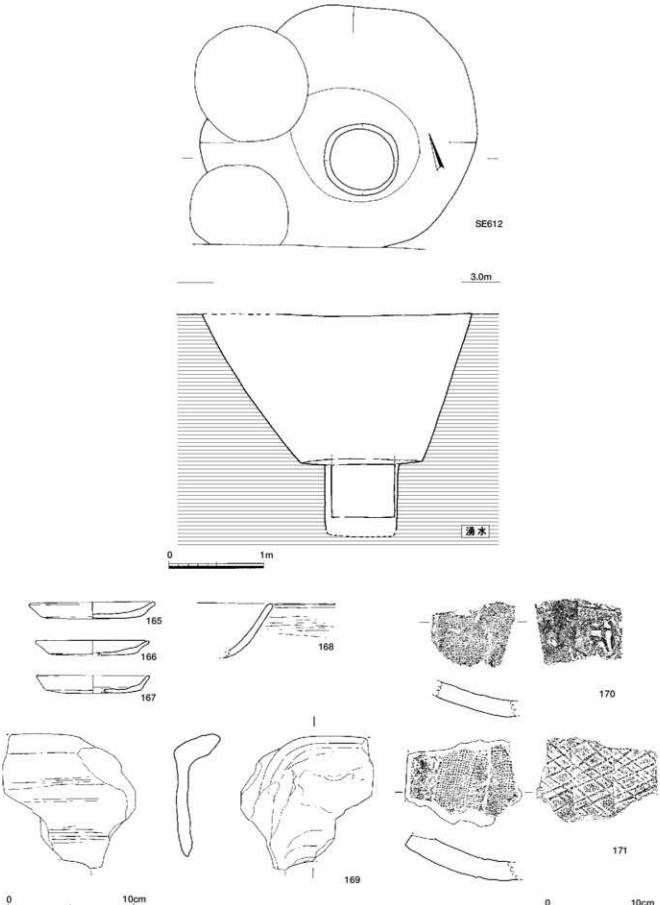
調査区西端に位置し、SE367 を切り、SE244 に切られる。西側は調査区外に延びる。掘方は楕円形か。標高 1.4m で段を有する。井筒は確認できていない。

出土遺物（第 38 図）163・164 は土師器の小皿。それぞれ口径 8.8･9.2cm、器高 1.2･1.0cm を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。他に陶器、瓦、滑石が出土している。12 世紀以降であろうか。

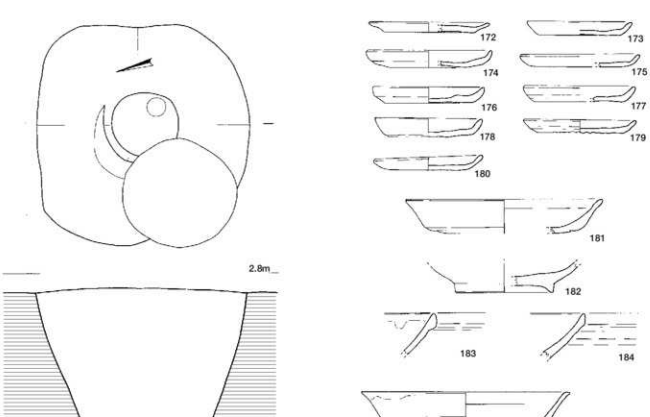
SE612（第 39 図）

調査区東南に位置し、SE132 を切る。掘方は円形で南側が調査区外に延びる。径 280cm 前後、深さ 230cm 程度。標高 1.1m で段を有し、やや南寄りに井筒を据える。井筒は径 65cm 前後で 55cm 確認できるが遺存状況は悪い。標高 0.5m で湧水したため底面は確認できていない。

出土遺物（第 39 図）165 ～ 167 は土師器の小皿。口径 9.0 ～ 10.0cm、器高 1.2 ～ 1.4cm を測る。底部はヘラ切りで 165・166 は板状圧痕を有する 168 は瓦器椀。内外面ともミガキを施すが、全体に風化している。169 は竈。内面に煤が付着する。170・171 は平瓦。170 は叩打痕文字瓦で 902Db 型式。凸面は斜格子の叩きに左字の「佐」を有する。「佐」字は最終画を欠く。凹面は布目痕が残る。171 は凸面は斜格子の叩き、凹面は布目痕が残る。他の井戸との切り合いから 12 世紀後半



第39図　SE612実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）



第 40 図　SE613 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

以降であろうか。

SE613（第 40 図）

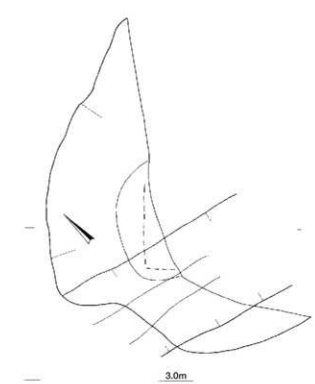
調査区東に位置する。掘方は円形で、標高 1.2m で北西側にテラスを有する。径 220cm 前後、深さ 200cm を測る。井筒は径 70cm 前後で、木質が僅かに遺存する。また、標高 1.2m で径 20cm の桶が確認できたが、遺存状態が悪く取り上げることはできなかった。

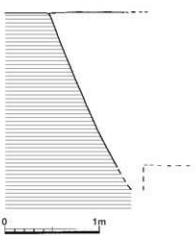
出土遺物（第 40 図）172 ～ 180 は土師器の小皿。口径 8.2 ～ 10.0cm、器高 0.8 ～ 1.5cm を測る。底部は回転糸切りで 173・174・176・178 ～ 180 は板状圧痕を有する。181 は土師器の坏。口径 15.6cm を測る。底部は回転糸切り。182 は緑釉陶器の椀。底部は回転糸切り。183 ～ 186 は白磁。183・184 は碗Ⅳ類。185 は碗Ⅴ－2a 類で口径 16.4cm、器高 6.9cm を測る。186 は小坏で口径 4.7cm、器高 2.6cm を測る。高台内部は露胎。11 世紀後半から 12 世紀前半以降と考えられる。

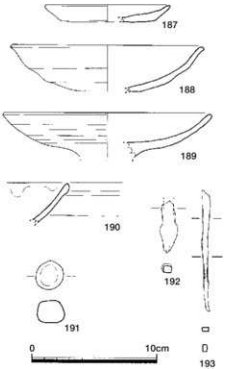
SE614（第 41 図）

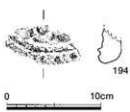
調査区東端に位置し、SD611 に切られる。掘方東側は調査区外に延びる。掘方は円形であろう。標高 1.05 m で方形の井筒の痕跡を確認した。底面は確認できていない。

出土遺物（第 41 図）187 は土師器の小皿。口径 10.0cm、器高 1.3cm を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。188 は土師器の丸底坏。口径 15.4cm を測る。底部はヘラ切り。189 は高坏で口径 17.4cm を測る。190 は白磁碗Ⅳ類。191 は瓦玉。表面は磨耗している。192・193 は釘。194 は軒丸瓦。









第 41　SE614 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

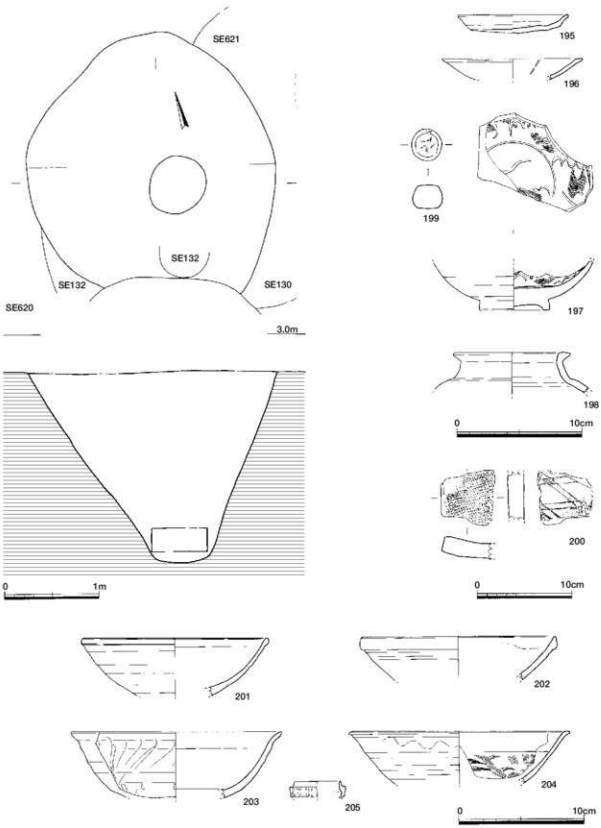
他に滑石が出土している。11 世紀後半から 12 世紀前半以降と考えられる。

SE620（第 42 図）

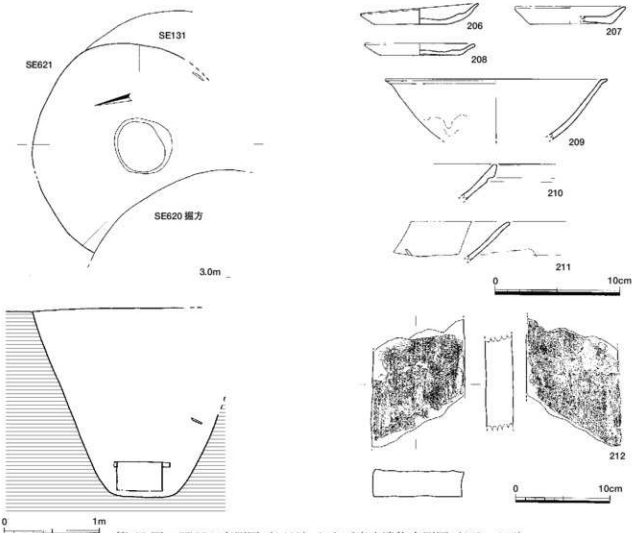
調査区西南に位置する。SE612 に切られ SE130・132・621 を切る。掘方は不整な円形を呈し、径 260 ～ 290cm、深さ 200cm を測る。井筒は径 60cm 程度で損存状況は悪い。

出土遺物（第 42 図）195 は土師器の小皿。口径 8.2cm、器高 1.5cm を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。196 は白磁皿Ⅳ－Ⅰb 類。口径 11.1cm を測る。197 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－3a 類。198 は陶器の壺。口径 9.4cm を測る。釉は灰白色を呈する。199 は瓦玉。焼成はやや軟質。200 は平瓦。凸面は二重格子の叩きを施す。他に滑石製石鍋が出土している。

201 ～ 205 は SE620・621 一括取り上げ遺物。202 ～ 204 は白磁碗。201 はⅡ類。口径 14.8cm を測る。202 はⅣ類。口径 15.6cm を測る。203 はⅤ－2 類。口径 16.6cm を測る。204 はⅤ－4b 類。



第42図　SE620実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）



第 43 図　SE621 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

口径 17.6cm を測る。205 は合子。口径 3.6cm、最大径 4.4cm を測る。12 世紀中頃～後半以降と考えられる。

SE621（第 43 図）

調査区西に位置し、SE620 に切られる。掘方は円形を呈し、深さ 190cm を測る。井筒は 2 段分確認でき、上段が径 65cm 前後、下段が 55cm 前後を測る。

出土遺物（第 43 図）206 ～ 208 は土師器の小皿。口径 8.8 ～ 9.4cm、器高 1.0 ～ 1.4cm を測る。底部は 206 がヘラ切り、207・208 は回転糸切り。208 は板状圧痕を有する。209 ～ 211 は白磁碗。209 はⅤ－ 4 類。口径 17.6cm を測る。210 はⅣ類。212 は塼。幅 9.6 ～ 9.8cm、厚さ 2.9cm を測る。調整はナデを施す。SE131 との切り合いから 12 世紀中頃～後半以降であろう。

（2）土坑（ＳＫ）

SK134（第 44 図）

調査区北に位置する。平面形は円形を呈し、径 145cm 前後、深さ 105cm を測る。

出土遺物（第 45 図）213 は土師器の小皿で口径 8.9cm、器高 0.9cm を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。214 ～ 219 は土師器の丸底坏で口径 15.0 ～ 17.0cm、器高 3.1 ～ 3.9cm を測る。底部は 214 が糸切りで他はヘラ切り。220 は土師器の椀。221・222 は白磁碗Ⅳ類。223 は白磁皿Ⅱ類。

224 ～ 227 は鉄製品。224 は円形を呈するがX線透視装置で確認したところ、棒状のものを丸めていることが判明した。225 ～ 227 は釘。11 世紀後半から 12 世紀前半と考えられる。

SK135（第 44 図）

調査区中央に位置する。平面形は楕円形を呈する。長さ 70cm、幅 60cm 程度、深 25cm を測る。
出土遺物（第 46 図）228 ～ 253 は土師器の小皿。口径 8.6 ～ 11.2cm、器高 0.8 ～ 1.8cm を測る。平均は口径 9.53cm、器高 1.41cm。底部はヘラ切りで 242 ～ 244 以外板状圧痕を有する。250 の底部には墨書で「なつめ」と記されている。254 ～ 266 は土師器の丸底坏。口径 14.8 ～ 15.6cm、器高 2.7 ～ 4.0cm を測る。底部はヘラ切りで、258 ～ 261・263・266 は板状圧痕を有する。267 ～ 272 は土師器の椀。口径 15.4 ～ 16.8cm、器高 5.4 ～ 6.1cm を測る。内外面とも丁寧なミガキを施す。273･274 は白磁椀Ⅴ－ 1a 類。273 は口径 16.3cm、器高 7.6cm、274 は口径 16.8cm を測る。275 は白磁皿Ⅱ類。口径 12.3cm、器高 3.2cm を測る。276・277 は釘。11 世紀後半から 12 世紀前半と考えられる。

SK210（第 44 図）

調査区北に位置する。平面形は円形を呈し、径 145cm 前後、深さ 105cm を測る。
出土遺物（第 47 図）278･279 は土師器の高台付皿。それぞれ口径 12.2・12.3cm、器高 2.7・2.3cm を測る。底部はナデを施すが 278 は板状圧痕が残る。

SK213（第 44 図）

調査区北に位置し、西側を SE130 に切られる。幅 110cm 程度、深さ 50cm を測る。
出土遺物（第 47 図）280・281 は土師器の小皿でそれぞれ口径 9.4・9.6cm、器高 1.0・1.3cm を測る。底部は 280 はヘラ切り、281 は風化により不明。282 は土師器の椀。283 は黒色土器 A 類。口径 15.6cm、器高 5.7cm を測る。外面はナデ、内面はミガキを施す。284 は黒色土器 B 類。口径 16.7cm、器高 6.0cm を測る。内外面とも丁寧な磨きを施す。体部下半にヘラ記号を有する。285 は白磁椀Ⅷ類。286 は土師質の鉢。口径 27.0cm、器高 8.9cm を測る。内外面はナデを施し、指頭圧痕が残る。287・288 は平瓦。287 は細かい斜格子叩き、凹面は布目痕が残り、端部はナデを施す。288 は斜格子叩き、凹面は布目痕が残る。12 世紀中頃～後半であろうか。

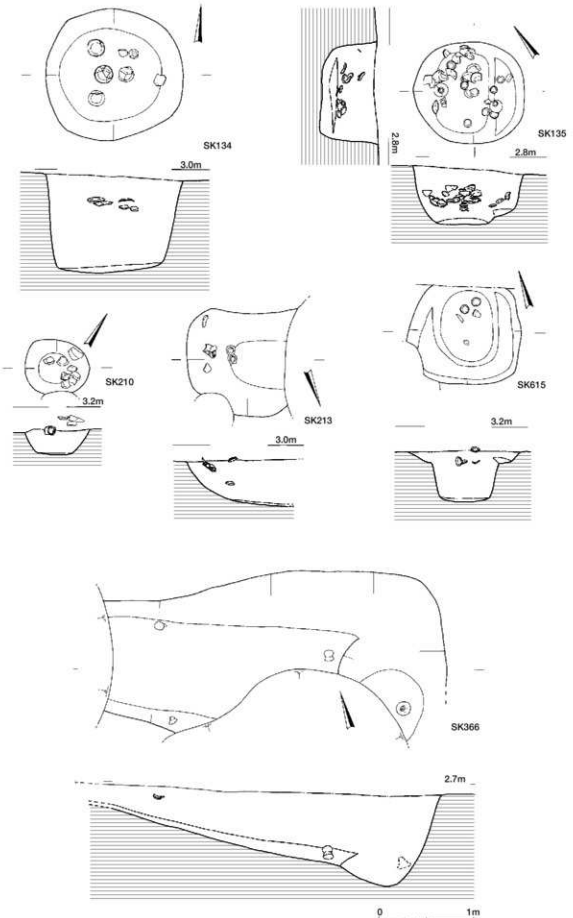
SK366（第 44 図）

調査区中央に位置し、SE241 に切られる。平面形は長方形か。東に向かい低くなり、端で 1 段深くなる。最深部で 95cm を測る。今回の調査で確認できた古墳時代前期の遺構はこれのみである。
出土遺物（第 47 図）289 ～ 293 は古式土師器。289 ～ 293 は高坏。289・290 はそれぞれ口径 16.2・17.6cm を測る。内外面ともナデを施す。291・292 は裾部径 16.0・11.2cm を測る。脚部はミガキを施し、裾部にハケメが残る。294 は小型丸底壺。口径 10.0cm、器高 9.2cm を測る。内外面ともハケメを施す。内面には指頭圧痕が残る。またこの遺構を中心に碧玉の剥片類が出土している。

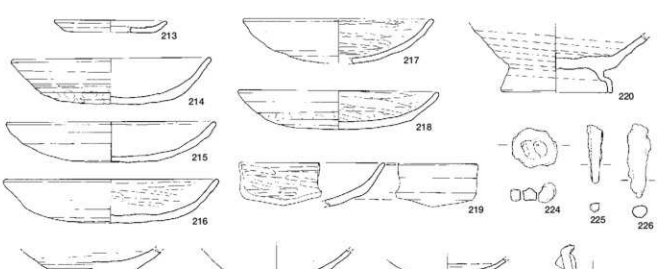
SK615（第 44 図）

調査区北東に位置する。平面形は方形を呈し、テラスを有する。東西 120cm、深さ 55cm を測る。
出土遺物（第 47 図）295 ～ 303 は土師器の小皿で口径 8.8 ～ 9.8cm、器高 1.0 ～ 1.3cm を測る。底部は 295・296・298・299・301・302 がヘラ切り、297・300・303 が回転糸切り。295・301・303 は板状圧痕を有する。304 は土師器の坏。口径 15.4cm、器高 3.1cm を測る。底部は回転糸切り。他に白磁、滑石が出土している。12 世紀代であろうか。

（3）溝状遺構（SD）



第44図　SK134・135・210・213・366・615実測図（1/40）



第 45 図　SK134 出土遺物実測図（1/3）

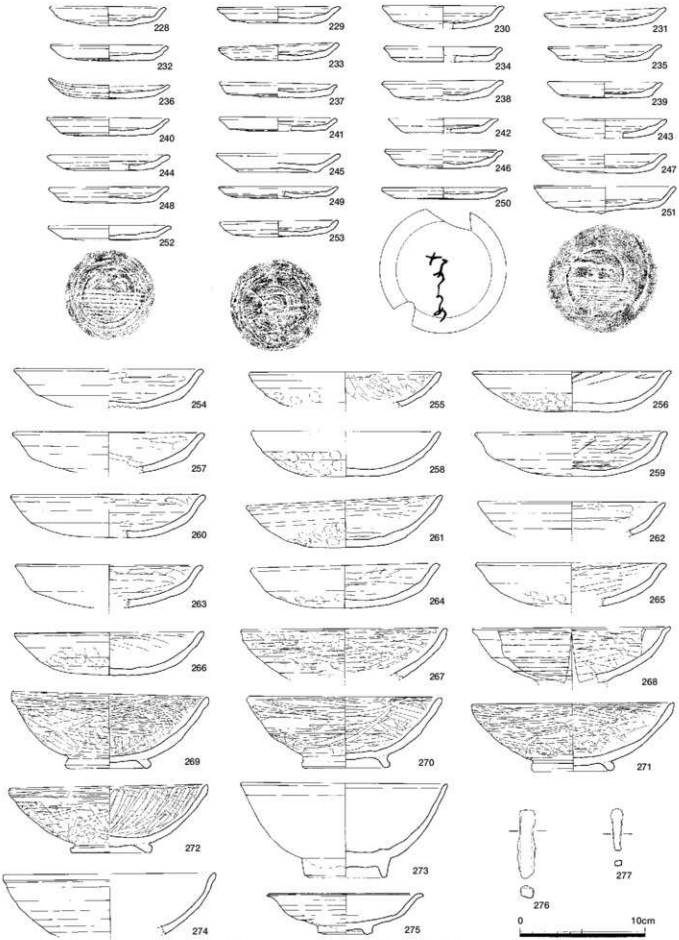
SD611（第 48 図）

調査区やや北寄りを東西方向に伸びる。SE257・382・614 を切る。幅 110cm、深さ 60cm を測る。西側に長さ 2m の範囲で礫が集中する。

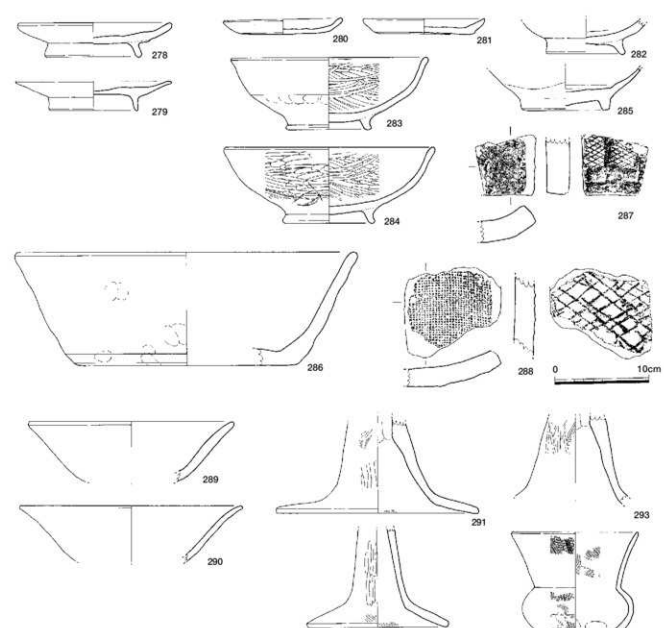
出土遺物（第 49 図）305 ～ 309 は土師器の小皿。口径 7.6 ～ 10.4cm、器高 0.9 ～ 1.5cm を測る。底部は 305・306 がヘラ切りで、他は回転糸切り。305・307・309 は板状圧痕を有する。310・311 は土師器の坏。それぞれ口径 11.8・15.6cm、器高 2.6・3.6cm を測る。底部は 310 が糸切り、311 がヘラ切りでともに板状圧痕を有する。312 は白磁碗Ⅴ類。口径 17.2cm を測る。313 は龍泉窯系青磁碗Ⅱ－ｂ類。口径 15.8cm を測る。314 は土師質の鍋。外面はナデ、内面はハケメを施す。315 は土師質の羽釜。内面はハケメ、外面に煤が付着する。316 は陶器の鉢。口径 23.8cm を測る。釉は灰褐色を呈する。317 は陶器の注口。釉は褐色を呈する。

（4）B 区出土遺物（第 49 図）

これまでに掲載できなかった遺構の遺物及びその他の遺物について掲載する。318 ～ 322 は SK115 出土。318・319 は土師器の小皿。それぞれ口径 9.8・9.2cm、器高 0.9・1.4cm を測る。底部は 318 がヘラ切り、319 が回転糸切りでいずれも板状圧痕を有する。320 は坏で口径 16.0cm、器高 2.9cm を測る。底部は回転糸切り。321 は丸底坏で口径 15.3cm を測る。底部は回転糸切り。322 は白磁碗Ⅴ－４ｂ類。323・324 は SK116 出土。323 は丸底坏で口径 16.0cm を測る。底部はヘラ切り。324 は土師器の小皿で底部に墨書を有する。回転糸切りで板状圧痕を有する。325 は SP125 出土。土師器の高台付皿。高台は剥離し、痕跡のみが残る。口径 12.0cm を測る。326・327 は SK150 出土。326 は土師器の小皿。口径 9.8cm、器高 1.0cm を測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。327 は瓦玉。328 は SP185 出土の土師器の小皿。口径 9.4cm、器高 1.0cm を測る。底部は回転糸切りで墨書を有する。329 は SP220 出土の土師器の丸底坏。口径 14.9cm、器高 3.7cm を測る。底部はヘラ切り後ナデを施す。330 ～ 334 は SP231 出土。330 ～ 333 は土師器の小皿。口径 8.8 ～ 10.0cm、器高 1.0 ～ 1.5cm を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。334 は土師器の椀。口径 16.4cm、器高 6.0cm を測る。外面はナデ、内面はミガキを施す。335 ～ 338 は SP233 出土。335・336 は土師器の小皿。それぞれ口径 10.0・10.1cm、器高 1.9・1.7cm を測る。底部はヘラ切

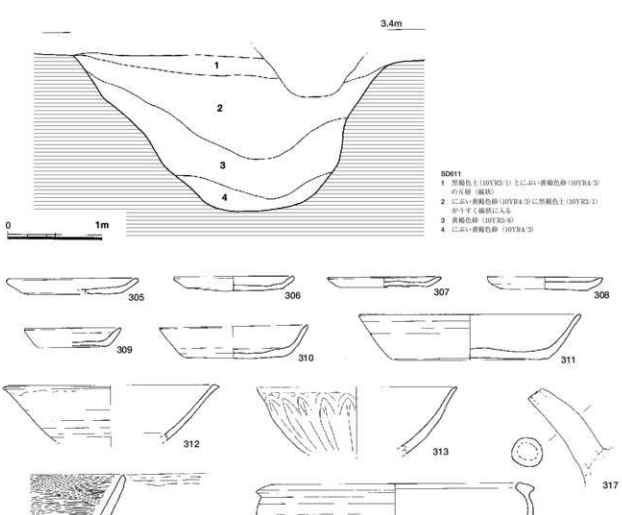


第46図　SK135出土遺物実測図（1/3）



第 47 図　SK210・213・366・615 出土遺物実測図（1/3・1/4）

りで 336 は板状圧痕を有する。337・338 は黒色土器 B 類。内外面とも丁寧なミガキを施す。339 ～ 343 は SK243 出土。339 ～ 341 は土師器の小皿。口径 9.2 ～ 10.0cm、器高 0.8 ～ 1.2cm を測る。底部はヘラ切りで 340・341 は板状圧痕を有する。342 は土師器の丸底坏。口径 15.0cm、器高 4.7cm を測る。底部はヘラ切り後ナデを施す。343 は土師器の椀。口径 16.1cm、器高 5.1cm を測る。内外面ともミガキを施す。344 ～ 346 は SD287 出土。344・345 は土師器の小皿。それぞれ口径 8.7・8.8cm、器高 1.2・1.3cm を測る。底部は回転糸切りで 345 は板状圧痕を有する。346 は白磁碗Ⅱ類。

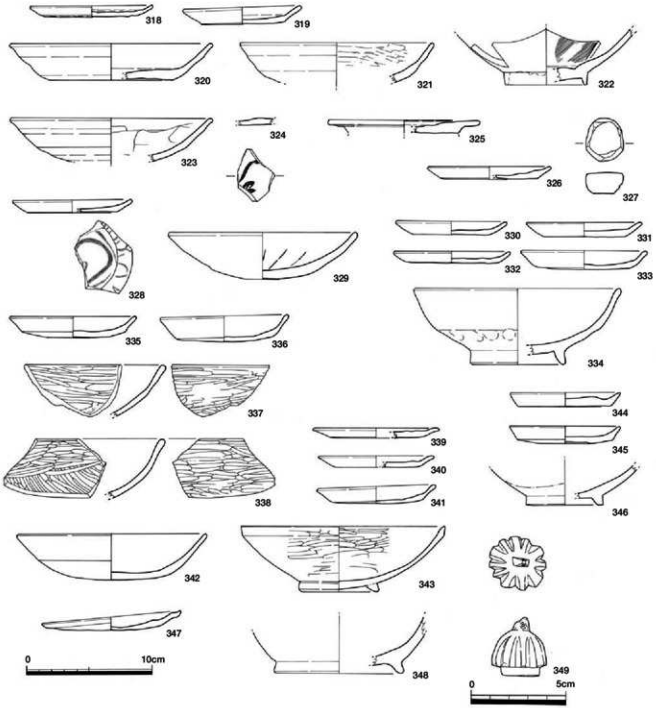


第 48 図　SD611 土層実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

347 は SP327 出土の土師器の小皿。口径 11.0cm、器高 1.5cm を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。348 は SK339 出土の黒色土器 A 類。349 は SE131・621 周辺出土の青銅製権。頂部に鈕、下部に台が付く。体部は釣鐘形を呈し、11 条の溝が切られる。高さ 3.2cm、幅 2.9cm、台径 2.0cm、重さ 72 g を測る。

箱崎遺跡 47 次調査出土金属製権の材質調査結果

箱崎 47 次調査で出土した金属製の権について、蛍光 X 線分析装置による含有元素の調査を行った。その結果、銅（Cu）が突出して強いピークとして現れ、次いでヒ素（As）、鉄（Fe）が有り、他に非常に微弱ながら銀（Ag）、錫（Sn）、アンチモン（Sb）といったピークが検出された。この内、鉄は、日本の土壌に豊富に含まれる元素で、今回の分析では表面をアルコールで洗浄してから分析に供しているが、土壌の影響は排除されているとは言い切れず、資料に含まれる元素か埋蔵環境下で遷移した



第49図　B区出土遺物実測図（1/2・1/3）

ものかの判断はつかない。考古資料に一般的な青銅は、銅－錫－鉛という組成であるが、本資料の場合、鉛は確認されておらず、銅－錫－ヒ素（－アンチモン）ということになる。

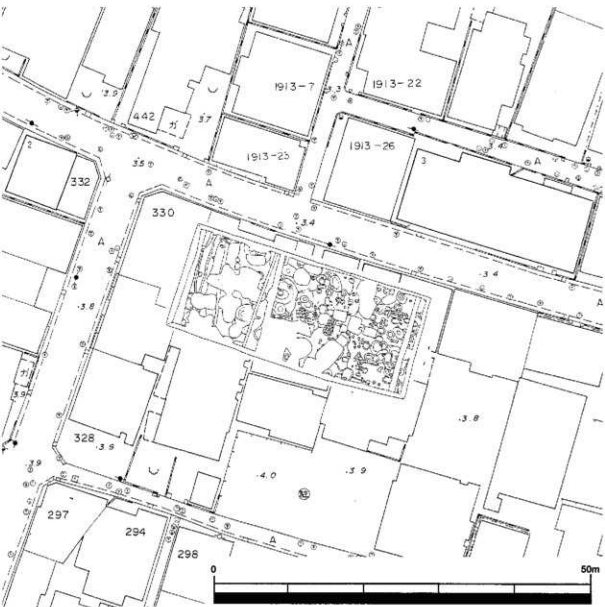
ヒ素は奈良の大仏に代表されるような奈良時代の青銅製品に、比較的多く含まれるとされる。これはヒ素を含む原料鉱石が用いられたことによるもので、山口県長登鉱山がその出自とされる。またアンチモンは正倉院御物にインゴットが存在したり、最古の国産貨幣である富本銭にも多く含まれていることが確認されており、錫の代替品として用いられた可能性が指摘されている。いずれも奈良時代の事例と繋がる要素であり、資料の年代を推定する手掛かりになるのかもしれない。

3．C区

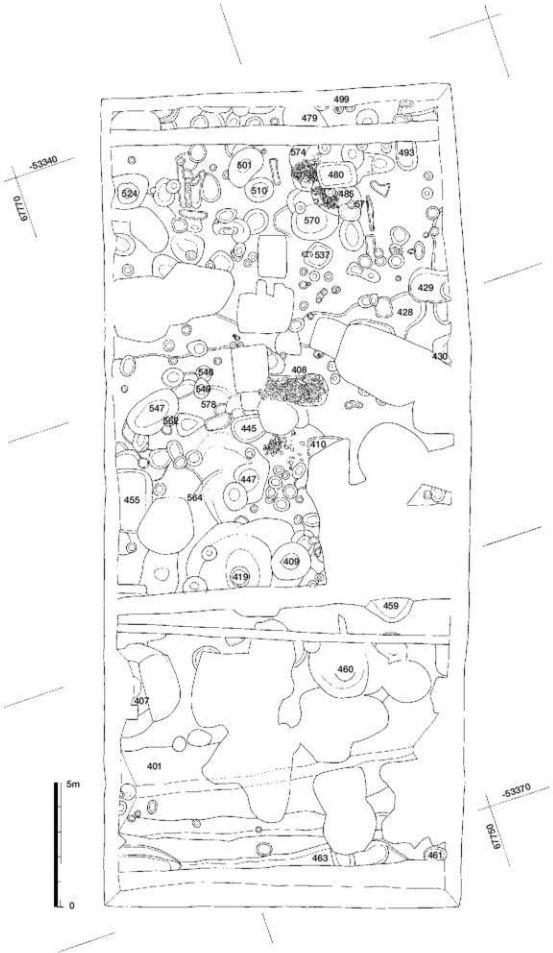
C区は第45次調査の東に隣接する。調査区の西側は深い攪乱が多く、遺構の残存状況は悪い。検出遺構は井戸、土坑、溝、柱穴等である。調査面積は465.5㎡。現況は標高3.5ｍで、基本層序は 1．近現代整地層　2．黒褐色砂質土（炭化物混じる）　3．暗褐色砂（遺物包含層）　4．にぶい黄褐色砂　5．黄褐色砂(地山)となる。遺構は3層以下で掘り込まれているが、攪乱の影響や確認が困難であったため、5層近くで検出作業を行った。

(1) 井戸（SE）

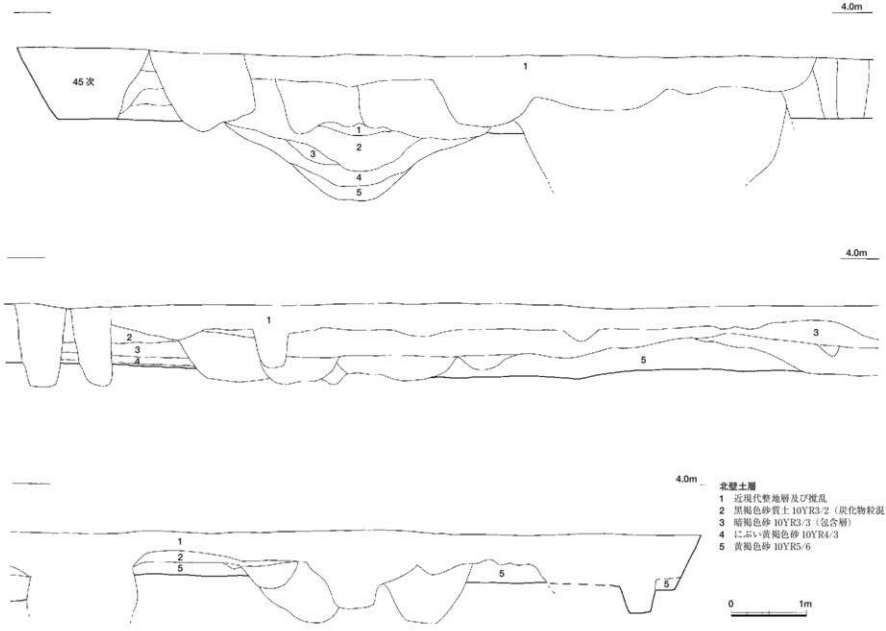
調査区内で3基確認した。調査区の西半部を中心に分布する。



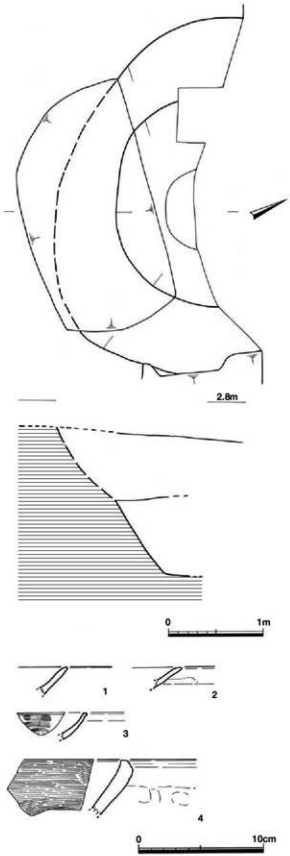
第50図　第47次C区調査区位置図（1/500）



第51図　C区遺構配置図（1/150）



第52図 C区土層実測図（1/50）



第53図　SE407 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SE407（第53図）

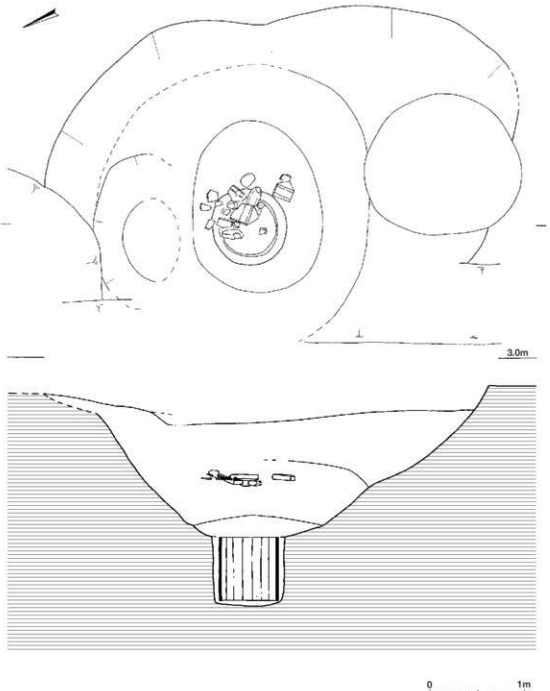
調査区西北に位置し、掘方南側上部を撹乱に切られ、北側は調査区外に延びる。掘方は円形か。標高1.2mで段を有する。底面は確認できていない。

出土遺物（第53図）1は土師器の坏。2は白磁皿。3は染付皿。4は瓦質の鉢。外面はナデ、内面はハケメを施す。他に釘、滑石製品、瓦等が出土している。遺物が少なく、また撹乱や調査区壁の遺物が混入している可能性が高く時期は不明。

SE419（第54図）

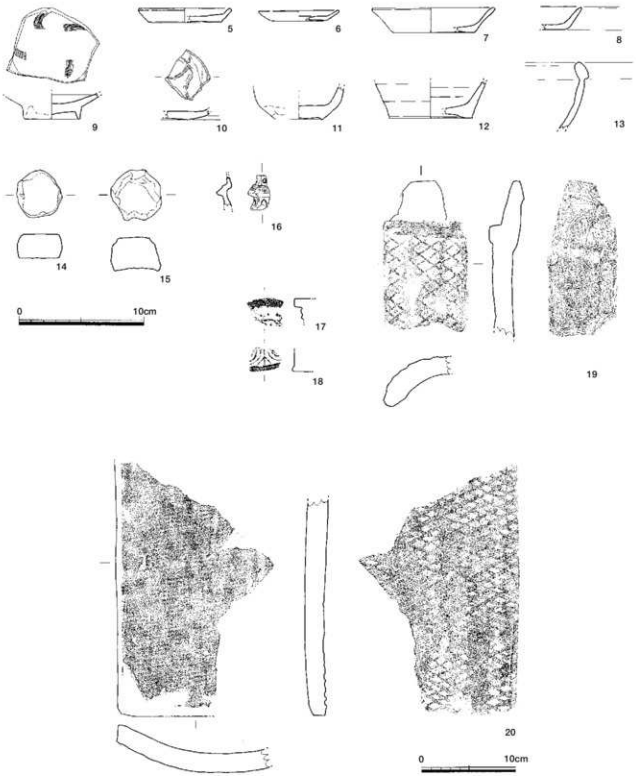
調査区中央、やや西寄りに位置し、掘方西側を撹乱に切られる。検出時の平面形からは遺構の切り合いが考えられたが、結果的に1基のみの検出であった。標高1.7mで、板碑や瓦等の遺物が集中して廃棄されていた。この高さで掘方の傾斜が変わることから、検出時の平面形と合わせて考えると、これより上部は構築時の掘方ではなく、井戸の廃絶時の掘削あるいはそれ以降に掘削された可能性がある。掘方は標高1.2mで段を有し、中央に井筒を据える。井筒は幅10cmの板材を組み合わせた径60cmの桶が用いられ70cm程遺存する。

出土遺物（第55・56図）5・6は土師器の小皿。それぞれ口径10.0・8.6cm、器高1.5・1.1cmを測る。底部は糸切りで5は板状圧痕を有する。7・8は土師器の坏で底部は糸切り。7は口径12.6cm、器高2.6cmを測る。

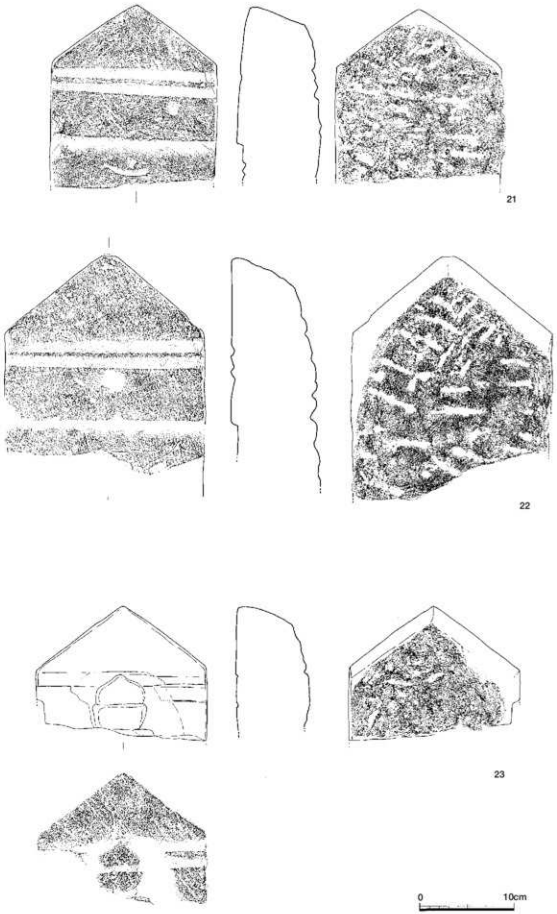


第 54 図　SE419 実測図（1/40）

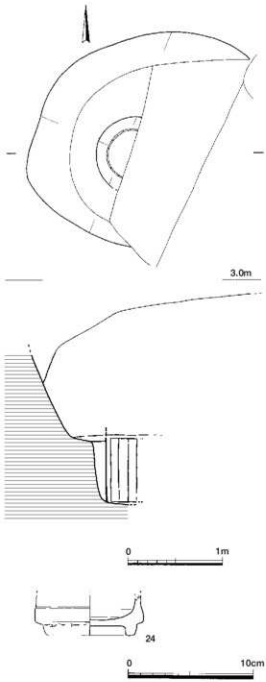
9 は白磁碗Ⅴ－4 類。10 は同安窯系青磁皿Ⅰ－2 類。11・12 は陶器の壺。13 は陶器の鉢。内面に施釉され、白色を呈する。14・15 は瓦玉。縁を打ち欠いて整形している。16 は型押しの土製品で花燈窓を有する建物。橙色を呈する。17 は軒丸瓦。暗灰色を呈する。18 は巴文の軒平瓦。橙色を呈する。19 は丸瓦。凸面は斜格子叩き、凹面は布目痕が残る。橙色を呈する。20 は平瓦。凸面は斜格子叩き、凹面は布目痕が残る。橙色を呈する。21 ～ 23 は板碑。いずれも砂岩製で三角形に整形された頭部のみが遺存する。21 は幅 17.7cm、厚さ 8.9cm を測る。二条線を有し、種子の一部が残る。アーン



第 55 図　SE419 出土遺物実測図①（1/3・1/4）



第 56 図　SE419 出土遺物実測図②（1/4）



第 57 図　SE460 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

クあるいはバーンクであろうか。裏面には工具痕が残る。22 は 幅 21.1cm、厚さ 9.1cm を測る。二条線を有する。裏面には工具痕が残る。23 は幅 18.2cm、厚さ 7.8cm を測る。五輪塔が刻まれている。裏面には工具痕が残る。これらの板碑全てが被熱している。廃絶期あるいは上層遺構については 15 世紀以降が考えられるが、井戸の時期については 12 世紀後半以降であるが確定できない。

SE460（第 57 図）

調査区西に位置する。東側の既存水道管を残したため完掘できなかった。掘方の平面形は円形もしくは楕円形で、標高 1.3m で段を有し、井筒を据える。井筒は幅 10cm の板材を組み合わせた桶で、径は 60cm 程度であろう。

出土遺物（第 57 図）24 は陶器。他に土師器、瓦が出土している。遺物が少なく時期は決め難いが近世と思われる。

（2）土坑（SK）

SK408（第 58 図）

調査区のやや西寄りに位置する瓦の廃棄土坑である。平面形は長方形を呈し、中央部が窪む。北側を攪乱で切られる。長さ 270cm 以上、幅 128cm、深さ 45cm を測る。

出土遺物（第59～63図）廃棄された多量の瓦が出土した。大半は細片で完形に復元できるものはない。ここでは比較的残りのよい典型的なものを掲載した。また、瓦以外の土器類の出土は掲載したものを含めても非常に少ない。25・26 は土師器の小皿。それぞれ口径 7.4・8.8cm、器高 1.4・1.7cm を測る。底部は回転糸切り。27 は高台付皿。口径 8.4cm、器高 1.7cm を測る。焼成後、底部に穿孔を施す。

28 は土師器の坏。口径 12.0cm、器高 2.7cm を測る。底部は回転糸切り。29 は白磁Ⅲ類Ⅶ－１ｂ類。30 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類。31 は青白磁の小坏。32 ～ 35 は軒瓦。SK408 からは多量の瓦が出土したが確認できた軒瓦はここに掲載したもののみである。32・33 は軒丸瓦。32 は 217 形式。33 は巴文であろう。34・35 は軒平瓦。いずれも巴文で橙色を呈する。33 ～ 35 の軒瓦が以下の瓦と組み合わさるものと考えられる。36 ～ 38 は丸瓦。丸瓦には凸面に叩き目を有するものとナデで仕上げらたものがあり、叩き目は細い斜格子の１種類のみが確認されている。色調は橙色のものが大半を占めるが、他に灰色や中間色的なものもある。端部の調整手法の違いによりさらに細分できる。36 は全長 34.8cm、玉縁部長 5.7cm、幅 14.9cm を測る。凸面は縦方向のナデを施す。叩きの痕跡は完全にナデ消されたのか確認できない。凹面は布目痕が残る。橙色を呈する。37 は長さ 34.8cm、玉縁部長 4.1cm、幅は上位で 14.0cm を測る。凸面は斜格子叩き、凹面は布目痕が残る。橙色を呈する。38 は玉縁部長 5.3cm、幅 14.1cm を測る。凸面は斜格子叩き後ナデ、凹面は布目痕が残る。灰色を呈する。39 ～ 44 は平瓦。平瓦も丸瓦同様に凸面に叩き目を有するものとナデで仕上げらたものに分けられるが、叩き目は格子の太さで２種類以上に分けられる。凹面は布目を残すものとナデ消すものがある。これらも色調は橙色のものが大半を占めるが、他に灰色や中間色的なものもある。端部の調整手法の違いによりさらに細分できる。39 は長さ 32.8cm、幅 22.4cm を測る。凸面はナデを施す。叩きの痕跡は完全にナデ消されたのか確認できない。凹面は布目痕が残る。にぶい黄橙色を呈する。40 は長さ 33.1cm、幅 23.1cm を測る。凸面は斜格子叩き後ナデ、凹面は布目痕が残る。橙色を呈する。41 は長さ 31.9cm、幅 22.1cm を測る。凸面は斜格子叩き後ナデ、凹面は斜め方向のナデを施す。灰白色を呈する。42 は長さ 32.2cm、幅 21.8cm を測る。凸面は斜格子叩き、凹面は布目痕が残り、両端部はケズリを施す。橙色を呈する。43 は長さ 32.4cm、幅 22.3cm を測る。凸面は斜格子叩き後ナデ、凹面は縦方向のナデを施す。灰白色を呈する。44 は長さ 32.5cm を測る。凸面は斜格子叩き後両端を斜めにうねるようにナデを施し、凹面は縦方向のナデを施す。一部布目痕が残る。橙色を呈する。中世であるが時期は確定できない。

SK409（第 64 図）

調査区中央に位置する。平面形は円形を呈し、径 150 ～ 160cm、深さ 81cm を測る。

遺物は土師器、瓦、陶器の破片が出土している。中世であるが時期は確定できない。

SK410（第 64 図）

調査区中央区に位置し、撹乱に西側を切られる。平面形は長方形か。残存長 140cm、深さ 40cm を測る。底面に石が配置されるが、北東隅の石は板碑の頭部であった。

出土遺物（第 65 図）45 は平瓦。凸面は斜格子叩き、凹面は布目痕が残る。橙色を呈する。46 は板碑。砂岩製で頭部を三角形に整形する。幅 20.3cm、厚さ 10.6cm を測る。表面は二条線を有し、種子は月輪にキリークを配する。裏面には工具痕が残る。頭部の一部が欠損している。SE419 出土の板碑同様被熱している。他に土師器、白磁、瓦の細片が少量出土している。板碑が廃棄されていることから 15 世紀以降であろうが詳細な時期は不明。

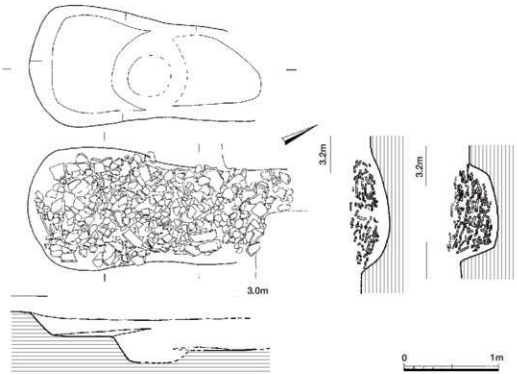
SK445（第 64 図）

調査区中央区に位置し、撹乱に南側を切られる。平面形は楕円形を呈し、長さ 120cm 以上、幅 108cm、深さ 50cm を測る。

遺物は土師器、口禿げの白磁、瓦の細片が少量出土している。中世であろうか時期は確定できない。

SK447（第 64 図）

調査区中央区に位置し、SK445 に切られる。平面形は不整な方形か。西側は１段低くなる。深さ



第 58 図　SK408 実測図（1/40）

40cm を測る。

出土遺物（第 65 図）47 は瓦器の坏。内面はミガキを施す。底部は未調整。48 は白磁碗Ⅳ類。49 は陶器の皿。口径 10.2cm、器高 3.2cm を測る。暗赤灰色を呈す。50 は土師質の鍋。L 字状の口縁を呈し、上面に刻目を施す。内面はハケメ、外面は煤が付着する。12 世紀以降であろうか。

SK455（第 64 図）

調査区中央、北端に位置し、北側は調査区外に延びる。平面形は方形か。長さ 255cm、深さ 33cm を測る。

遺物は土師器、染付け、瓦の細片が少量出土している。遺物が少ないため時期は確定できない。近世か。

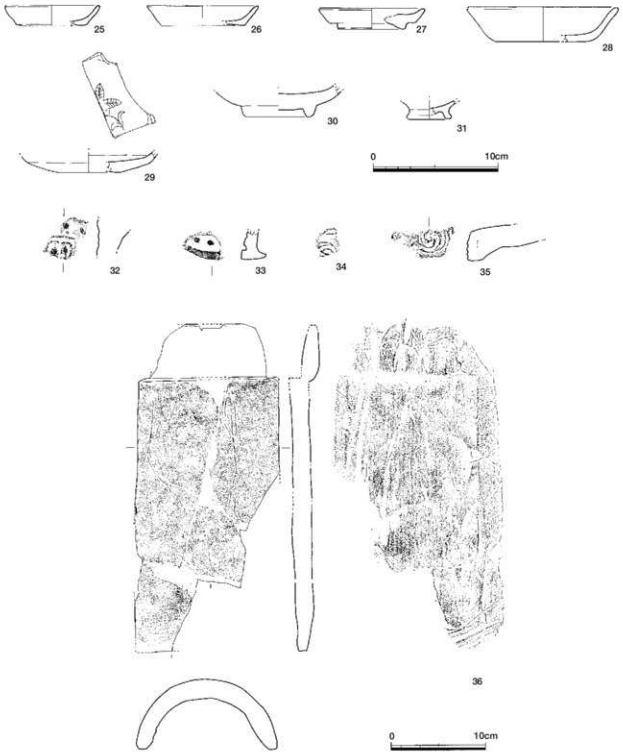
SK479（第 64 図）

調査区東端に位置し、西側を攪乱に切られ、東側は調査区外に延びる。平面形は楕円形か。深さ 45cm を測る。

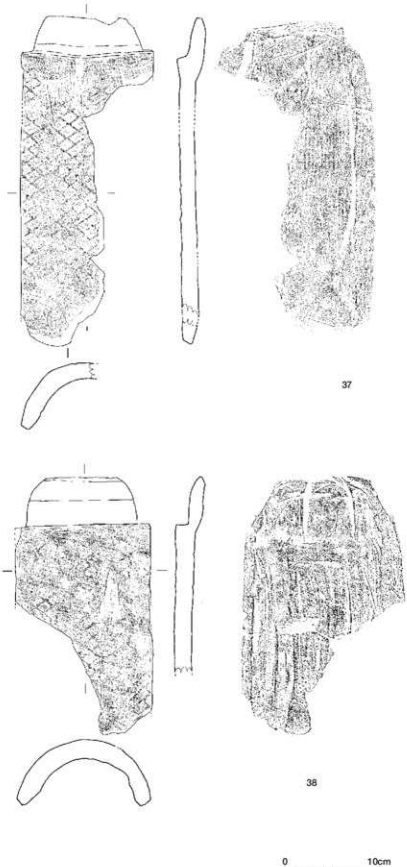
出土遺物（第 66 図）51 ～ 54 は土師器の小皿。口径 8.7 ～ 9.6cm、器高 1.0 ～ 1.1cm を測る。底部は回転糸切りで 52・54 は板状圧痕を有する。55 ～ 57 は土師器の坏。口径 13.6 ～ 15.6cm、器高 2.4 ～ 3.5cm を測る。底部は回転糸切りで 56 は板状圧痕を有する。58・59 は丸底坏。58 は口径 16.0cm を測る。60・61 は土師器の椀。62 は瓦器椀。口径 17.0cm、器高 5.5cm を測る。内外面とも粗いミガキを施す。63 ～ 65 は白磁碗。63 はⅧ類。口径 14.9cm、器高 5.4cm を測る。64 はⅤ－４ｂ類。65 はⅣ類。66 は土師質の甕。外面は口縁部がヨコナデ、胴部が縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメを施す。67 は須恵質の甕。口径 18.3cm を測る。外面はヨコナデ、内面は当て具痕が残る。68 は滑石製石鍋の再用品。底部に穿孔を施す。

SK480（第 64 図）

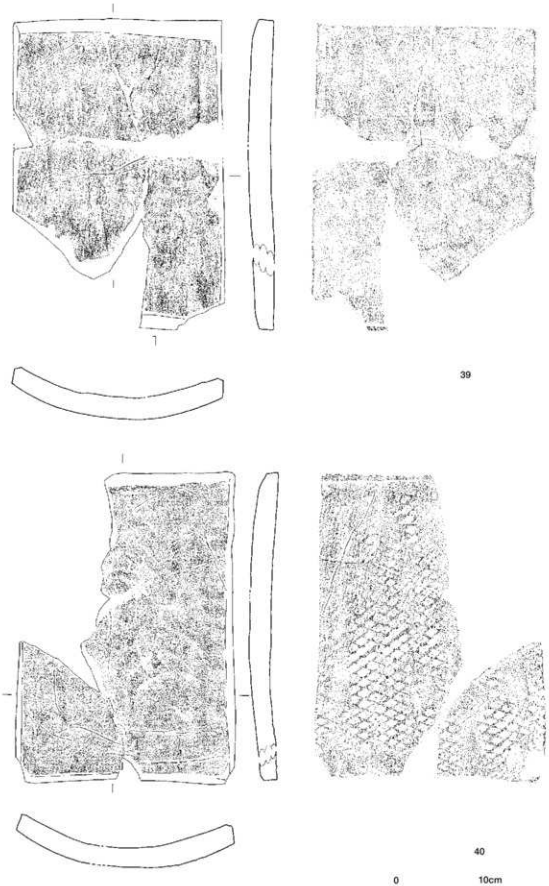
調査区東に位置し、SK485 を切る。平面形は長方形を呈し、長さ 148cm、幅 104cm、深さ 30cm



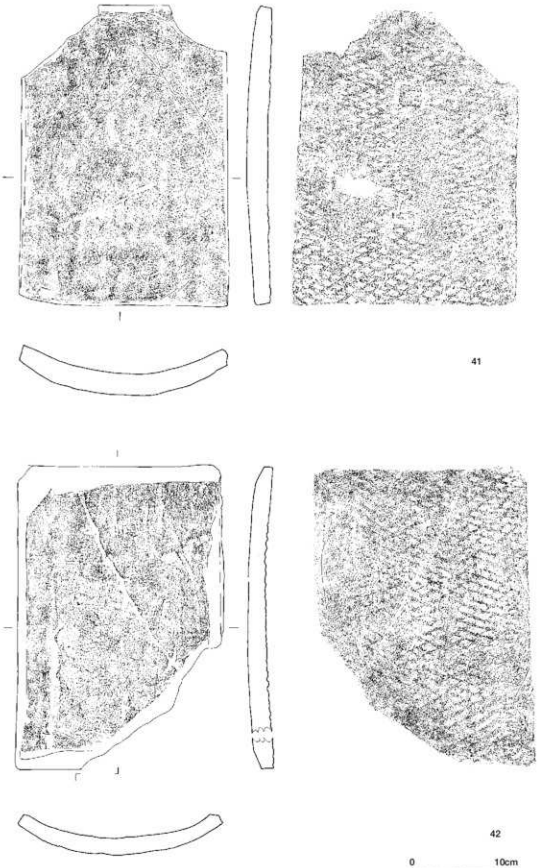
第 59 図　SK408 出土遺物実測図①（1/3・1/4）



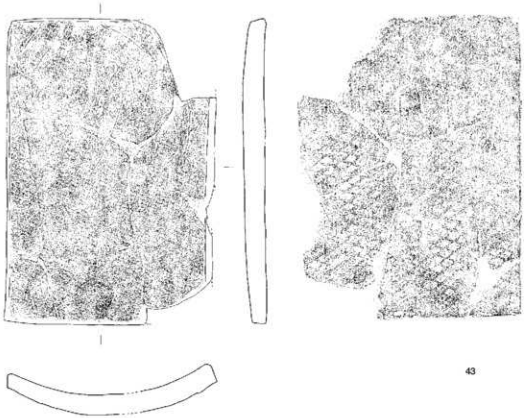
第60図　SK408出土遺物実測図②（1/4）

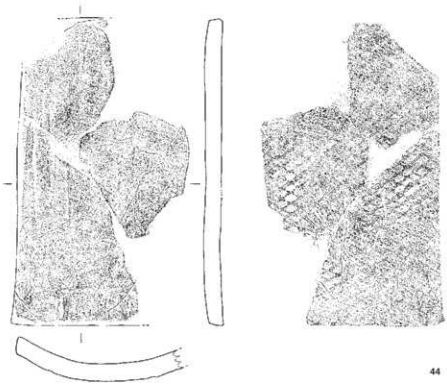


第61図　SK408 出土遺物実測図③（1/4）



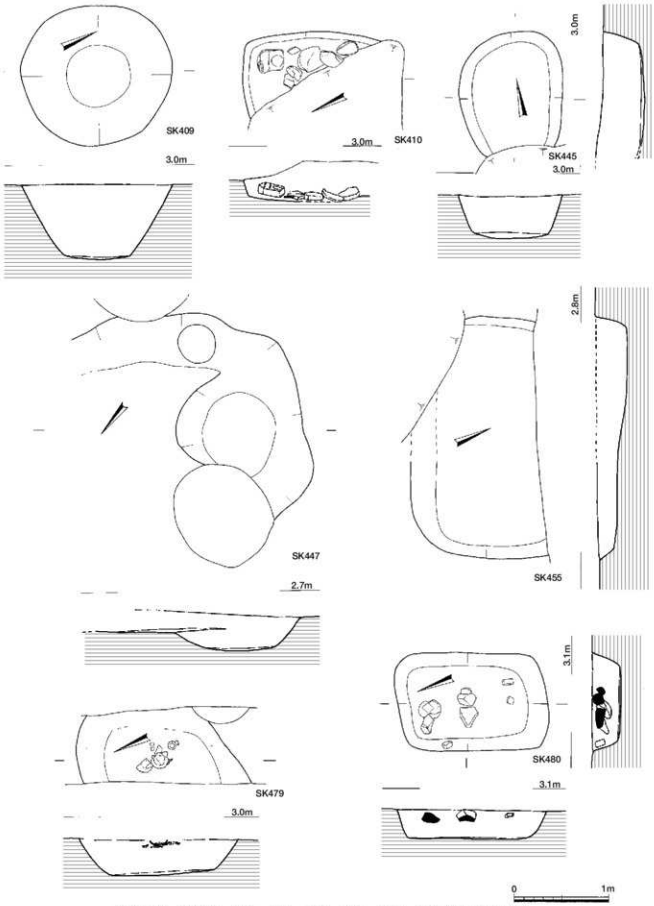
第62図　SK408出土遺物実測図④（1/4）





0 10cm

第 63 図　SK408 出土遺物実測図⑤（1/4）



第 64 図　SK409・410・445・447・455・479・480 実測図（1/40）

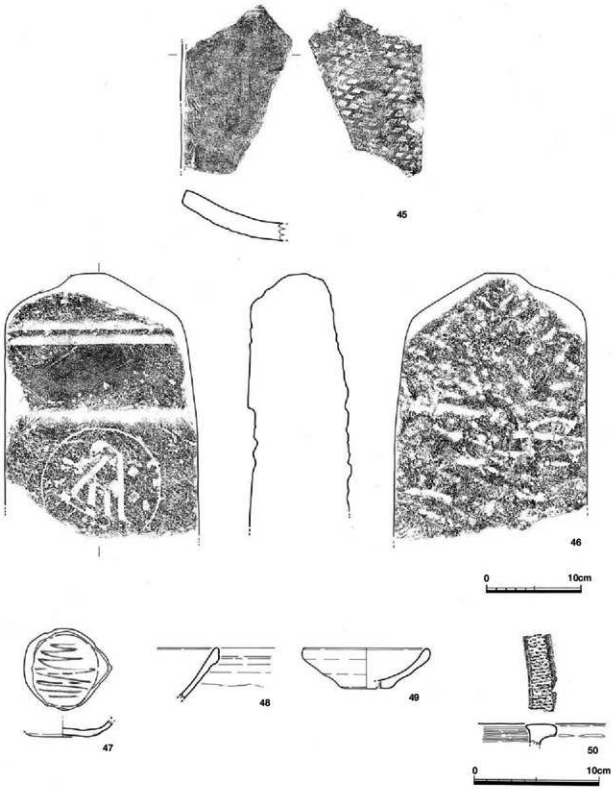
を測る。覆土上層には 20cm 大の礫が含まれている。
出土遺物（第 66 図）69 は土師器の小皿。口径 8.9cm、器高 1.2cm を測る。底部は回転糸切り。70 ～ 73 は土師器の坏。口径 13.8 ～ 16.1cm、器高 2.3 ～ 3.1cm を測る。底部は回転糸切りで 70・72・73 は板状圧痕を有する。74 は丸底坏。口径 14.8cm を測る。75 は陶器の皿。口径 10.1cm、器高 3.0cm を測る。赤褐色を呈する。76 は瓦器椀。77 ～ 79 は鉄製品。78・79 は釘。80 は丸瓦。玉縁部長 3.7cm を測る。凸面は横方向のナデ、凹面は布目痕が残る。灰色を呈し、焼成は良好。SK485 を切ることから 13 世紀以降の土坑であろうか。

SK485（第 67 図）

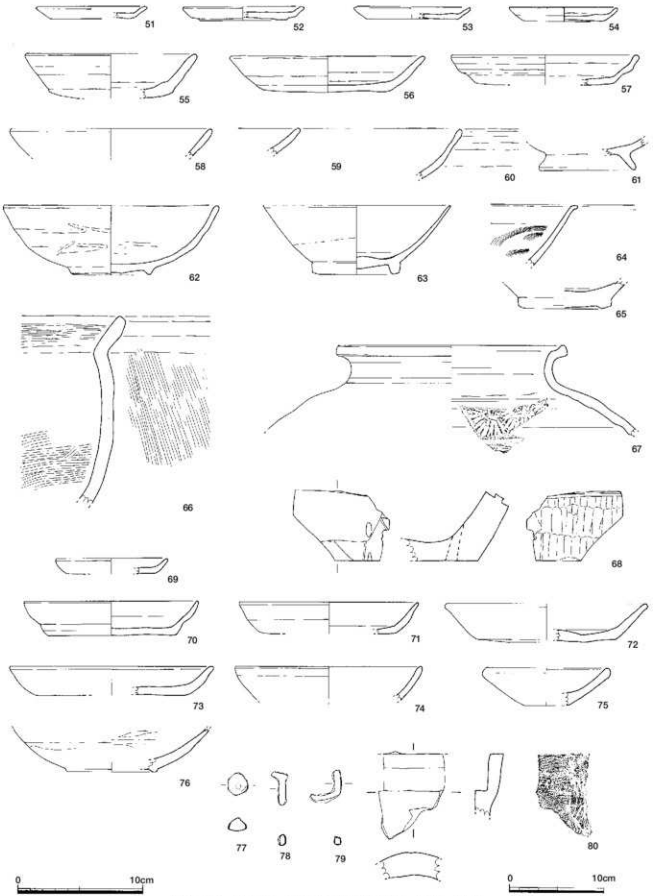
調査区東に位置し、SK480 に切られる。検出段階では平面形が判然とせず、1 基の廃棄土坑として捉えていたが、遺物を取り上げていく過程で 2 基の重複関係であることが判明した。そこで、便宜上、これ以降は東側を上段、西側を下段として取り上げを行った。本来、別の番号を付すべきであろうが、ここでは SK485 上段、下段として報告する。上段は長さ 180cm、幅 130cm 程度の規模をもつ楕円形の土坑、下段は長さ 220cm、幅 150cm 程度の規模をもつ楕円形の土坑と考えられる。上段が下段を切っている。いずれからも多量の土師器の小皿、坏を中心とした遺物が出土している。
出土遺物（第 68 ～ 72 図）上段　81 ～ 200 は土師器の小皿。口径 8.0 ～ 9.9cm、器高 0.8 ～ 1.6cm を測る。平均は口径 8.69cm、器高 1.23cm。底部は全て回転糸切りで大半が板状圧痕を有する。81 ～ 97 は灯明皿として使用されたもの。201 ～ 210 は土師器の坏。口径 14.2 ～ 16.2cm を測る。平均は口径 15.54cm、器高 2.98cm。底部は全て回転糸切りで大半が板状圧痕を有する。211 は瓦器椀。口径 17.2cm、器高 5.3cm を測る。内外面ともミガキを施すが、風化している。底部にヘラ記号を有する。212 ～ 214 は白磁椀。212 はⅣ－ 1a 類。口径 14.6cm、器高 6.0cm を測る。213 はⅤ類。口径 15.2cm を測る。214 はⅧ類。器壁は薄く、見込みに砂目が付着する。215 は白磁皿Ⅳ－ 1a 類。216 は天目椀。口径 11.8cm、器高 5.6cm を測る。釉は黒色を呈し、爛れたように施される。露胎部は橙色を呈する。
下段　217 ～ 284 は土師器の小皿。口径 8.2 ～ 10.4cm、器高 0.9 ～ 1.7cm を測る。平均は口径 8.95cm、器高 1.20cm。底部は全て回転糸切りで大半が板状圧痕を有する。285 ～ 333 は土師器の坏。口径 14.1 ～ 17.0cm、器高 2.1 ～ 3.8cm を測る。平均は口径 15.54cm、器高 3.05cm。底部は全て回転糸切りで大半が板状圧痕を有する。334 は瓦器椀。口径 17.0cm を測る。内外面ともミガキを施す。335 は須恵質の甕。336 ～ 341 は白磁椀。336 はⅣ類。口径 16.0cm を測る。337 はⅤ－ 2c 類。口径 17.0cm を測る。338 はⅣ類の底部で周縁を打ち欠いて遊具としている。339 はⅡ－ 4a 類。口径 16.6cm、器高 6.3cm を測る。底部に墨書を有する。340 はⅤ類。341 はⅧ類。342 ～ 345 は白磁皿。342 はⅢ－ 1 類。口径 10.4cm、器高 2.9cm を測る。343 はⅥ－ 1a 類。口径 10.2cm、器高 2.9cm を測る。344 はⅣ－ 2a 類。口径 9.6cm、器高 2.1cm を測る。345 は同安窯系青磁椀Ⅰ－ 1 c 類。口径 16.4cm を測る。346 は龍泉窯系青磁皿Ⅰ－ 1 b 類。口径 10.6cm、器高 2.3cm を測る。347 は無釉陶器の鉢。口径 25.0cm、器高 9.3cm を測る。胎土は粗く、灰赤色～赤褐色を呈する。348 は陶器の耳壺。口径 9.4cm を測る。釉は暗オリーブ色を呈する。また上層からは貝が集中して出土した。

以上、上段と下段に分けて報告したが、土師器の法量ではほとんど差が見られない。陶磁器の組成では下段に青磁が見られ、むしろ逆転しているが、何れにせよ短い時間で連続的なものであり、12 世紀後半以降と考えられる。

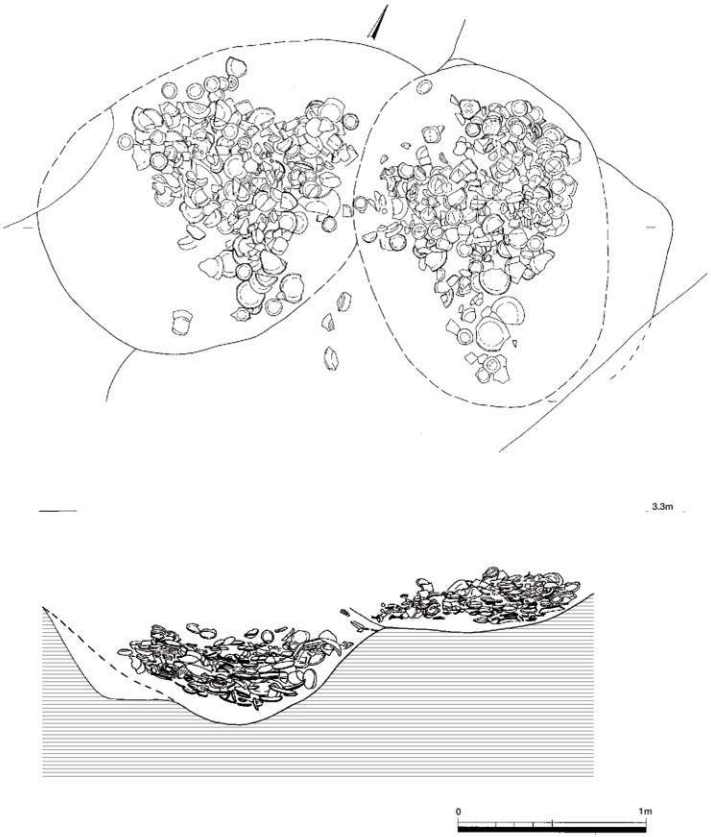
SK493（第 73 図）



第 65 図　SK410・447 出土遺物実測図（1/3・1/4）

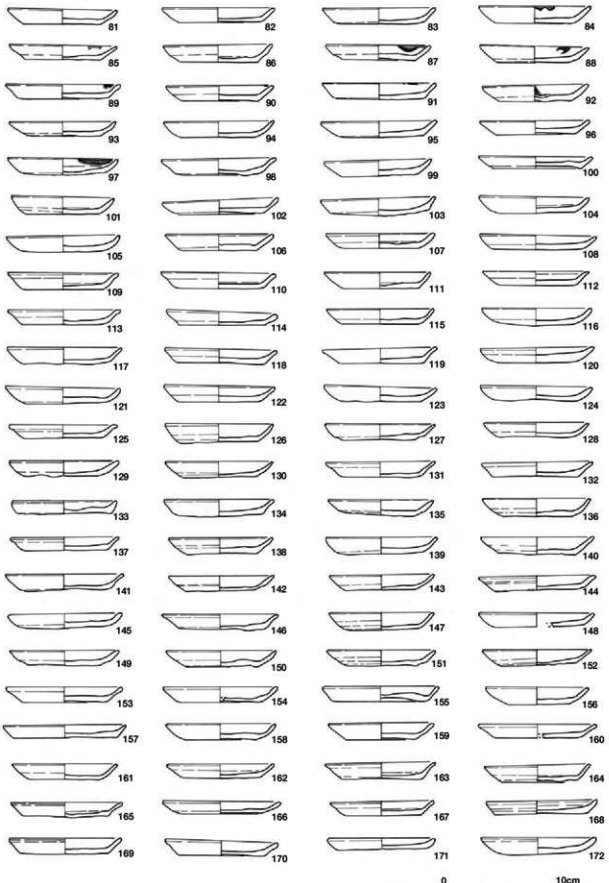


第 66 図　SK479・480 出土遺構実測図（1/3・1/4）

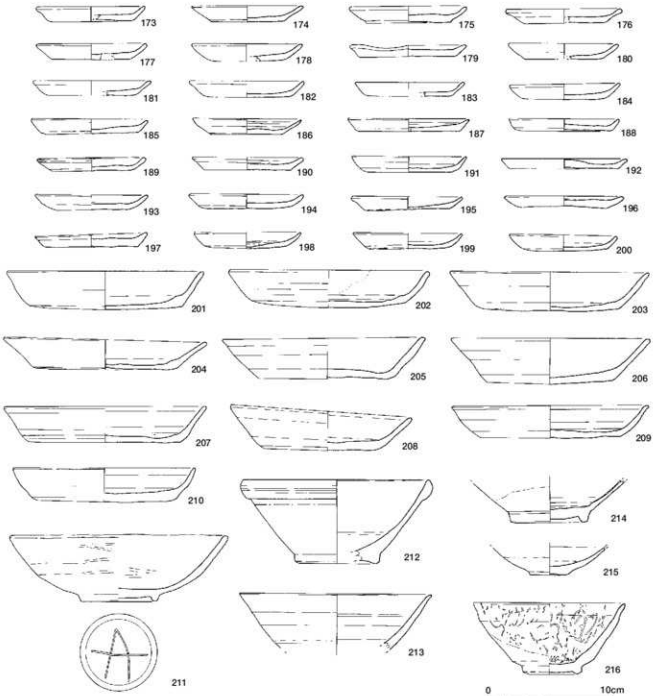


第 67 図　SK485 実測図（1/20）

調査区東南に位置し、東側を攪乱に切られる。平面形は長方形か。長さ 115cm 以上、幅 85cm、深さ 23cm を測る。



第68図　SK485 出土遺物実測図①（1/3）



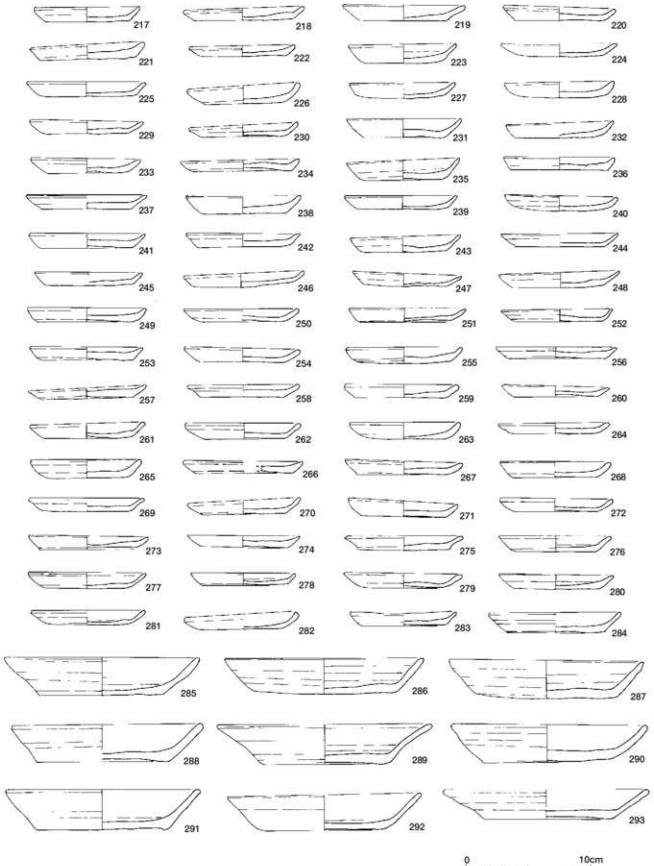
第69図　SK485出土遺物実測図②（1/3）

遺物は土師器、同安窯系青磁、瓦の細片が少量出土している。中世であろうが遺物が少なく時期は確定できない。

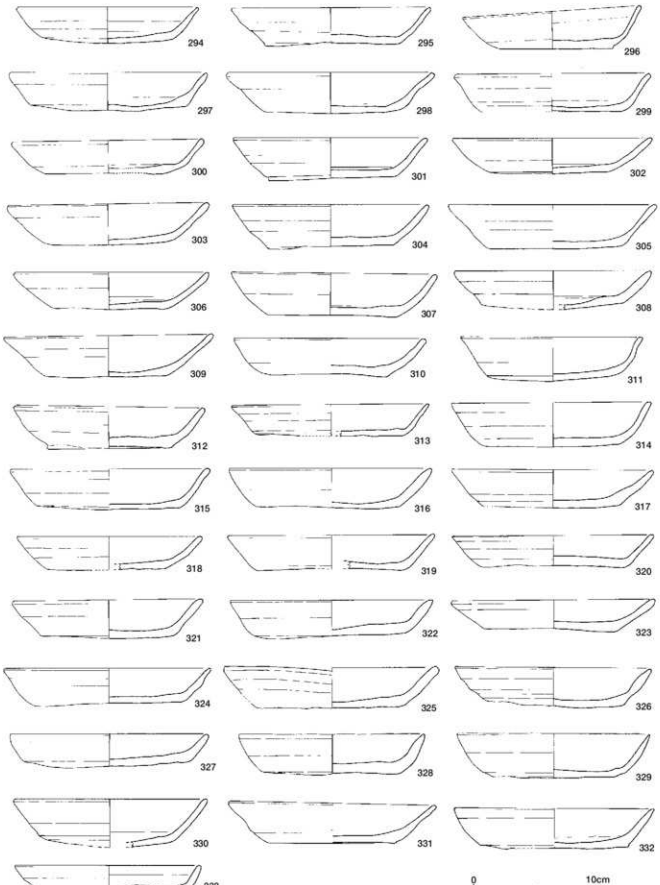
SK501（第73図）

調査区東に位置し、SK510を切る。平面形は不整な楕円形を呈し、長さ170cm、幅112cm、深さ51cmを測る。

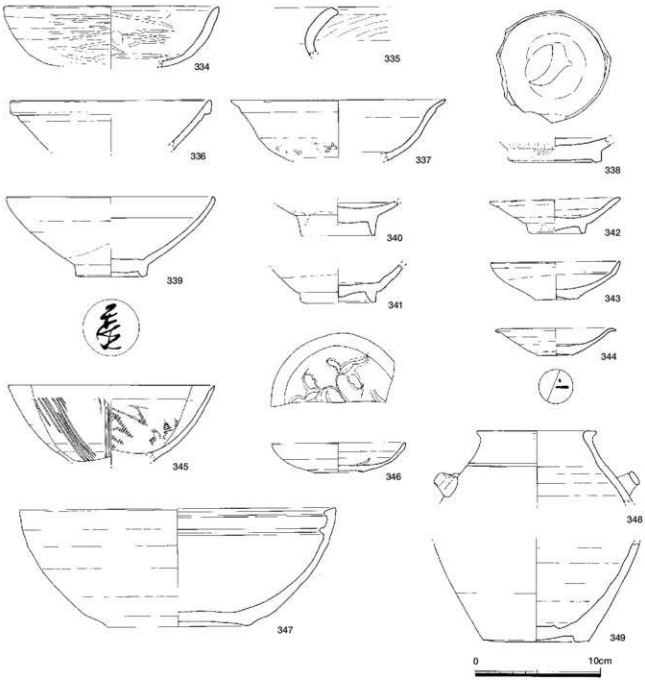
出土遺物（第74図）350･351は陶器。350は碗。釉はにぶい赤褐色～黒褐色を呈する。351は鉢か。



第 70 図　SK485 出土遺物実測図③（1/3）



第71図　SK485出土遺物実測図④（1/3）



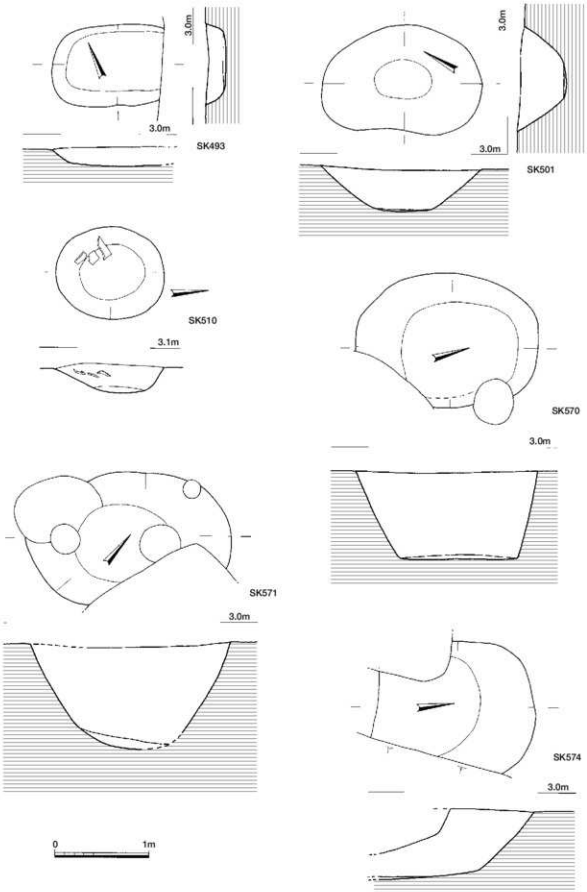
第 72 図　SK485 出土遺物実測図⑤（1/3）

釉は灰白色を呈する。見込みに目跡が残る。他に土師器、瓦の細片が出土している。遺物が少なく時期は確定できない。

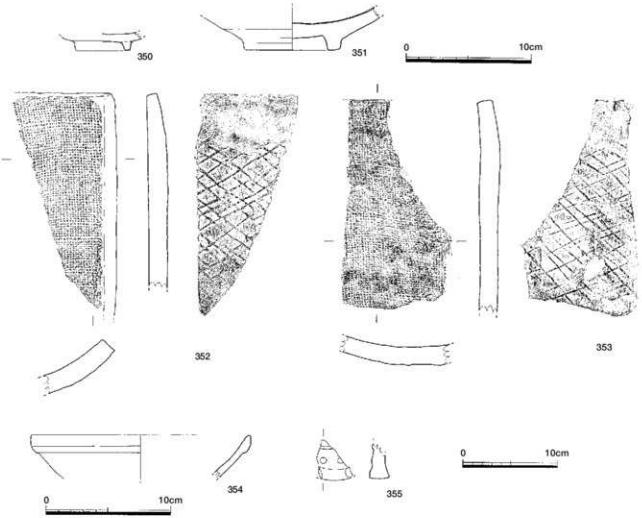
SK510（第 73 図）

調査区東に位置し、SK501 に切られる。平面形は楕円形を呈し、長さ 115cm、幅 98cm、深さ 30cm を測る。

出土遺物（第 74 図）352・353 は平瓦。352 の凸面は斜格子叩きで、端部はナデを施す。凹面は布



第 73 図　SK493・501・510・570・571・574 実測図（1/40）



第 74 図　SK501・510・570 出土遺物実測図（1/3・1/4）

目痕が残る。353 の凸面は一部、二重斜格子状の叩きで、端部はナデを施す。凹面は布目痕が残る。他にヘラ切り及び糸切りの土師器が少量出土している。中世であるが遺物が少なく、時期は確定できない。

SK570（第 73 図）

調査区東に位置し、SK485 に切られる。平面形は楕円形を呈し、長さ 192cm、幅 143cm、深さ 94cm を測る。

出土遺物(第 74 図)354 は白磁碗Ⅳ類。口径 17.2cm を測る。355 は軒丸瓦。巴文で灰白色を呈する。他に底部糸切りの土師器、瓦器、青磁、滑石、鉄滓が出土している。

SK571（第 73 図）

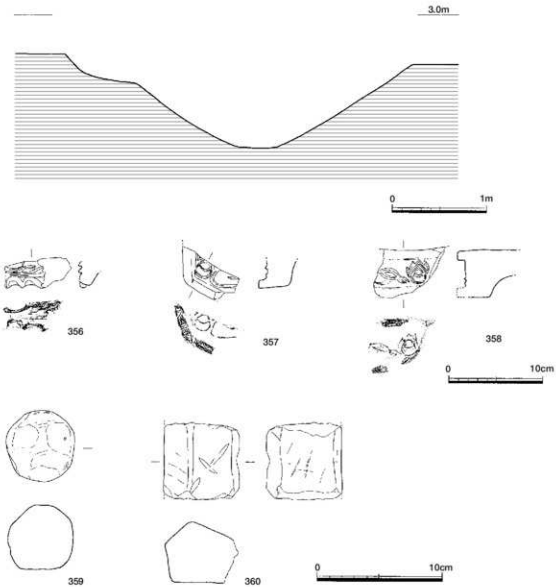
調査区東に位置する。別の番号を付したが SK485 下段の下層の可能性がある。

遺物は底部糸切りの土師器片が出土している。

SK574（第 73 図）

調査区東に位置する。別の番号を付したが SK485 下段の下層の可能性がある。

遺物は二重斜格子の瓦片が出土している。



第 75 図　SD401 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

（3）溝状遺構

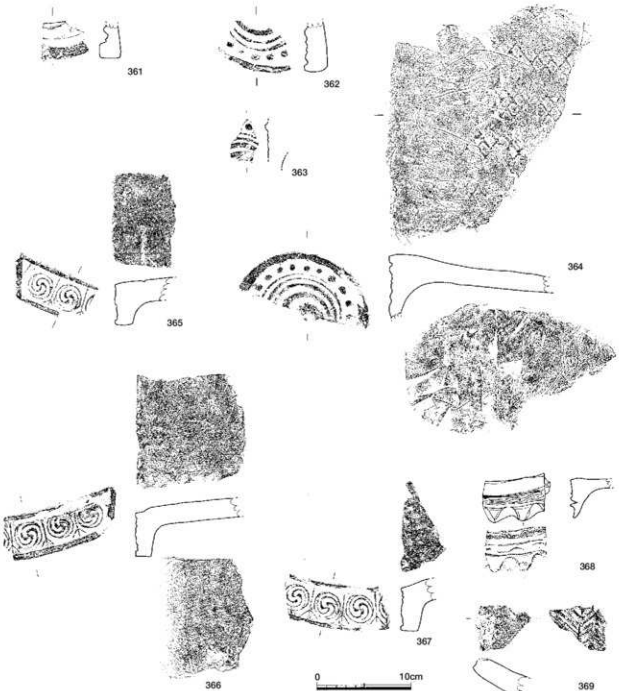
SD401（第 75 図）

調査区西側に位置し、南北方向に延びる。幅 370cm、深さ 100cm 前後を測る。攪乱に切られ遺存状況は悪い。

出土遺物（第 75 図）356 ～ 358 は軒平瓦。359 は石球。ノミ状工具で整形している。360 は砂岩製の砥石。被熱している。

（4）C 区出土遺物（第 76 図）

攪乱除去中に多量の瓦が出土した。攪乱と同時に SK408 のような廃棄土坑を掘削した可能性も考えられる。なお出土した瓦の大半は SK408 同様の橙色の斜格子叩きの丸瓦・平瓦である。ほとんど



第 76 図　C 区出土遺物実測図（1/4）

が細片での出土で完形になるものはなかった。これらのうち軒瓦を中心に掲載した。361 ～ 364 は巴文の軒丸瓦。全て橙色を呈する。364 は凸面は SK408 出土丸瓦と同様の斜格子叩き、凹面はナデを施すが、一部布目痕が残る。365 ～ 367 は巴文の軒平瓦。顎部から凸面にかけてはナデ、凹面は布目痕が残る。368 は押圧波状文軒平瓦。灰色を呈し、焼成は非常に堅緻。369 は平瓦。

箱崎遺跡第 47 次調査出土の碧玉剥片類について

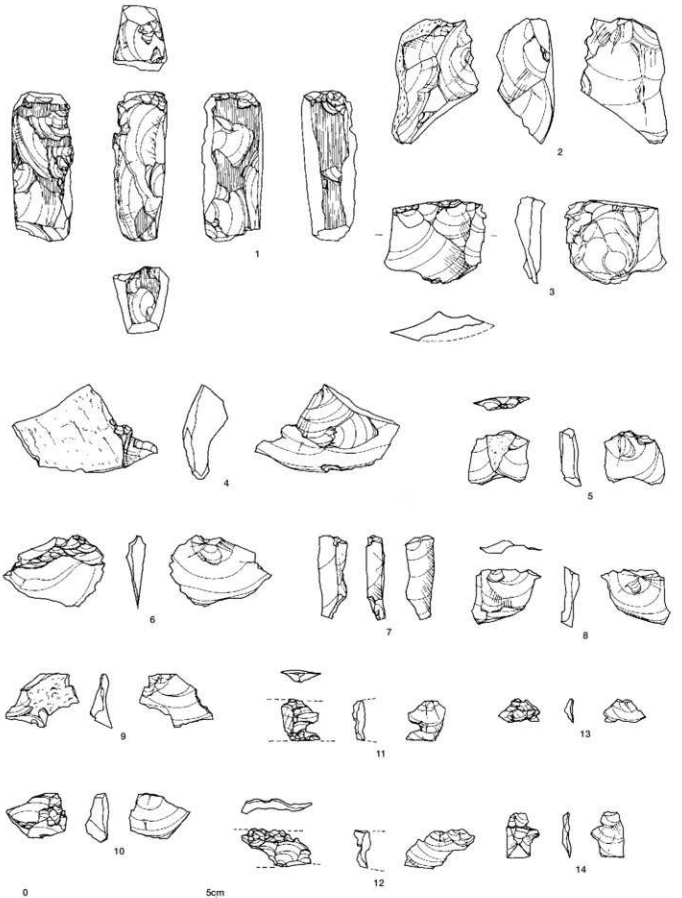
1．47 次調査出土の碧玉製玉未製品、剥片類（第 1 図）

本遺跡では緑色の玉髄（以下では慣例により「碧玉」と称する）製の管玉未製品、剥片、砕片が 14 点ほど出土した。本資料の石材原産地等については今後の科学的分析を待ちたいが、肉眼的には島根県玉湯町花仙山産出の石材に類似する。全て B 区の遺構 366(3 点)、241(8 点)、287(2 点)、611(2 点) からの出土である。剥離や二次調整手法、さらに風化度合いや石材の特徴が共通しており、同じ製作技術に関わる資料と判断した。なお、これらの遺物の出土遺構は 366 を除き中世以降に所属するが、遺物の所属時期は本地域の様相から弥生時代後期から古墳時代前期の範疇と予測され、土器類と共に中世期以降の掘削、攪乱で混入したものと想定される。これらの遺物は本調査区出土の推定される関連土器類からみて古墳時代前期に所属すると推定できる。以下ではまとめて報告する。なお本調査区の北側に隣接する 52 次調査区でも同様の碧玉剥片が出土している。報告書に記載がないので、関連遺物としてここに合わせて紹介したい。

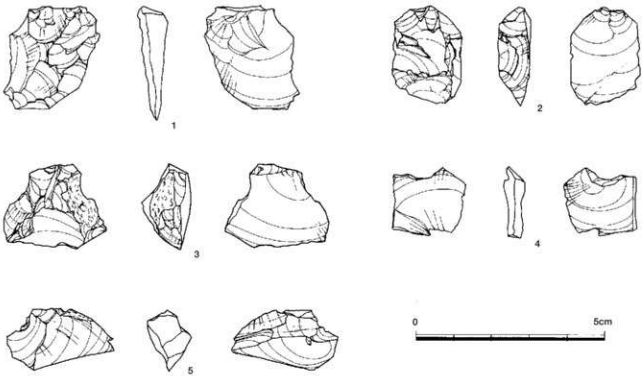
1 は管玉未製品である。長軸の 4 面と両端の 2 面は二次的な剥離調整が行われ、素材剥離面は認められない。上部端面を除く 5 面には研磨痕がある。研磨は初期段階であり、調整剥離面を除去するまでに至らず、角柱状を呈している。現状で長さ 3.9cm、幅 1.6cm、厚さ 1.4cm である。長軸の一面には大きな熱剥離があり、調整面を失うが、これが製作途中に発生したものか、あるいは後世の生成かは不明である。なお穿孔の痕跡はない。最終的な仕上げまで進めば、長さ 3cm 強、直径 1cm 程度の大型の管玉が製作できたはずである。2 は厚手縦長の不整形剥片であり、打面～左側縁に自然面を残す。右側縁には、主剥離面からの二次剥離があり、調整剥離と推定される。現存長 3.3cm、幅 2.2cm、厚さ 1.5cm である。3 は幅広の剥片である。背面に先行剥離があり、全て同一の自然面打面単設による。主剥離面は熱破砕とみられる不整剥離で大きく失われている。現存長 2.2cm、幅 2.7cm、厚さ 0.8cm である。4 は背面に自然面を残す幅広の不整形剥片であり、石核調整時の砕片と見られる。主剥離面は剥離時に砕けている。長さ 2.3cm、幅 3.8cm、厚さ 1.1cm である。5 は石核調整もしくは二次調整時の砕片とみられる。背面に自然面が残る。長さ 1.4cm、幅 1.6cm、厚さ 0.5cm である。6 は二次調整初期の砕片である。背面はポジ面であり、素材剥片のバルブ付近にあたる。長さ 1.9cm、幅 2.7cm、厚さ 0.5cm である。7 は縦長の小砕片である。単設平坦剥離で、背面の先行剥離は同一方向である。長さ 2.2cm、幅 0.8cm、厚さ 0.5cm である。8 は打角がやや急であり、長さ 1.5cm、幅 1.8cm、厚さ 0.4cm である。9 は背面に自然面を残す横広の不整形剥片であり、石核調整時の砕片と見られる。長さ 1.4cm、幅 1.9cm、厚さ 0.4cm である。10 は二次調整時の砕片と見られる。背面の稜は小剥離や潰れが認められる。現存長 1.2cm、幅 1.6cm、厚さ 0.6cm である。11 ～ 14 は二次調整時の砕片である。いずれも主剥離の打面は稜状をなし、バルブが形成されない。このうち 11、12 の背面には先行する調整剥離が上下両方から施されている。最終の仕上げ段階が推定できる資料である。11 は長さ 1.1cm、幅 1.0cm、厚さ 0.3cm である。12 は長さ 1.0cm、幅 1.7cm、厚さ 0.4cm である。13 は長さ 0.6cm、幅 1.1cm、厚さ 0.2cm である。14 は長さ 1.2cm、幅 0.9cm、厚さ 0.2cm である。

2．52 次調査出土の碧玉製剥片（第 2 図）

52 次は 47 次の北側約 70m に位置する。この調査区でも碧玉製剥片類が出土している。出土位置は調査区の東側に偏っている。やはり中世遺構からの混入出土である。剥片は 5 点ある。1 はやや厚手の縦長剥片である。現状で長さ 2.5cm、幅 1.8cm、厚さ 0.9cm である。2 は不整縦長剥片である。



第１図　箱崎遺跡第 47 次出土碧玉・製品等（1/1）



第２図　箱崎遺跡第 52 次出土碧玉剥片（1/1）

現状で長さ 2.7cm、幅 2.4cm、厚さ 0.8cm である。3 は背面に表皮を残す剥片である。現状で長さ 2.2cm、幅 2.8cm、厚さ 1.3cm である。4 は薄い不整形剥片である。現状で長さ 1.8cm、幅 1.9cm、厚さ 0.6cm である。5 は厚手の横長不整形剥片である。現状で長さ 1.6cm、幅 3.1cm、厚さ 1.1cm である。

3．剥離技術と製作工程の復元

ここでは箱崎遺跡 47 次から出土した資料を中心に、その観察から判断される碧玉製玉作りに係る剥離技術について概観したい。今回の調査では完成品や原石、石核などはない。未製品としては第 1 図があり、研磨初期の資料である。原石から素材剥片剥出までを一次工程とすると、玉素材となりうる剥片は 1 のみである。これは厚手の不定型な縦長剥片であり、主剥離面からの二次調整が僅かに認められる。その他の一次工程関連資料の剥片を見ると、石核調整に関わる 4、9 を除く 3、5 ～ 7 などは、単設打面を有する縦長系統の剥片である。明瞭なバルブの形成などから見て、寸詰まりな厚手の縦長剥片を目的としたハンマーによる剥離作業が予測できよう。次に二次工程は素材剥片から玉の形態に近づける調整作業であり、さらに二段階に区分される。まず、8 や 10 に見られる主剥離面側からの角錐状形態への荒い成形段階である。この段階には小さいながらもバルブの形成があり、一次工程と同様にハンマーの使用か、パンチの利用が予測される。次の段階として 11 ～ 14 の砕片から復元される、一辺 1cm 前後となった角柱状未製品の仕上げ段階である。表面の調整には階段状剥離が多いが、何れの砕片も稜状打面でバルブの形成がないことから、押圧剥離が用いられたと考えられる。三次工程は研磨、穿孔段階であり、唯一の資料として 1 の未製品がある。これは研磨初期のものであり、仕上げ剥離の最終段階が角柱状のままであることが分かる。

なお、52 次出土の剥片類もこうした剥離工程に矛盾することはない。ただしやや厚手の剥片が多く、第 2 図 1、2、3、5 は厚さが 1.0cm 前後である。剥片形態や厚みが均等であれば十分も管玉の素材剥片に成り得たものと考えられる。47 次の調整剥片と合わせてみるとこうした目的剥片の剥離工程（一次工程）が本遺跡内に存在した可能性は高いと考えられる。

Ⅲ．おわりに

今回の調査は箱崎遺跡の南部に位置する３地点の調査である。砂丘の鞍部に立地するがそれぞれ様相を異にする。以下、若干の整理を行い終わりとしたい。

Ａ区は土坑、溝、柱穴を検出した。調査面積の半分近くを溝が占める。井戸は確認されておらず、時期は概ね 12 世紀代から確認できるが、遺構の密度は高くない。西に隣接する第 27 次調査Ｂ区も遺構密度は低く、その大半は近世以降のものであり、本地点とあわせ、中世においてはやや空閑地的な地点であったと思われる。

Ｂ区は井戸、土坑、溝、柱穴を検出した。Ａ区に比べ、遺構密度は高く、井戸が集中する等、様相が大きく異なる。時期については大きく古墳時代前期と古代後半～中世の２時期に分けられる。古墳時代については SK366 のみが該当する。この時期の遺構は砂丘の東斜面に立地するが本地点も例外ではない。中世以降の遺構密度を考えるとこの時期の遺構はほとんどが消滅したと思われ、本地点の様相を明らかにすることはできないが、この遺構を含め、Ｂ区からは当該期と考えられる碧玉の剥片類が出土した。これらは吉留氏の分析により玉製作に伴うものであることが判明した。海浜部に立地する集落の様相の一側面が明らかになったといえよう。

次に古代後半～中世については 10 世紀の筥崎宮の創建を契機に、以降発展していくことが知られているが、この創建期前後の遺構については明確なものは確認できないものの、遺物としては SE241 出土の瓦があげられる。鬼瓦、軒瓦、平瓦、**塼**等が出土しているが特筆すべきものとして叩打痕文字瓦があげられる。「平井」・「佐」・「賀茂」・「大」等が確認された。多くは大宰府で確認されているものである。建物に葺かれていた状況を反映したものか、井戸の構築時に選別されたためかはわからないが、叩打痕文字瓦、記号を有する瓦が出土量に占める比率は高いようである。また軒瓦も大宰府出土の瓦と同笵のものが見られ、大宰府との密接な関係を示すものであろう。その一方で、４点中３点が鴻臚館のみで出土する 666A 形式の軒平瓦であることや、大宰府、鴻臚館ともに確認されていない「㊇」の叩打痕文字瓦の出土は注目される。また本市で３例目となる青銅製権が出土している。これら瓦類、金属製権に加え、本調査区から約 60 m 東に位置する第 26 次調査７区では石帯巡方が出土しており、この周囲に公的施設の存在が考えられる。11 世紀後半から 12 世紀前半にかけて遺構が見られるようになり、12 世紀中頃～後半代に井戸が集中して構築され、最盛期を迎える。井戸は 13 世紀後半から 14 世紀前半と考えられる SE244・257 まで続き、その廃絶後、SD611 が開削される。SD611 は第 54 次調査の SD07 に続くもので、下限が 15 世紀後半～ 16 世紀前半頃までと想定されており、Ｂ区もこの時期までは継続する。

Ｃ区は井戸、土坑、溝、柱穴を検出した。瓦以外の出土遺物は多くなく、遺構の時期については決め難いものが多いが、12 世紀代には遺構が確認され、13 ～ 14 世紀はあまり明確ではない。Ｃ区で特徴的な遺構として瓦の廃棄土坑である SK408 があげられる。この土坑より橙色の斜格子叩きを有する丸・平瓦が多量に出土した。一括廃棄の様相を呈し、瓦も大きな時期幅はないものと考えられる。また、攪乱除去中に出土した瓦も一括廃棄で同時期の可能性が高い。周囲に橙色の屋根の建物が存在し、その廃絶が想定できる。次に遺物では板碑があげられる。SE419 から３基、SK410 から１基出土している。いずれも砂岩製で、被熱した頭部のみが廃棄あるいは配置された状況であった。いずれの遺構も共伴する遺物が少ないため廃棄時期を明確にできないが、砂岩製板碑の年代については 15 世紀中頃以降が想定されており、この時期以降に被災による廃棄が考えられる。

図　　版

図版 1

(1) A区東半区全景（東から）

(2) A区西半区全景（西から）

(1) SK1（北から）

(2) SK4（東から）

(3) SK5（北から）

(4) SK5 完掘状況（北から）

(5) SK80（西から）

(6) SD25 土層（南から）

(7) SD73 土層（南から）

(8) SD73（西から）

図版 3

(1) SD73（北から）

(2) B区全景（西から）

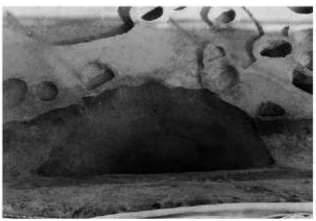
(1) B区東側全景（西から）

(2) B区西側全景（西から）

図版 5

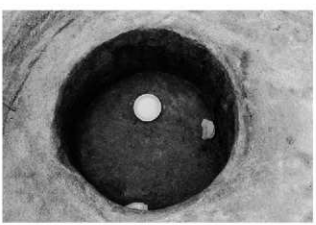
(1) SE130（北から）

(2) SE131（東から）

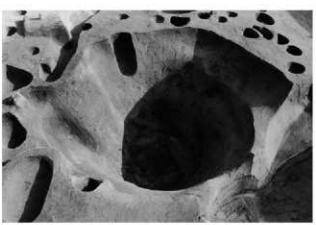


(3) SE136（南から）

(4) SE148・149（北から）



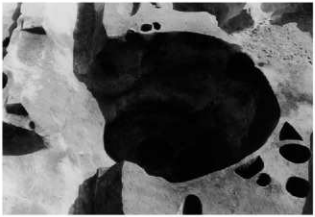
(5) SE148 井筒（東から）



(6) SE241（西から）

(7) SE241 井筒（西から）

(8) SE244（西から）



(1) SE257（西から）

(2) SE361（南から）

(3) SE367（西から）

(4) SE367 井筒（東から）

(5) SE382（西から）

(6) SE612（南から）

(7) SE613（西から）

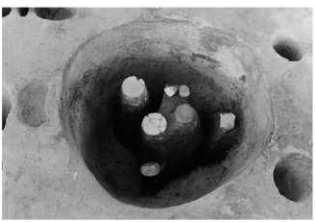
(8) SE613 井筒（西から）

図版 7

(1) SE614（東から）

(2) SE620（南から）

(3) SE621（東から）



(4) SK134（南から）

(5) SK135（南から）

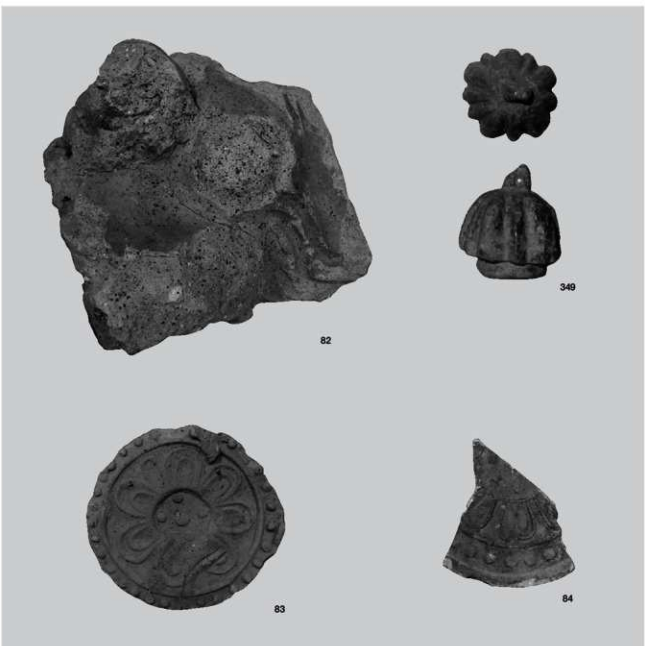
(6) SK210（北から）

(7) SK213（南から）

(8) SK366（南から）

(1) SK615（北から）

(2) SD611 配石（SX147）（西から）



(3) B 区出土遺物

図版 9

(1) C区西半区全景（東から）

(2) C区東半区全景（東から）

(1) SE407（北から）

(2) SE419 遺物出土状況①（西から）

(3) SE419 遺物出土状況②（西から）

(4) SE419（北東から）

(5) SE460（東から）

(6) SK408（北から）

(7) SK408（東から）

(8) SK408 断面（北から）

図版 11

(1) SK409（東から）

(2) SK410（西から）

(3) SK479（西から）

(4) SK480（西から）

(5) SK485（東から）

(6) SK510（北東から）

箱崎遺跡第 55 次調査の記録

例　言

・本書は福岡市教育委員会が2007年２月１日から５月２８日にかけて行なった箱崎遺跡第55次調査（東区馬出５丁目地内）の報告である。調査は１区を蔵冨士寛、２区を濱石哲也が担当した。
・本書の編集、執筆は各区担当者が行ない、１区の遺物実測、挿図のトレースについては米倉法子の手を煩わせた。
・本書における方位は座標北であり、遺構についてはＳＤ（溝）、ＳＫ（土坑）、ＳＰ（柱穴）等の略号を使用している。
・本書に関わる資料はこの後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

1区の調査

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

平成１０年６月２４日、土木局道路建設部道路建設課（現　道路下水道局道路建設部東部道路整備課）より、福岡市東区馬出・箱崎地内における都市計画道路馬出東浜線拡幅工事に関して、埋蔵文化財課（現　埋蔵文化財第１課）に対し埋蔵文化財の有無に関する照会がなされた。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地（箱崎遺跡）内であることから、埋蔵文化財第１課では平成１８年９月５日に確認調査を行ない、現地表下７０cmで遺構の存在を確認した。

この結果を受けて、両者協議の結果、発掘調査による記録保存という、対応が採られることとなった。調査の開始は平成19年２月１日。５月28日にすべての作業を終了した。

2．調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査委託　福岡市土木局道路建設部道路建設課（現　道路下水道局道路建設部東部道路整備課）
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　平成１８年度　　埋蔵文化財第１課　課長 山口譲治
　　調査係長 山崎龍雄
　　平成１９・２０年度　埋蔵文化財第１課　課長 山口譲治
　　調査係長 米倉秀紀
調査庶務　平成１８年度　文化財整備課　鈴木由喜
　　平成１９年度　文化財管理課　鈴木由喜
　　平成２０年度　文化財管理課　古賀とも子
調査担当　蔵冨士寛（１区）、濱石哲也（２区）
調査作業　安東昌信　草場恵子　許斐拓生　酒井康恵　渋谷一明　芹沢淳子　為房紋子　徳山孝恵
　　中村恵子　西村寿美枝　福島　大　増田ゆかり

Ⅱ．調査の記録

1．調査の概要

第５５次調査地点は箱崎遺跡の西端部にあたる。周囲で行なわれた発掘調査はすべて、道路建設に伴うものであり、調査区東側に接する道路建設の際、行なわれた第１次調査では、井戸、溝、土坑、墓などの遺構が確認されている（池崎編 1988）。

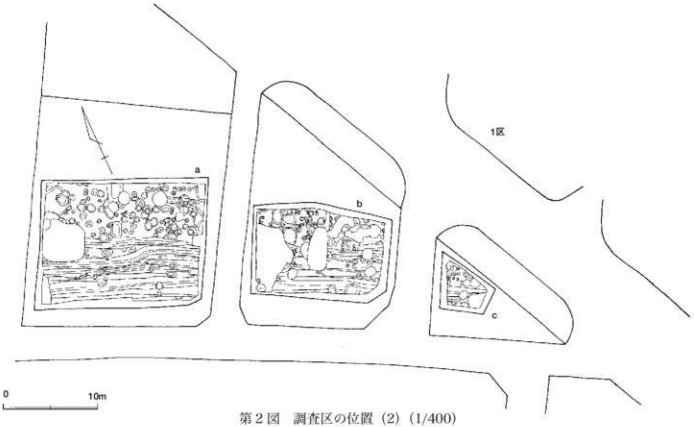
55 次調査は現況道路等の関係で、各所で部分的な調査を行なっている。異動により調査担当者の変更もあったため、55 次調査では東より大きく１区、２区とし、その区内で便宜的にアルファベットによる記号を付して、小調査区を表現している。

55 次１区は東寄りの３小区が該当する。小区は西側より a、b、c 区と表現する。１区全体の調査面積は 405 ㎡。調査はまず a 区の表土剥ぎより行なった。A 区では、60 ～ 70cm 程の厚さの表土（攪乱土）などを除去した後の、暗褐色砂質土（遺物包含層）上（標高２m前後）で、遺構検出を行った。しかし、調査区南西側の溝群およびいくつかの土坑、そしてピットしか確認できなかったため、さらに掘り下げを行ない、20 ～ 30cm 下の黄褐色砂上で再び遺構の確認を行なった。a 区では２面の調査を行なっているが、第１面では溝群の確認以外、大きな成果は挙がっていない。結果を踏まえ、b、c 区では、調査面積が狭いこともあって、黄褐色砂上での１面のみの調査を行っている。ただ、暗褐色砂質土中に含まれる遺物や、a 区における１面、２面検出中に確認した遺物の状況をみると、この遺跡で少なくとも時期の異なる遺跡が面を違えて存在したこと（遺構が少なくとも２面あること）は確実なようだ。

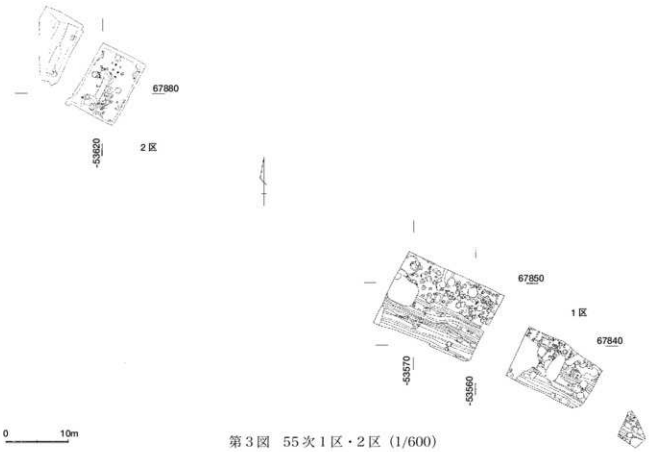
１区の遺構としては溝、土坑、墓、ピット群などがある。遺物は輸入・国産陶磁器や土師器を中心として、コンテナ 55 箱ほど出土している。以下にその概要について述べる。

文献
池崎譲二編 1988『博多　―高速道路関係調査（４）―』高速道路関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 193 集

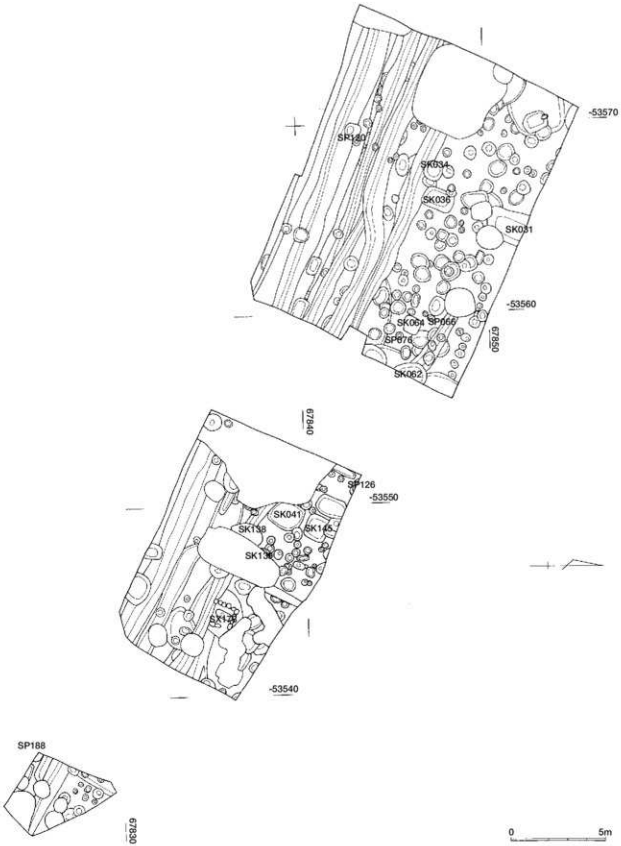
第１図　調査区の位置（1）（1/3,000）



第2図　調査区の位置（2）（1/400）



第3図　55次1区・2区（1/600）



第４図　遺構配置（1/200）

２．遺構と遺物

先にも述べたように、遺構の種類としては土坑、墓、ピット群などがある。特に調査区の南西側半分は複雑に切り合った溝群によって、占められている。調査区の北東側はピットが主体を占める。遺構の時期は中世末以降のものが多く、遺物もその段階のものが大半を占める。しかし、遺跡の形成は確実に中世段階には行なわれており、以下の記述はその時期における遺構、遺物の報告を中心に行なうことにする。

（１）SD（第５図）

各溝は切り合いも激しく、遺構検出も容易でなかったことから、各溝の出土遺物において中世末～近世段階のものが多く含まれている。２区の調査において検出された溝は１６世紀後半の所産と考えられており、これら溝も同時期に営まれたものである可能性も高い。しかし、層位的な遺物の取り上げはできなかったが、底面近くでは中世段階の遺物が多く出土していること、いくつかの溝では掘り返しの痕跡が認められることを考え合わせて、これら溝のいくつかが中世前半の段階にまでさかのぼる可能性も考えておきたい。なお、このたびの報告では下層出土の遺物で、比較的古手の遺物を中心に報告を行なう。

SD001（・130・186）

SD001 は a 区南西側に存在する。２面検出時の幅は 50cm ほどだが、土層を観察する限り、実際は２m近い幅を有していたようだ。深さ８０cm を測る。北西－南東方向に直線的に走っており、b、c 区の SD130、186 に相当するのだろう。土層を観察する限り、数度の掘り返しが行なわれたようだ。

出土遺物（第７図・第 10 図）

第７図１は白磁椀口縁部片である。口径（復元）17.1cm を測る。口縁部は玉縁。第７図２は龍泉窯系青磁椀底部片である。高台は低く、内面の削りは浅い。第７図３は白磁椀底部片。第７図４は龍泉窯系青磁椀底部片である。第７図５～７は同安窯系青磁皿。内面見込み部分に篦描文とジグザグ状の点描文を施している。第７図８は土師器杯である。口径（復元）14.0cm、底径（復元）9.7cm、器高 2.6cm を測る。底面は回転糸切りによる。第７図９は土師器皿である。底面は回転糸切りによる。第７図 10 は丸瓦。凸面には縄目が残る。

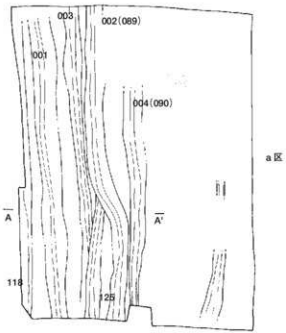
第 10 図１・２は土師器杯。１は口径（復元）16.0cm、底径（復元）8.8cm、器高 3.0cm を測る。底面は回転糸切りによる。２は口径（復元）14.4cm、底径 8.8cm、器高 3.0cm を測る。底面は回転糸切りによる。板目の圧痕が残る。４・５は越州窯系青磁壺である。６は磁州窯系緑釉陶器の胴部片。７は砥石。８は土師器杯。底面は糸切りによる。板目の圧痕が残る。

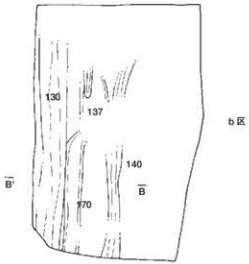
SD002（・089・137・170）

SD002 は a 区の中央、やや南寄りを流れるもので、a 区半ばにて鍵状に屈曲する。SD125 を切り込んでおり、a 区の半ば、つまり a 区西側から鍵状の屈曲部分まで、SD125 と流路を同じくしていたのかもしれない。土層をみれば、幅 1.7 m、深さ 80cm を測る。b 区では SD137・170 に繋がるものであろう。c 区では確認できていない。

出土遺物（第８図１～４、８・９）

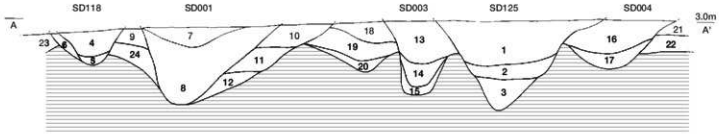
１は白磁椀口縁部片。口径（復元）16.2cm を測る。２は龍泉窯系青磁椀口縁部片。口径（復元）15.8cm を測る。外面には鎬蓮弁文を施す。３・４・８は土師器杯。４は口径（復元）15.0cm、底径（復元）12.0cm、器高 2.7cm を測る。底面は回転糸切りによる。板目の圧痕が残る。９は滑石製石鍋。

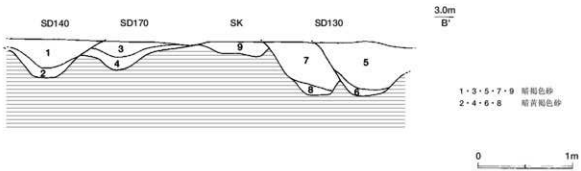

003
002(089)
001
004(090)
a区
A
A'
118
125


130
137
b区
140
B'
B
170

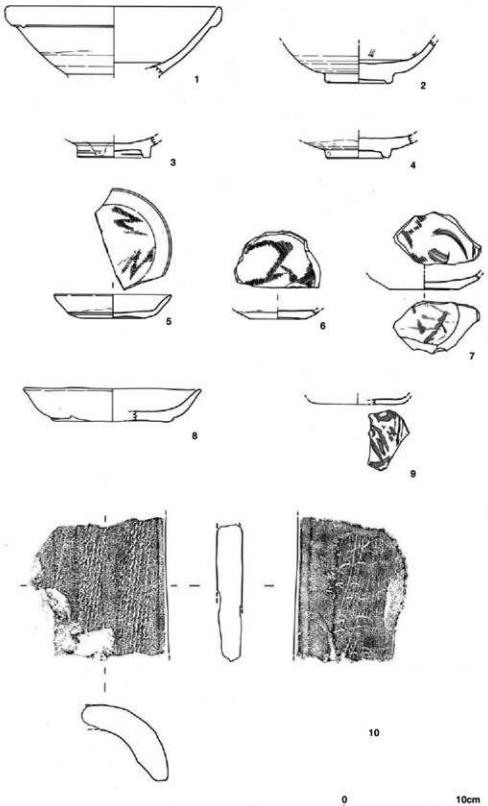
161
数字はSDの番号
188
c区
0
5m

第5図　SD（1/200）

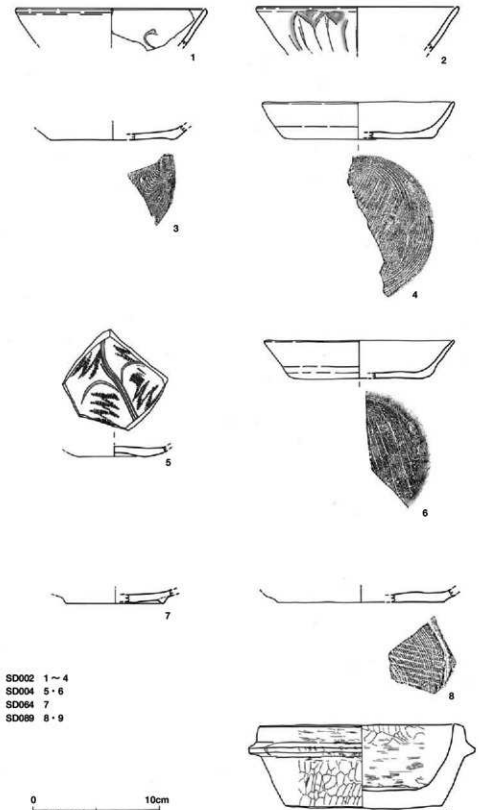

SD118
SD001
SD003
SD125
SD004
A
A'
3.0m
1 褐色砂質土
2 褐色土
3 淡褐色砂質土
4 暗褐色土（礫、土器含む）
5 褐色砂質土
6 褐色砂質土
7 暗褐色砂質土（礫含む）
8 暗褐色砂質土
9 暗褐色砂質土
10 暗褐色砂質土（7層と類似）
11 褐色砂質土（礫混じる）
12 褐色砂質土
13 暗褐色砂質土（礫、土器細片混じる）
14 暗褐色砂質土
15 褐色砂質土（地山の汚れである可能性あり）
16 暗褐色土（炭、土器混じる）
17 褐色砂質土
18 褐色砂質土（礫、炭、土器細片多く含む）
19 茶褐色土
20 褐色砂質土
21 暗褐色砂質土（遺物包含層）
22 褐色砂質土（遺物包含層）
23 暗黄褐色砂質土（地山か）
24 暗黄褐色砂質土（地山か


B
B'
3.0m
SD140
SD170
SK
SD130
1・3・5・7・9 暗褐色砂
2・4・6・8 暗黄褐色砂
0
1m

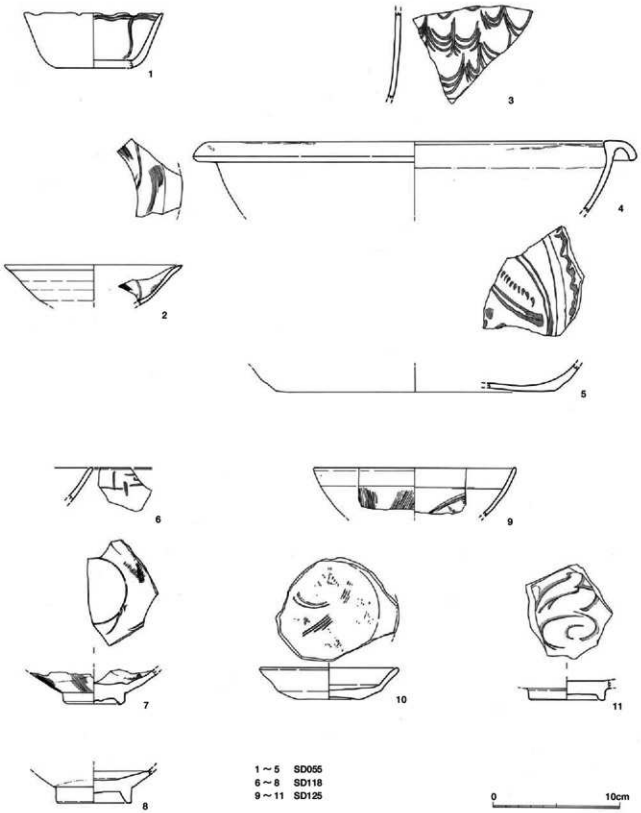
第6図　SD土層（1/40）



第7図　SD001 出土遺物（1/3）



第8図　SD002・004・064・089出土遺物（1/3）



第9図　SD055・118・125出土遺物（1/3）

SD003

SD001 と SD002 の間を流れるもので、SD125 に切り込まれ、途中で流れを同じくしている。土層断面によれば、SD001 にも切り込まれていたようだ。深さ 50cm ほど。b 区では存在を確認できていない。SD003 に確実に伴う遺物は細片が多く、図化を行なっていない。

SD004（・140・171）

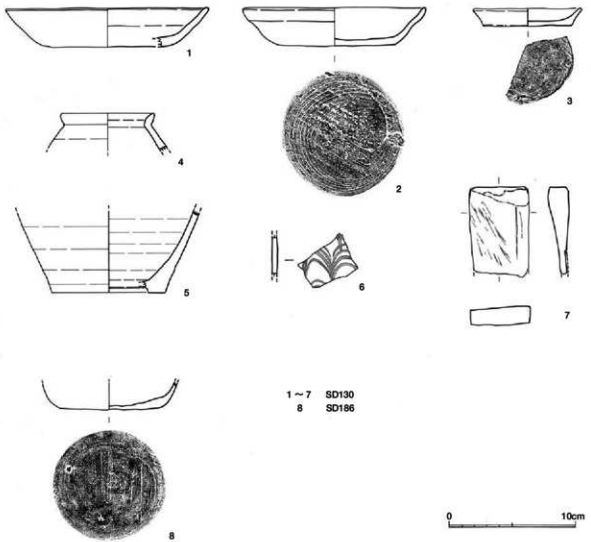
SD002 の北側を流れるものである。b 区の SD140・171 に続くものか。土層断面をみれば SD002 に切り込まれていたようだ。深さ 50cm ほどを測る。

出土遺物（第 8 図 5・6）

5 は同安窯系青磁皿底部片である。内面見込み部分に篦描文とジグザグ状の点描文を施している。6 は土師器杯。口径（復元）15.0cm、底径（復元）10.0cm、器高 3.0cm を測る。底面は回転糸切りによる。板目の圧痕が残る。

SD125

SD002 の南側に位置するもので、a 区の半ばまで SD002 と流路を同じくする。そして a 区の東側では SD003 を切り込む。b 区の途中で消えてしまっているようで、SD137 の一部にその痕跡が認め



第 10 図　SD130・180 出土遺物（1/3）

られる。土層断面をみれば、壁面の立ちあがりが急で、深さ 80cm と深いことが分かる。また、堆積状況をみれば、この溝では掘り返しが行なわれた可能性も考えられる。

出土遺物（第９図９～11）

９は同安窯系青磁椀口縁部片である。口径（復元）16.0cm を測る。外器面に櫛目文、内器面に篦描文と点描文をそれぞれ施している。被熱を受けている。10 は同安窯系青磁皿。体部は途中で屈曲し、底面は上底状を呈する。内面見込み部分には篦描文と点描文を施している。被熱を受けている。11 は龍泉窯系青磁椀底部片である。内面見込み部分に篦描文を施している。

SD118

SD001 の南側、a 区南端部にその一部が確認できる。土層断面をみれば幅 80cm、深さ 60cm ほどを測ることが分かる。b 区において、その存在は確認されていない。

出土遺物（第９図６～８）

６は青磁椀口縁部片である。口縁部外面には雷文を施す。２は同安窯系青磁椀底部片である。外器面に櫛目文、内器面に篦描文と点描文をそれぞれ施している。８は白磁椀底部片である。内面見込み部分に沈線を巡らしている。

SD055（・108）

a 区の北寄りに存在する。A 区の他の溝群とは離れた場所に存在する。第２面検出面より計測すれば、幅 80cm、深さ 40cm ほどを測る。西へ行くにつれて浅くなっており、a 区の西側では痕跡のみ残る（SD108）。b 区へのつながりは不明だが、SD055 はやや南へ向けてカーブしており、SD140・170 へと続く可能性もあるかもしれない。

出土遺物（第９図１～５）

１は青磁椀で、口縁部には輪花を有する。内器面には篦描文を施す。２は同安窯系青磁椀底部片である。内器面に篦描文と点描文を施している。３は磁州窯系緑釉陶器胴部片である。４・５は磁州窯系陶器盤であり、４は口縁部片、５は底部片。５は鉄彩による文様を施す。

SD180

SD171 の北側に存在する。SD171 の一部である可能性も高い。

SD181

c 区の西側に一部を検出する。SD186（SD001）に切られる。他の溝とは直交して走る。一部を検出したのみで、幅、深さは不明。

（２）SK

a、b 区において確認。方形を呈するもの（141・036・145）、円・楕円形を呈するもの（034・138）などがある。部分的にややまとまって存在する傾向がある。

SK141（第 11 図）

b 区の中央やや北寄りに存在する。1.8 × 1.3 m程の略方形プランを呈する。底面は平坦で、南側の壁面立ちあがりは緩やか。深さは 20cm ほど。埋土は暗褐色砂質土。完形に近い青磁皿３点がまとまって出土しており、墓である可能性が高い。なお、これら遺物は表土剥ぎ中に出土したもので、原位置の記録は残していない。出土遺物より、この遺構は 12 世紀後半に位置付けることができる。

出土遺物（第 11 図）

１は青磁皿。ほぼ完形。口径 9.6cm、器高 2.4cm を測る。体部は途中で屈曲し、内面見込み部分には劃花文を施す。底面は露胎。２は青磁皿。口縁部の一部を欠損する。口径 9.7cm、器高 2.4cm

を測る。体部は途中で屈曲し、内面見込み部分には劃花文を施す。底面はやや上底を呈し、露胎。3は青磁皿。口縁の一部が欠ける。口径 9.8cm、器高 2.3cm を測る。体部は途中で屈曲し、内面見込み部分には劃花文を施す。底面はやや上底で露胎。

SK034（第 12 図）

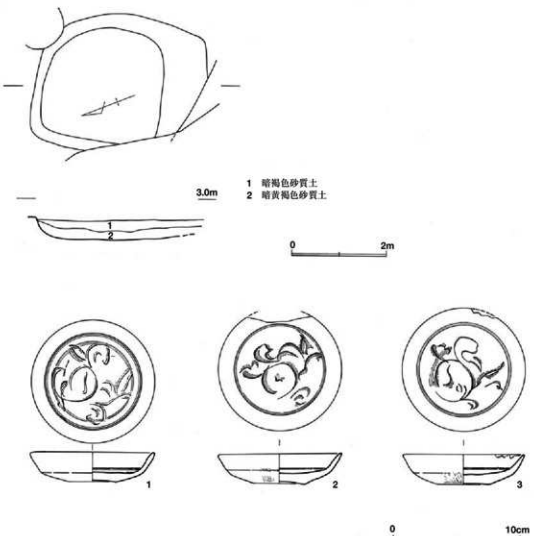
A 区中央部に位置する。径 1 m程の円形を呈する。深さは現況で 30cm ほど。埋土は暗褐色土。土層には柱状の痕跡も残る。上層部には礫が集中して出土する。SD004 を切り込んでおり、時期的には新しい可能性がある。

出土遺物（第 13 図－ 9）

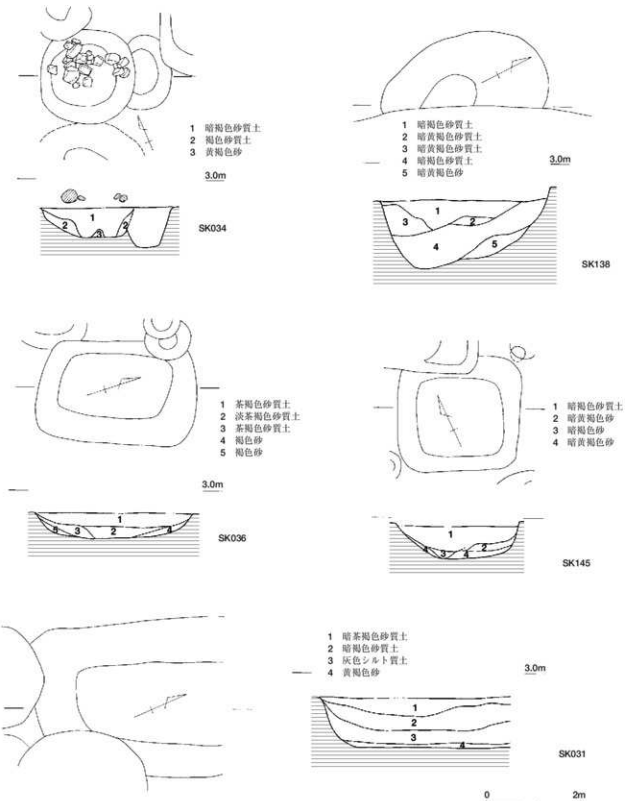
9 は越州窯系青磁の壺底部片。底径（復元）9.0cm を測る。被熱の跡がある。

SK138（図 12）

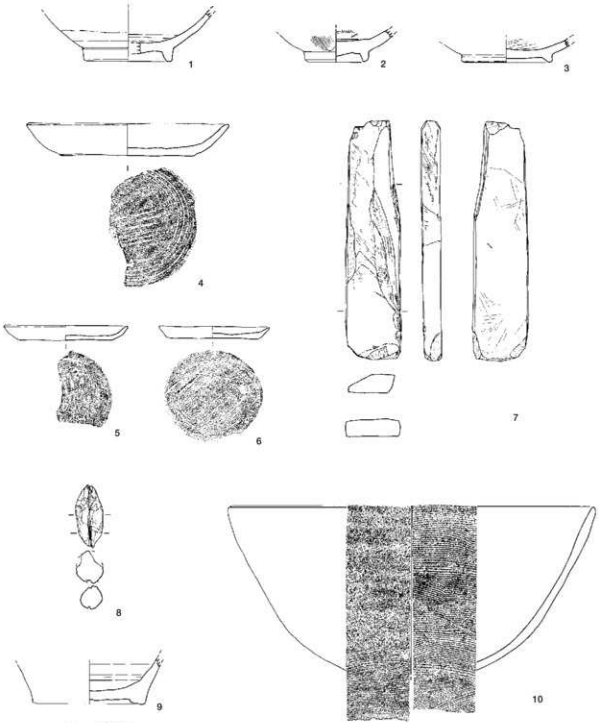
b 区の中央部に存在する。南西側は攪乱により失われている。長さ 1.8 m、幅 1.1 mほどの楕円形を呈するものか。底面は擂鉢状。遺物により時期を確定し得ないが、近世以降に位置付けられる可能性がある。



第 11 図　SK141（1/4・1/3）


1 暗褐色砂質土
2 褐色砂質土
3 黄褐色砂
3.0m
SK034
1 暗褐色砂質土
2 暗黄褐色砂質土
3 暗黄褐色砂質土
4 暗褐色砂質土
5 暗黄褐色砂
3.0m
SK138
1 茶褐色砂質土
2 淡茶褐色砂質土
3 茶褐色砂質土
4 褐色砂
5 褐色砂
3.0m
SK036
1 暗褐色砂質土
2 暗黄褐色砂
3 暗褐色砂
4 暗黄褐色砂
SK145
1 暗茶褐色砂質土
2 暗褐色砂質土
3 灰色シルト質土
4 黄褐色砂
3.0m
SK031
0
2m

第12図　SK（1/40）



1	SK062
2・3	SK064
4・7	SK081
5・6	SK080
8	SK145
9	SK034
10	SK075

第13図　ＳＫ出土遺物（1/3）

SK036（第 12 図）

a 区のほぼ中央、SK034 の東側に位置する。1.7 × 1.1 mの長方形プランを呈する。底面は平坦で、各壁の立ちあがりはやや緩やか。深さは 30cm ほどを測る。SK031 を SD（溝）と解釈するのであれば、その続きに相当するものか。

SK145（第 12 図）

b 区の中央やや北よりに位置する。SK141 に隣接。径 1.2 mの方形プランを呈する。底面は平坦で、各壁の立ち上がりも急である。遺物は少なく、時期そして遺構の性格に対する決め手に欠けるが、SK141 と同じく墓である可能性も考えておきたい。

出土遺物（図 13 － 8）

8 は石錘である。滑石製。混入品である可能性もある。

SK031（図 12）

a 区の北側、調査区の端に位置する。幅 1.7 m、長さ 2.0 ＋ α m を測る。底面は平坦。深さは 50cm。各壁の立ちあがりもしっかりとしており、土坑状を呈しているといえるが、SK036 の存在といい、担当者はこれが溝である可能性も考えている。溝であれば、調査区南西側に存在する溝群と直交、そして 2 区で検出されている溝と平行するものであるといえる。出土遺物は新しく、近世段階に位置付けられるのものが含まれる。

その他の SK 出土の遺物（図 13）

1 は白磁椀底部片である。底径(復元)7.0cm を測る。内面見込み部分の釉を輪状に掻き取っている。SK062 出土。2 は同安窯系青磁椀底部片である。底径 5.0cm を測る。外器面には櫛目文、内器面には点描文、櫛描文を施す。3 は瓦器椀底部片。内面にはヘラミガキの痕跡が残る。暗白色を呈し、底径 7.2cm を測る。2・3 は共に SK064 出土。4 は土師器杯、5・6 は土師器皿である。4 は口径（復元）15.9cm、底径（復元）10.6cm、器高 2.5cm を測る。底部は回転糸切り。板目の圧痕が残る。4 は SK081 出土。5 は口径 8.9cm、底径 7.2cm、器高 1.0cm を測る。底部は回転糸切り。板目の圧痕が残る。6 は口径（復元）9.8cm、底径（復元）7.3cm、器高 1.2cm を測る。底部は回転糸切り。板目の圧痕が残る。5・6 は共に SK080 出土。7 は砥石。長さ 19.9cm、幅 4.4cm、厚さ 1.5cm を測る。SK081 出土。10 は鍋。高径（復元）29cm、器高 13.0cm。外面全体に煤が付着している。外面底部及び内面にハケ目調整。

（2）SX（石組遺構）

SX173（第 14 図）

b 区中央やや東よりに位置する。「コ」の字形の石組みが 1 段分のみ残る。内法は幅 1.2 m、長さ 1.5 ＋ α m である。SD140 に切られている。なお、この遺構の中央には筋状の掘りこみがある。幅 40cm ほどで、真中部分のみが深い。SX173 に付帯する遺構かどうかは不明である。

出土遺物（第 15 図）

1 は軒平瓦である。瓦当には唐草文。遺構に伴うものではないだろう。

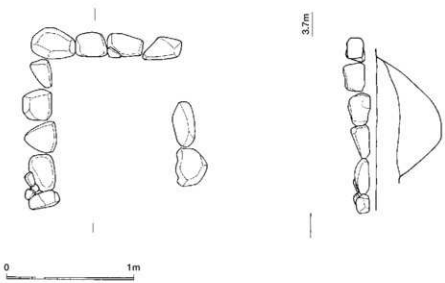
（3）SP

調査区の北西側にまとまって存在する。南東側に存在するピットは多くが S 溝群に切られており、SP の多くは溝群に先行する遺構であるといえるだろうが、いくつかは遺構の切り合いを見誤ってい

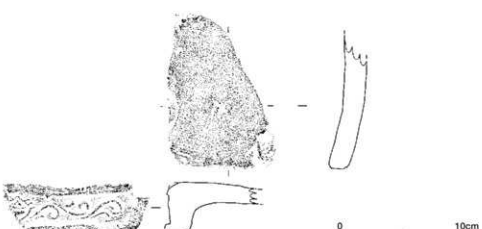
る可能性も否定できない。その多くには有意な配列を見ることはできないが、A区東側隅にあるピットは列状をなしており、これは柵列等の遺構に相当する可能性もある。しかし、ピットのいくつかには新しい遺物（近世以降）も含まれている。

SP出土の遺物（第16図）

1は土師器杯である。口径（復元）14.5cm、底径（復元）11.2cm、器高2.8cmを測る。底面は回転糸切りによる。板目の圧痕が残る。SP044出土。2は土師器杯である。口径（復元）16.0cm、底径(復元)11.5cm、器高3.0cmを測る。底面は回転糸切りによる。板目の圧痕が残る。SP066出土。3は白磁椀口縁部片である。口縁部は玉縁をなす。口径（復元）17.1cmを測る。SP126出土。4は土師器杯である。口径（復元）16.1cm、底径（復元）7.0cm、器高3.1cmを測る。底面はヘラ切りによる。板目の圧痕が残る。SP126出土。5は白磁椀。SP126出土。6は土師器器台である。口径(復

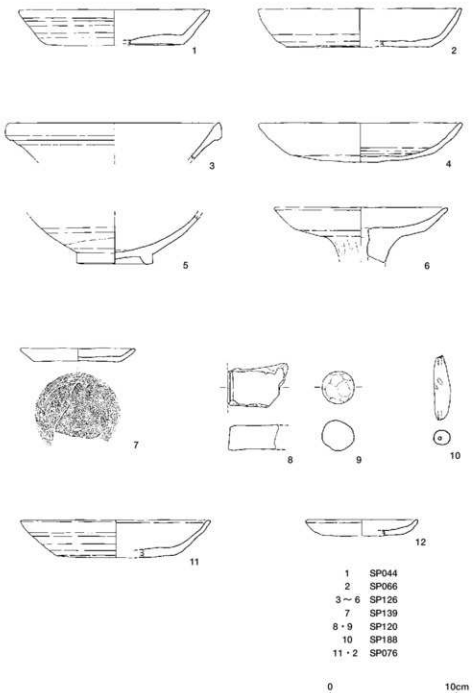


第14図　SX173（1/30）



第15図　SX173出土遺物（1/3）

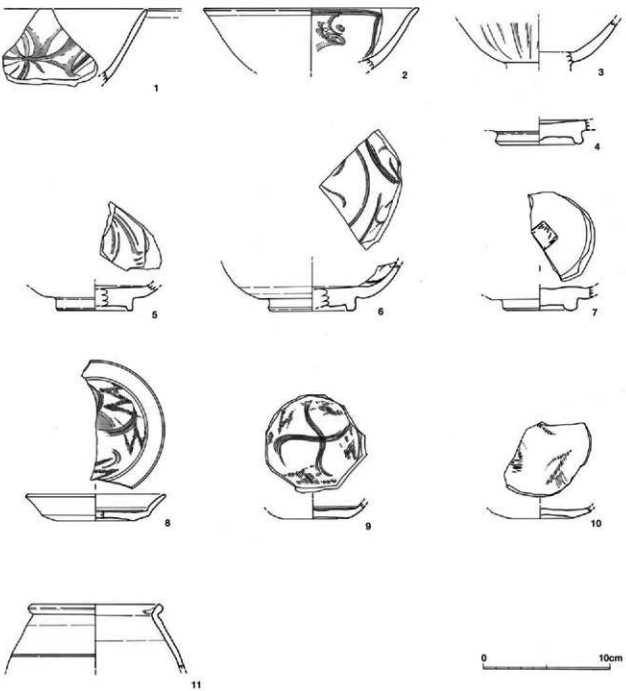
元）13.6cm、SP126 出土。7 は土師器皿である。口径 9.7cm、底径 6.7cm、器高 1.11cm を測る。底面は回転糸切りによる。SP139 出土。9 は土弾。8・9 は SP120 出土。10 は土錘。SP188 出土。11 は土師器杯である。口径（復元）15.0cm、底径 9.5cm、器高 3.0cm を測る。底面は回転糸切りによる。板目の圧痕が残る。SP076 出土。12 は土師器皿である。口径（復元）8.8cm、底径（復元）6.3cm、器高 1.3cm を測る。底面は回転糸切りによる。



第 16 図　SP 出土遺物（1/3）

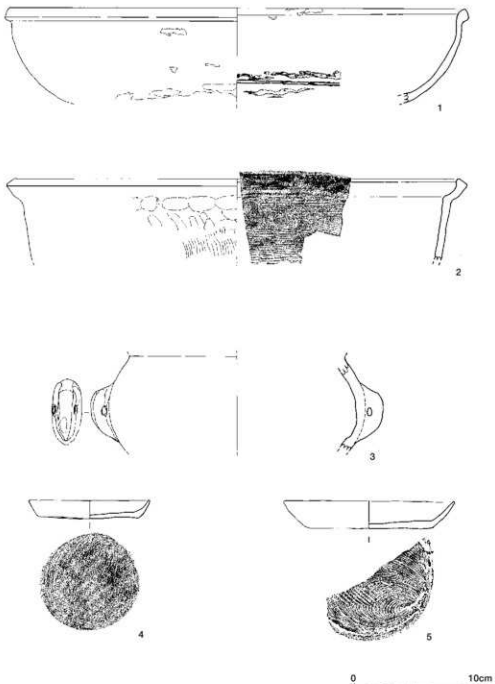
（4）包含層出土遺物（第 17・18 図）

第 17 図 1 は龍泉窯系青磁椀口縁部片である。内面には片彫による花文を施す。第 17 図 2 は龍泉窯系青磁椀口縁部片である。口径（復元）17.0cm を測る。内面には篦描文を施す。第 17 図 3 は龍泉窯系青磁椀。外面に蓮弁文を施す。第 17 図 4 は龍泉窯系青磁底部片。第 17 図 5 は龍泉窯系青磁底部片。高台は低く、底面は厚い。内面見込み部分に篦描文を施す。第 17 図 6 は龍泉窯系青磁底部片。高台は低く、底面は厚い。内面に篦描文を施す。第 17 図 7 は龍泉窯系青磁の底部片。内面見込み部

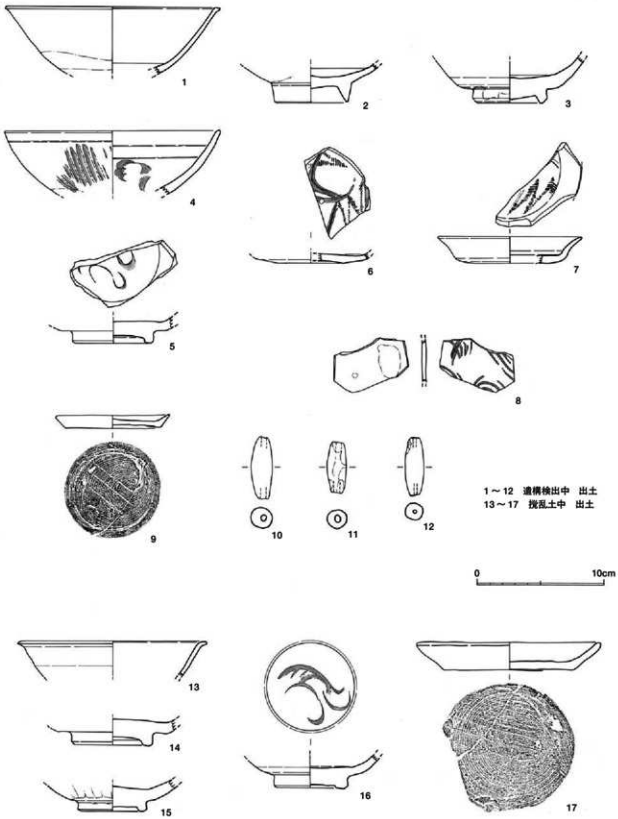


第 17 図　包含層出土遺物（1）（1/3）

分に印文を有する。第 17 図 8 は同安窯系青磁皿である。体部は屈曲し、底部は上底を呈する。内面見込み部分には篦描文とジグザグ状の点描文を描いている。第 17 図 9 は同安窯系青磁皿。底部はわずかに上底を呈する。内面見込み部分には篦描文とジグザグ状の点描文を描く。第 17 図 10 は同安窯系青磁皿。底部はわずかに上底を呈する。内面見込み部分にはジグザグ状の点描文が認められる。第 17 図 11 は越州窯系青磁壷口縁部片である。口径（復元）10.6cm。口縁部内面に目跡がある。



第 18 図　包含層出土遺物（2）（1/3）



第 19 図　その他の出土遺物（1/3）

第 18 図 1 は黄釉陶器盤口縁部片である。口縁端部は肥厚し、大きく外反する。第 18 図 2 は土師質鉢の口縁部片である。口縁部付近で屈曲し、端部は上方へとつまみあがる。内・外器面にハケ目調整を施す。3 は釜胴部片。瓦質。胴部には横方向に穿孔した耳部を有する。4 は土師器皿。口径 9.5cm、底径 7.5cm、器高 1.5cm を測る。底面は回転糸切りによる。板目の圧痕が残る。5 は土師器皿。口径(復元) 13.5cm、底径 (復元) 10.0cm、器高 2.1cm を測る。底面は回転糸切りによる。板目の圧痕が残る。

（5）その他の出土遺物

遺構検出中の出土遺物（第 19 図 1 ～ 12）

1 は白磁椀口縁部片である。口径（復元）17.0cm を測る。口縁端部は鋭く外方へ張り出している。2 は白磁底部片である。細く高い高台部を有する。3 は龍泉窯系青磁底部片である。高台は低く、底面は厚い。4 は同安窯系青磁椀である。口径 17.0cm を測る。内外面に篦描文を施す。5 は龍泉窯系青磁椀底部片である。内面見込み部分に篦描文を施す。6 は同安窯系青磁皿である。底面は若干の上底を呈する。内面見込み部分に篦描文とジグザグ状の点描文を施す。7 は同安窯系青磁皿。口径（復元）11.3cm を測る。内面見込み部分に篦描文とジグザグ状の点描文を施す。8 は磁州窯系緑釉陶器胴部片。9 は土師皿。口径（復元）9.0cm、底径（復元）7.6cm、器高 9.5cm を測る。底面は回転糸切りによる。板目の圧痕が残る。10 ～ 12 は土錘。

撹乱中の出土遺物（第 19 図 13 ～ 16）

13 は白磁椀口縁部片である。口径 (復元) 15.0cm を測る。口縁端部は鋭く外方へ張り出している。14･15 は龍泉窯系青磁椀底部片である。高台は低く、底面は厚い。16 は龍泉窯系青磁椀底部片である。内面見込み部分に篦描文を施す。17 は土師器杯である。口径(復元)14.5cm、底径 10.2cm、器高 2.2cm を測る。底面は回転糸切りによる。板目の圧痕が残る。

Ⅲ．1 区のまとめ

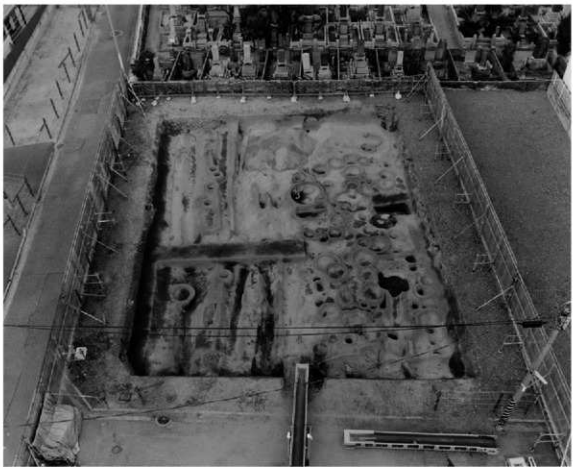
今回の調査では溝群と土坑、墓などの遺構を検出することができた。時期的には SK138 などにみる中世前半期のものと、中世末～近世期のものに大別できるだろう。溝群は中世末～近世期のものであるが、掘削の開始は中世前半に遡る可能性も考えておきたい。

図　　版

目　次

１区

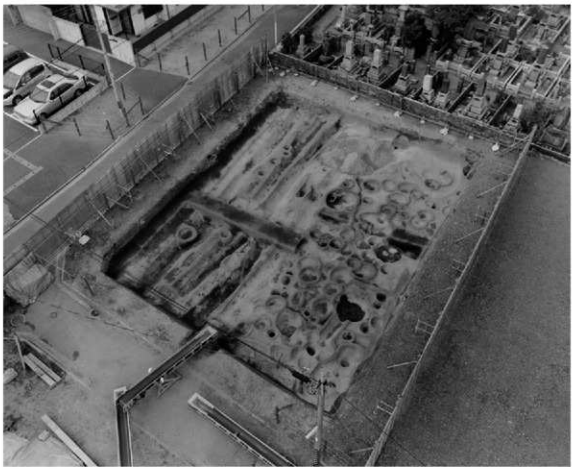
図版１	上	ａ区全景（南東から）	下	ｂ・ｃ区全景（北西から）
図版２	上	ａ区（東から）	下	ａ区（南東から）
図版３	上	ｂ区（北西から）	下	ｂ区（北西から）
図版４	上	ｃ区（北西から）	下	ｃ区（南西から）
図版５	上	ａ区ＳＤ（南東から）	下	ａ区ＳＤ（北西から）
図版６	上	ＳＤ土層（東から）	下	ａ区ＳＤ土層（北西から）
図版７	上	ＳＤ055（北から）	下	ｂ区ＳＤ（北西から）
図版８	上	ｂ区ＳＤ（南東から）	下	ＳＤ002遺物出土状況（南東から）
図版９	上	ＳＸ173（南西から）	下	ＳＸ173（南から）
図版10	上	ＳＫ034・036（東から）	下	ＳＫ036（北から）
図版11	上	ＳＫ141・145（北東から）	下	ＳＫ141（北西から）
図版12	上	ＳＫ034（南から）	下	ＳＫ031（北東から）
図版13	上	ＳＫ138（南東から）	下	ＳＸ173周辺（南から）
図版14	上	ＳＫ145・160（北西から）	下	ＳＫ145（北東から）



a 区全景（南東から）

b・c 区全景（北西から）

図版２



ａ区（東から）

ａ区（南東から）

b 区（北西から）

b 区（北西から）

図版４

ｃ区（北西から）

ｃ区（南西から）

a 区 S D（南東から）

a 区 S D（北西から）

図版６

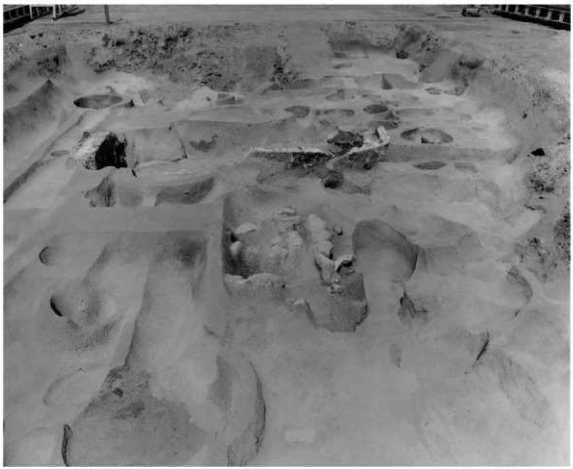
ＳＤ土層（東から）

ａ区ＳＤ土層（北西から）

ＳＤ 055（北から）

ｂ区ＳＤ（北西から）

図版 8



b区ＳＤ（南東から）

ＳＤ002 遺物出土状況（南東から）

S X 173（南西から）

S X 173（南から）

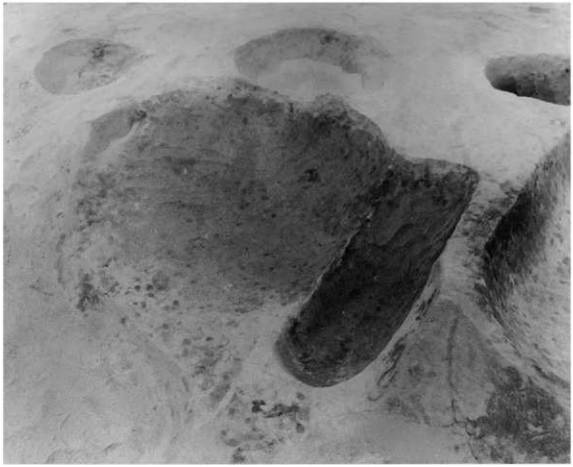
S K 034・036（東から）

S K 036（北から）

S K 141・145（北東から）

S K 141（北西から）

図版 12



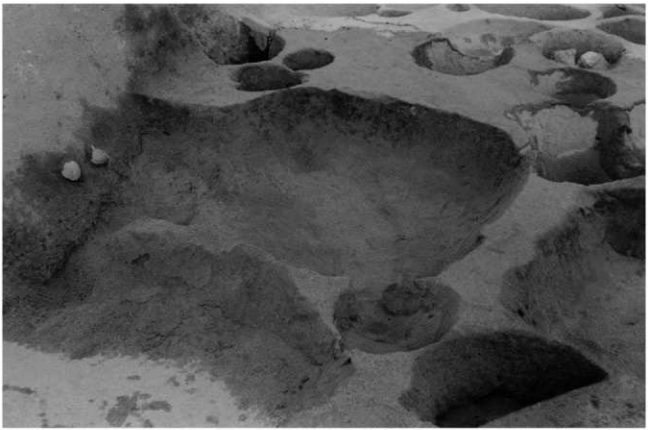
S K 034（南から）

S K 031（北東から）

ＳＫ 138（南東から）

ＳＸ 173 周辺（南から）

図版 14



ＳＫ 145・160（北西から）

ＳＫ 145（北東から）

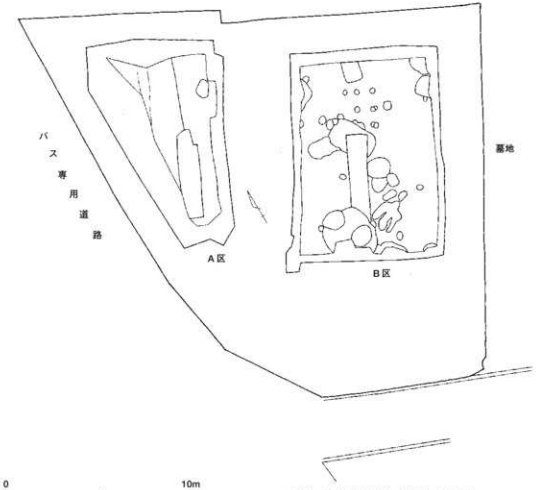
２区の調査

１．調査の概要

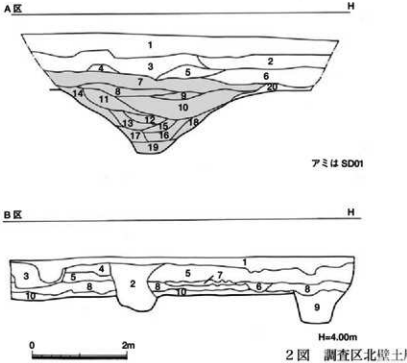
２区は馬出東浜線調査対象地の西端部にあたる所で、１区は墓地（ここも対象地で、平成 20 年度発掘調査を行っている）をはさみ東側に位置し、西側はバス専用道路が走る。北側は住宅地が接し、南側は１区から路地が続く。箱崎遺跡の縁辺で、試掘調査でも遺構、遺物の検出は少なかったところである。２区はすでに更地となっていたが、中央には南北の道路敷きが残っており、その下に水道などの埋設管が生きたままであったため、道路敷きを挟み東西両側にわけて発掘区を設けた。先に調査を着手した西側をＡ区、東側をＢ区とした（１図）。現地表面の標高は 3.2 m前後である。

2007 年（平成 19 年）５月７日、調査区全体の草刈りの後、Ａ区の表土剥ぎから調査を開始した。大溝（ＳＤ 01）の東肩が現れ、早速掘り下げにかかった。９日にはＡ区全体が掘り終わり、清掃の後、全体および個別の写真撮影を行い、また平面図、土層図などの作成も終えた。10 日から 14 日まではＡ区の埋め戻しとＢ区の表土剥ぎを行い、15 日にＢ区の遺構検出にかかった。Ｂ区は近現代の遺構がほとんどで、18 日にほぼ完掘し、全体および個別の写真撮影を行った。18 日から実測に入り、５月 28 日埋め戻しと器材撤収を行い、２区の調査を完了した。

２区の調査で検出したのは、大溝、土坑、井戸、ピットなどであるが、大溝とピットの一部を除け



１図　２区全体図（縮尺 1/200）



2図　調査区北壁土層断面図（縮尺 1/80）

ば、近世以降それも近代から現代のものが多い。出土遺物は弥生土器から近現代の陶磁器までみられるが、量は少なく、コンテナ２箱であった。

2．遺構と遺物

1）土層（2図）

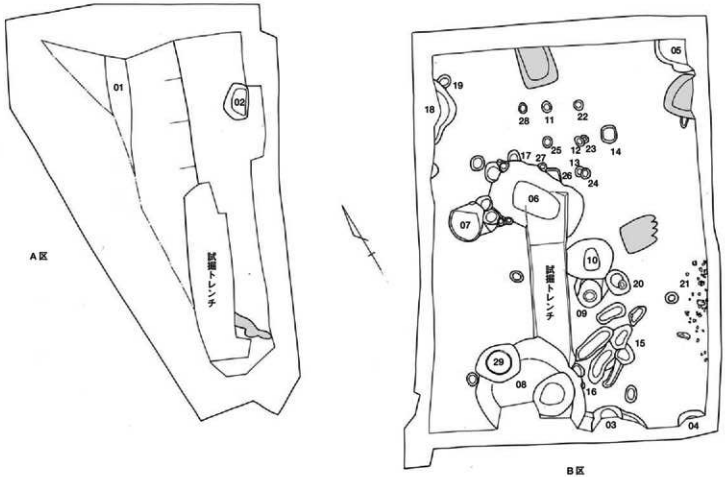
図の上にA区、下にB区の北壁土層図を示した。A区は１層（表土）－2･3層（近現代層）－4･5･6層(近世層)－20層(中世までの包含層)と続き、地表下 1.1 mで黄白色砂の地山に至る。20層を切ってＳＤ01が掘削され、7～19層はその覆土となる。B区は１層（バラス）－２･３層（現代撹乱）－４～７層（近現代層）－８層（近世層）－10層（中世までの包含層）と続き、地表下 0.8 mで黄白色砂の地山になる。9層はＳＫ05の覆土である。地山面はB区東端で2.45 m、A区の東端では2.35 mと西にわずかに傾斜する。A区20層、B区10層の包含層は黄褐色粗砂で、色も薄く、厚さも10 ㎝前後で、近世以前の利用が希薄であったことをうかがわせる。

2）遺構（3図）

番号を振った遺構は01～29の29基であるが、01が大溝、02が土坑、29が井戸、11～14･16･17･19･22～28がピット、21が集石である他はすべて近世以降、多くは近現代の廃棄物処理坑(塵穴）である。また29の９枚の瓦を組み合わせた井戸は近代以降の遺構である。ここでは大溝と近世以前の遺構についてみていく。

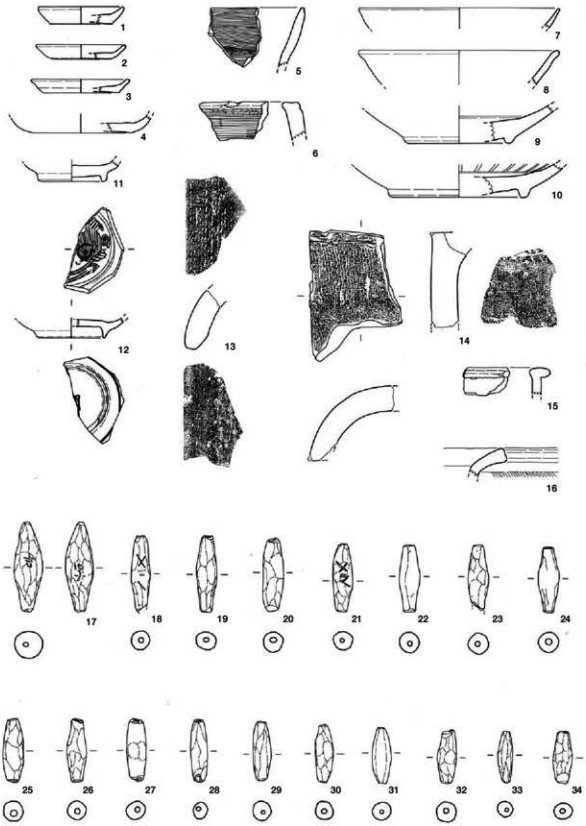
SD01　A区で検出したほぼ南北方向に走る断面Ｖ字に近い大溝である。西肩が調査区外にかかり正確な幅は知り得ないが、復元すれば3.5 m前後になるとみられる。深さは 1.6 m。溝底は幅 0.6 mの平坦面をつくる。包含層を切って掘削されており、その包含層が西に傾斜しているところからすると、砂丘が西に落ちる際に築かれた溝とみられる。覆土は下部ほど細かく分かれ、一部を除き色の薄い砂である。出土遺物はコンテナ半分ほどで、次項でふれる。

SK02　A区、ＳＤ01の東に位置する長さ 0.95 m、幅 0.75 m、深さ 15 ㎝の長方形状の土坑である。



3図　遺構配置図（縮尺 1/100）

アミは現代攪乱



4図　出土遺物実測図（縮尺 1/3）

覆土は暗褐色砂質土で、土師器甕片、白磁片が１点ずつ出土した。

SX21　Ｂ区の南東部の地山面で検出した。東側が発掘区外にかかり全体はわからないが、南北幅３ｍの範囲に５～30 ㎝大の礫が集まる。多くの礫は 10 ㎝前後の大きさで、玄武岩、砂岩、礫岩などその材質はまちまちである。礫の間から土師器杯皿の細片が出土した。

ピット　Ｂ区の北側に比較的集中する。径 20 ㎝のものが大半であり、深さも 10 ㎝前後と浅い。東北隅から時計回りにＰ 22、Ｐ 23、Ｐ 13、Ｐ 26、Ｐ 25、Ｐ 11 の同じ黒褐色砂質土を覆土にもつピットが、１間×２間（実長 0.9 ｍ× 1.8 ｍ）の建物を構成するようにみえるが、穴そのものが浅いこともあり確定はできない。Ｐ 11 から白磁細片、Ｐ 13 から土師器杯（糸切り底）細片が出土した。

３）出土遺物（４図）

SD01 出土遺物（1 ～ 15）　1 ～ 4 は土師器杯皿。1 ～ 3 の皿は口径 6.8 ～ 7.8 ㎝、器高 1.1 ～ 1.35 ㎝。底部は糸切り離し。4 は杯の底部片。糸切り離しで、割れ口は淡赤褐色であるが表面は煤けたように暗褐色を呈する。5 は土師質土器の土鍋、6 は瓦質土器の捏鉢のともに口縁部片で、内面は刷毛目、外面は横ナデ仕上げている。7 ～ 12 は磁器。7 は白磁椀口縁片で釉は灰白色。8 は龍泉窯系青磁椀片。化粧土の上に淡灰緑色に発する釉をかける。9･10 は龍泉窯系鉢の底部片。10 は見込みに圏線を入れ、そこから蓮弁文とみられる線描きを口縁部に向かって入れる。9 は見込みの圏線だけである。ともに淡灰緑色の釉を施すが、9 の高台内はそれを掻き取る。11 は青磁椀底部片。うすい緑褐色の釉を高台中央部を除き施す。12 は明染付椀底部片。饅頭心と呼ばれる見込みが緩やかに盛り上がった形態をとる。見込みには二条の圏線の内側に花文、外面底部近くと高台に横線、高台内には方格の中に文字らしきものを施す。薄い水色の釉で、文様部分は淡青～濃紺となる。釉は全面にかかるが畳付部分は削り取る。13･14 は丸瓦片。上面は縄目の叩き、内面は細かい布目が残る。15 は弥生土器口縁部片。丸みをおびた逆Ｌ字状の口縁で、上面内側寄りには刷毛目調整を行う。近世以降の国産陶磁器類はみられない。

その他の出土遺物（16 ～ 34）　16 はＳＫ 08（近代土坑）から出土した弥生土器甕口縁片である。外面胴部との境には刷毛目調整が残り、また外面全体に煤が付着する。17 ～ 34 はＳＫ 03（近代土坑）から出土した素焼きの土錘である。いずれも硬質で黄褐～赤褐色を呈する。17 の両面、18・21 の片面には文字がほりこまれている。法量は表にまとめた。

３．２区のまとめ

２区は箱崎遺跡の西南縁辺部にあたり、当初の予想通り遺構の分布は希薄であった。そんななかＡ区検出の幅 3.5 ｍの南北大溝ＳＤ 01 は予想外のことであった。遺跡の西縁、砂丘が傾斜していくところに築かれたとみられるこの大溝は、その出土遺物から 16 世紀後半頃のものとみられ、その覆土の状態なども考えあわせると存続期間は短かったようである。今回の調査ではまだその一部を検出したにとどまっており、溝の方向、役割、時期の確定など今後の調査に待つところが多い。

番号	長さcm	径cm	重量g	備　考	番号	長さcm	径cm	重量g	備　考
17	7.1	2.2	26.0	「古」「字」	26	5.0	1.5	10.4	
18	6.1	1.5	12.2	「×之？」、端部欠	27	5.0	1.5	13.4	端部欠
19	6.0	1.6	12.7		28	5.0	1.3	9.5	
20	5.8	1.6	14.9		29	4.7	1.4	9.0	
21	5.5	1.7	12.0	「×之」	30	4.5	1.4	9.1	
22	5.3	1.6	12.3		31	4.5	1.4	8.5	
23	5.2	1.7	11.2	端部欠	32	4.2	1.6	8.3	
24	5.2	1.6	10.8		33	4.1	1.2	5.4	
25	5.0	1.6	13.2		34	4.1	1.5	7.3	

表　SK03 出土土錘法量一覧

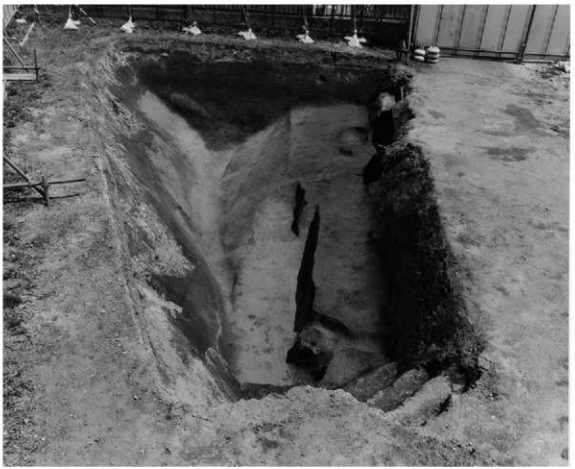


写真１　A区全景（南から）

写真２　A区全景（北西から）

写真３　ＳＤ01 土層断面（南から）

写真４　Ａ区とその西側（東から）

写真５　Ｂ区全景（南から）

写真６　Ｂ区全景（西から）

報告書抄録

ふりがな	はこざき
書名	箱崎36
副書名	―箱崎遺跡第47次・第55次調査報告―
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第1046集
編著者名	中村啓太郎(47次)　濱石哲也　蔵富士寛(55次)
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神1丁目8番1号　　TEL(092)711−4667
発行年月日	2009年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
箱崎遺跡第47次	福岡市東区 馬出5丁目地内	40130	0116	33° 36′ 46″	130° 25′ 24″	20040721 ～ 20050413	1,071	道路建設
箱崎遺跡第55次	福岡市東区 馬出5丁目地内	40130	0116	33° 36′ 50″	130° 25′ 13″	20070201 ～ 20070529	545	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箱崎遺跡第47次	集落	古墳時代 古代 中世	井戸　土坑　溝 柱穴	土師器　須恵質土器 瓦器　白磁　青磁 陶器　瓦　石製品　鉄製品	叩打痕文字瓦 青銅製椀
箱崎遺跡第55次	集落	中世 近世	土坑　溝 柱穴	土師器　須恵質土器 瓦器　白磁　青磁 陶器　瓦　石製品　鉄製品	

要約

第47次　道路建設に伴い、3地点の調査を行った。古墳時代前期、古代～中世の遺構を確認した。SE241出土の瓦は箱崎宮成立期前後のもので大宰府との関連が注目される。
55次調査では溝と土坑、墓などの遺構を検出することができた。時期的には中世前半期のものと、中世末～近世期のものに大別できるだろう。中でも顕著な遺構は各調査区で確認された溝の一群である。これらは中世末～近世期の位置づけることができるが、開創の開始は中世前半に遡る可能性も考えておきたい。

箱崎（はこざき）　36

―箱崎遺跡第47次・第55次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告第1046集

2009年（平成21年）3月31日

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷　株式会社　博多印刷